
Dance of Aether's! ~激情のメリーゴーラウンド~

Leonids

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dance of Aether - 激情のメリーゴーラウンド

【Zコード】

N9484J

【作者名】

Leonids

【あらすじ】

個々が持つ目的と誇りのために集つた五人のエーテル使いは、"生徒会"を結成する。異世界"イデア界"から侵攻する化け物"禍魂"と、人を守る"エーテル"たち。彼らの親 何十年と続く異世界戦争と想いは彼らの世代に引き継がれた。人の成長を描いてるつもり。尚、本編はHP『獅子座流星文庫』の転載です。なので更新が不定期になつてるかも。

DoAge "プロローグ" 其の1 - 1

俺はイライラとしながら腕を組んでいた。

なんでこうなってしまったのか。

すべての始まりはたった三日前。

たった三日前である。

その日その時までは普通 と言つには多少無理があるが、今のこの状況からすれば、それでもまだ静かな日常だったのだ。

ああ、そうですよ、そりなんですよ。

例え異世界からきたエーテルと呼ばれる厄介なものと契約し、俺がエーテル使いなんてもになつてしまつたとしてもだ。

更に言つてしまえば、例え俺が禍魂とか仰々しい名前で呼ばれる人間を喰つちゃう化け物を相手に戦つちやつたとしてもだ。

なんとも中学一年生と会話が弾みそうな俺の人生はどうに向かっているのか。

念のためだが、これは決して自虐的に言つてゐるわけではない、たぶん。

とにかくだ。結論的に言えればそんな漫画やアニメな状況まつしぐらの日常をえ、どうやらまだマシなものだったということなのだ。俺

が言いたいのは。

俺が契約した猪突猛進でおてんばなエーテルと共に禍魂と戦う日々は危険を孕んではいたが充実したものだった。

元々好戦的だったこともあり『戦つて勝つ』という楽しさを覚え始めた俺は若干頭のネジがゆるみ始めているのではないかと懸念している。が、日に日にエーテル使いとして力をつけていくのが実感でき、順調な毎日を送っていた。

これがである。

ちゅうじ二日前、ある事件が起つた。

どこから始まつていたのか定かじやない。なにをきつかけに始まつたのか定かじやない。が、結果として気づいたらそうなつてしまつていた。びっくりである。驚きである。驚愕である。もしかしたら俺は例の特異体質以外にも不幸を呼び寄せる体質を持つてゐるのかも知れない。もしくは、疫病神で憑いているんじやなかろーか、と本氣で悩んでしまう。

まあ何にせよ、こうなつた以上、俺は現実というものに眼を向けて強く歩いていかなければならぬのだろう。

そう心の中でもとめて、俺は振り返り、リビングの壁を見た。

そこには『新生・生徒会誕会!』の垂れ幕。

生徒会。言わずもがなアレである。あのお堅いイメージの集団。みんな眼鏡をかけていたりして、会議なんか開いたりして『きみはこ

の件をどう思つうかね?』とか言つちやつたりする集団である。と、多少偏見の眼で物を言いすぎだらうが、一生、俺が関わることはないだらうと思つていた学生組織には違いない。

生徒の代弁者・代表者と言えば多少の聞こえは良いかもしない。が、実のところ雑用だらけの厄介な職務。生徒会関係者には悪いが、俺は好き好んでこうこうものに関わる奴の気が知れないと常々思つていた人間だ。

ところが、『匠』の手にかかれればどうしよう!

そんな俺が生徒会に入るんだつて(笑)。

まさに劇的。

ビフォー。ちよつと負けず嫌いでやさぐれて、ものぐさな俺。

アフター。生徒会で生徒の代弁者として活動する波科高校の良心者。誰もが予想しなかつた『匠』の手腕に全米を代表して俺が涙しづ。余計なことしゃがつてと。

まあ、ここまでは百歩譲つて、苦虫を噛み潰す想いで、犬にでも噛まれたと思って、耐えよう。いくら沸点が低い俺でもこれしきで怒り心頭して怒鳴り散らしたりは

その時、どこからともなく飛んできた空き缶が『すーーんー』と小気味の良い音をたてて俺の側頭部にヒットした。

「物投げんなつつてんだろ、このボケビモー、終いにや喉から手

「つ、こ、んで奥歯ガタガタいわせんぞ、オラアーー！」

俺が怒鳴るといつもの如く喧嘩をしていたらじい一人の少女はお互いに指差して、

「ハ、こいつが悪いのよー 私が投げたんじゃないからね、トウヤー！」

「いいえ、貴女が投げました。私が棹矢さまを傷つけるような真似をするわけがないじゃないですか」と今度は罪の擦り付け合いを始める。

どうやら彼女らは喧嘩成敗という言葉を知らないらしい。

DoAge "プロローグ" 其の1 - 2

コホン。お見苦しいシーンを見せてしまって私個人と致しましては非常に遺憾に思う次第です。

お、今のは生徒会役員っぽい発言だ。

えーっと、何の話をしていたんだったか。

そうそう、生徒会に入るのは別に構わないという話だった。これに關しては俺にも関わらざるを得なかつた事情というものがあるし。まあ、やむなしというか、道がなかつたというか、崖っぷちというか、どん底というか……。

では何を不満に思つているのか。それはその生誕会がなぜわざわざ俺の家で行われているのか、という一点に気がかる。

お察しの通り、俺がいるのは片桐家つまり俺の家である。現在、リビングとキッチンが繋がつたこの部屋には俺を含めた総勢八人と二匹が机を囲んで料理を突いている。

そのメンバーは後々紹介するとして、今はまだ俺の愚痴を聞いて欲しい。

確かに俺には両親もなく（残念なことだが禍魂に食べられたらしい）、幼い妹こよと異世界からやってきたエーテル、リタとの二人暮らしだ。いや、三日前からこの家で住むことになった弥生さんを含めれば四人、四人か。

何が言いたいのかとこうと、詰まる所、騒いだといいで文句を言ってくるような人がこの家にいないといふことである。こよりにリタ、弥生さんは一緒になつて楽しんでゐるよつだし……。

しかもこの北桐家は親の代から共同賃貸なんて経営してゐるもんだから無駄に部屋はあるし、リビングも多少は広い。

会場をここにすむ理由も、まあ分からなくはない。

けどだ……一

俺は額に青筋をたてたまま部屋を見回した。

いたるところに転がっている紙を出すと空き瓶。

「近所にも聞こえてこそうな大声。

飛び交う怒号と散乱する家具の残骸。

ガリガリとテーブルの足で仄どきをする白猫。

注意する家主（俺のこと）を放つてどきやん騒ぎを続ける新生・生徒会メンバーたち。

「お前ら全員いい加減にしやー。」

叫んではまるものの、もはや俺の言葉に耳を貸す者はいなかつた。

「はははー、なに怒つてんねや、かつちゃんー、ほら、かつちゃんも飲みいやー」

ヒビールの缶を俺の頬に押しつける俵先輩。

俵衛助。俺の一つ上の先輩である。嫌でも眼につく赤髪と底が抜け
るほど明るい性格、それに関西弁といふこともあってか、学校では
目立つことの上ない人だ。

ここ三日で分かつたことだが、この人もどうやら俺と同じ非日常側
の人間だつたらしい。

俺はぐいっと俵先輩の首に腕を回し、彼の頭を脇に挟むと思いつき
り締め上げた。

「ぎゃああー キマつてるつてー 入つてるつてかつちやんー！」

「ばしばしば」と俺の腕を叩いてタップしてくる。これで懲りただろ
う、と俺が彼を解放すると、先輩は首を左右に振つてゴキゴキと鳴
らした。

「なんやー？ えらぐ」機嫌斜めやなー

「そりゃ機嫌悪くもなりますよ。この状況なら

「よっしゃー 機嫌直しに俺が笑い話を披露したるわー！」

「いや、いらないっス

「ある男とその妹がおつてな。その妹さんがな。毎朝早くに起きて
家事をこなすできた娘っ子らしくてな。日頃の感謝を込めて男は妹
に有效地に使つてくれつてプレゼントを贈つたらしいねん」

いらないと言つてゐるのに勝手に話し始める俵先輩。

「そのプレゼントっていうのが声を吹き込める目覚まし時計やつたらしいわ。男は朝早く起きる妹に氣い使つたんやろーな。

まあ實際、妹さんはそのプレゼントにそら喜んだらしいわ。ところがどつこに次の日や。いつものように男が妹の声で眼え覚ましたんやけど、妹の姿がどこ見てもないねん。したら昨日、妹にプレゼントした目覚まし時計が枕元にあつてなー。どうやらそつから妹の声がしてたらしいねん」

「…………」

「男は妹になんで自分のところに目覚まし時計があるんか質問したんやと。そしたら妹はこう答えたそうや。『それが私にとつて一番有効な使い方なんだもん』ってな。

男は余計に凹んだつて話や！ 笑い話やろー アホな男やで！」

かんらかんらと笑つて俺の肩を叩く先輩。

「あははは！ そりやバカですね！ つて、それ俺のことじゃねーかよ！」

俺はエーテル・エネルギーを体に込めるとき先輩の胸にドロップキックでツツコミを入れた。

エーテル・エネルギーで筋力が何倍にも強化された俺の蹴りを受けて、俵先輩の体がボールみたく派手にふつ飛び。

「どがしゃあああんん！」

豪快にふすまを突き破つて隣の畠部屋まで転がる俵先輩。

「はははー、ええツツ「ミリや、かつちゃん！ 新喜劇でもここまで派手に「ケヘンでー！」

俵先輩は頭から血をだらだら流しながらかんらかんらと笑つていた。

が、不意に眼の色がふつと洩えて白目になるとそのままばたんと背中から倒れる。

よし、一人排除完了。片桐家の喧騒度が一 %低下。

「ちょっと一悼矢くん、あんな奴に構つてないで私の相手してよー
……いつく……」

と横からくいぐいと服の袖が引っ張られた。

声のした方を向くとそこには同じく生徒会メンバーとなつた美姫先輩の姿。その顔はどこか虚ろで眼が据わつてゐる。

「美姫先輩、どれだけ飲んだんですか。顔が真っ赤ですよ」

「桧流間美姫！ 乙女座のB型、趣味はゲームセンターの射撃ゲームです」

「知つてます」

桧流間美姫。身長は俺より少し低いぐらい。マロンブラウンに染められた髪は肩まで伸び、好奇心旺盛なところが分かるような丸い瞳の女性だ。だが童顔というわけではない。美姫先輩は可愛さと美しさを持ち合わせているのだ。性格もそんな感じで子供っぽいところがあるかと思えば、大人びた口調で俺を注意したりもする。今は波科高校の制服に身を包んでいるのだが、制服の下に着ているらしいパークーのフードが制服から出ていた。

彼女、桧流間美姫との付き合いは長い。

美姫先輩はここから少し離れたところにある桧流間家の一人娘である。

詰まる所、『近所さんなのだ。

もともと両親と交流のあった桧流間家は両親が行方不明になつた俺とこよりを心配して、昔からいつもよくしてくれていた。そのせいか俺やこよりにとつて彼女は姉のような存在で、実際、美姫先輩も俺やこよりのことを弟や妹のよつに扱つてゐるふしがある。

「ノリが悪い！」

「うー！」

いきなり眼にも止まらぬ速さでアッパーを打たれた。

「うひえ！ 何するんですか美姫先輩！」

俺はアゴを撫でながら涙目で先輩を見た。

「私はね！ 嬉しいのだよ！」

真っ赤な顔してふらつき、食器棚にぶつかりながら俺を指す美姫先輩。この人、本当に絡み酒だなあ。

「はあ……何がですか……」

「エーテル使いとして話せることがよ！」

ごがつ！

今度は左のフックが俺の頬に入つた。

「なんで一度も殴るんじゃ、あんたはー。」

「悼矢くんのことが殴りたいほど好きだからよ……いっく……」と
眼が据わったまま、しゃつくりをする。

答えになつてねえ！ つていうか、あんたいいつからそんなドSになつたんだ！

「美姫先輩、美姫先輩。指何本に見えますか?」

俺は彼女に人差し指、中指、薬指をたてて見せた。

「んー、パンダ」

……ダメだ。完全に酔つ払つてる。

「つていうか、先輩……！　あまりH-テルとかは言わないでくださいよ……！　こよりが聞いたらどうするんですか……！」

俺は美姫先輩の腕を掴んで、耳元にささやいた。

「こよりはエーテルだの禍魂だのといつ非日常の世界を知らない。といふか、知つて欲しくない。

「こよりはまだ幼い。幾らなんでもこの世界に異世界から化け物がやってきて人間を食い荒らしているなどといつ」と知るには早すぎる。

「なあーんでー。気持ちはわー。分からなくもないけどわー。いいじゃないバレてもー……っく……」

ぐびりと缶チューハイに口をつけ横田でこよりを見る美姫先輩。

「ダメです」

有無を言わさぬ俺の表情に「ふー」と両頬を膨らませる。

「あーあ。彼女よりも妹が大事かあ」

『いつく』としゃつくりをしながら席に戻ろうとする。

「誰が彼女なんですか、誰が」と一応のツツコミを入れてあげると、美姫先輩は嬉しそうにぐるっと振り返った。

「ひどいわ、悼矢くん！　私のことは遊びだったのー？」

急に「アニメ声になつて眼をつむつむといわせ、両の拳を口元に持つていいく。

いきなりスイッチが入るな、この人。

「あの夜、あんなに激しく私を求めてくせに…」

床にしなだれ倒れ、しくしくと袖で涙を拭う。

「××なんか×××して×××だつた私を××××××××のに…」

しかもどうやら止めるスイッチはなさそうだ。放送できない言葉が多すぎて何を言つてるか分からなさ全開である。

「つーか、未成年だつて分かつてるんですか。飲みすぎですよ」

「えへへ～、『めんね悼矢くん。おわびにちゅーしてあげる　ちゅー』

俺の首に腕を巻いてくる美姫先輩つてうわ酒くせつ…?

「離れる、この酔っ払いが！」

唇を近づけてくる先輩の顔を両手で突き飛ばす。

その勢いでがつん、と後頭部を食器棚にぶつけさりに足が覚束なくなっているがきっと彼女なら大丈夫だらつ。

と、その時だ。

だん！

と机の上にのぼる人影。

「何が“ラグナロク”よ！たかがエーテル犯罪者ごとき、敢然で俊敏でまるで勝利の女神が如く完璧な采配を揮う聰明なわたくしの新生・生徒会の敵じやありませんわ！！」

机の上でひどい自己評価をしながら叫んでいるのは何を隠そうと狭霧鏡花生徒会長だ。勝利の女神が聞いたら泡吹いて倒れそうな台詞だ。

「いいぞ、会長～！」と美姫先輩、

「いいぞ、お嬢～！」と盛り上がる俵先輩。

つて、俵先輩もつ目覚めてらー？

あの一人……すぐに喧嘩するくせにこいつはだけはきつちり合わせるのな……。

狭霧鏡花。それが彼女の名だ。髪の毛を右側に纏めてぐるぐる巻き髪のドリルにした髪型。なんでもどこぞの令嬢らしく、今の今まで生徒会を一人で運営していた才能豊かな豪傑でもある。人柄はともかく、家柄、能力、容姿、権力を持ち合わせた人物なのだ、人柄はともかく。

馬鹿と煙はなんとやらというが……。一いつ、ほんと高いところに登るの好きだな。

「下僕その一」

不意に会長様が俺を見た。

「なんだよ。つか、名前覚えろよ、お前」

「名など必要があれば自然に覚えるものだわ。それに貴方のような愚鈍で使い様もない人間の名を覚えるために、高名で崇高なわたくしの頭の容量を占拠しようなどとはおこがましいにもほどがありますわ。恥を知りなさい…」

相変わらずの毒舌ぶりである。

名前覚えろと黙つて恥を知りなさいと返つてくる意味が俺にはどう頭を捻つても理解できなかつた。少なくとも勝利の女神はこんな返しをしないと俺は思つ。

「それよりも手を貸しなさい。降りられませんわ」

そしてどうやら一人で降りられないらしい。

お前は自分の力を試すかのように、ひたすら高い木に登つた子猫か……。

「その態度が人にものを頼む時の態度か？ ああん？」

俺が下からガンをくれてやると鏡花はいつも持ち歩いていた新しい黒い扇子を片手で振つて広げ、口元を隠した。

「何か勘違いしているようですね。貴方はわたくしの下僕ですの

よ。下僕が主人にかしづくのは至極当然の行為ですわ。それに何の支払いもなくわたくしの愛らしい御手を触れるのですから、これはむしろ貴方にとつて僕倅といったところでしょ。」

普段は金どんのかよ！

「あのなあ。俺はそもそもお前の下僕になつた覚えはねえぞ」

「あらあら。あらあらあらあら。

では貴方の勘違いでなくわたくしの勘違いといふことにしておしあげますわ。わたくしはてつきり貴方の出資者だと思っていたのだけれど。どうやら雇用契約は破棄されてしまつたようですね。はてはて借金一千万円をビリ返すおつもりなのかしら。

「へつ……！」

借金一千万。

そうだった。これは今日俺が告げられた新事実である。先日の大騒動で俺が負うことになつた負債。

両親のいない俺の稼ぎ口はエーテル使いとしての仕事で出る報奨金と毎月振り込まれる謎の生活費のみ。これでこよりや大飯食らいのリタを養つてのは土台無理な話である。新たな入居者である弥生さんは家賃と生活費を払つてくれているものの、そんなものリタと弥生さんの喧嘩の後始末をするだけで足が出る。つまり、借金を背負つ前から赤字状態だつた我が家。

詰まる所、俺は今このいけ好かない自己顯示欲の塊みたなお嬢様

に逆らえないわけである。

自分のプライドを保持するための自己弁論終了。

「へーへー。お嬢様の仰せのまま」

俺はやる気なく手を差しだした。

「あら。いいんですのよ。無理なんてしなくても。大地母神のよう
に暖かな優しさを持つわたくしですもの、貴方が嫌だといつのなら
無理強いなどさせらるわけはありませんわ」

「お嬢様の御手を取れて嬉しいなああああ！　俺は幸せものだなあ
ああ！」

やけくそ。

「あらあら、そこまで声を大にして言つほど嬉しいのかしら。可愛
い下僕ですこと。貴方では多少役不足ですけど、仕方なく使つてさ
しあげますわ」

てめえが言わせてんだろーが！

片側ドリルの髪を手で背中へと流して、俺の手を支えにするお嬢
様。

俺はピキピキと額に浮かび上がる青筋と腹の底から煮えたぎる怒
りを抑えながら言った。

「ありがとウ。……」やれこます……！」

「やれやれ。これからおサルさんの躰が必要ですわね」

鏡花は優雅に椅子に座るとナフキンを腰辺りにしげて食事へと戻つた。

くそお…………このアマ…………！　いつか逆の立場にしてやるからな……！

俺は鼻息も荒く自分の席についた。

DoAge "プロローグ" 其の2 -1

そして自分の料理皿を見て固まる。

「はぐはぐはぐ

俺の皿線の先。そこには俺の料理を食べるしらたまの姿。
しらたま。ショットチャウの家に遊びにくる野良の白猫だ。大変
こよりが可愛がつており名前もこよりがつけた。のだが、ついこの
間、ひょんなことから彼女がオリジンであることが発覚する。

オリジンを分かりやすく説明するならばエーテルが進化した形態
のことを言う。あれだ。エーテルがコイキングならば、オリジンは
ギヤラドスである。力の差は歴然。オリジンたちは街一つ軽々と破
壊するほどの強さを秘めている。

そんな化け物染みた存在がこの白猫なのだ。

「おい」

俺が声をかけると、しらたまは顔をあげて俺を見た。

だがすぐに顔を下げる、また料理を食べ始める。乱雑に食べている
せいで料理が皿の外へと飛び散つてしまっていた。

「こりゃー 無視すんなよ！」

そんないしらたまに眼をつけた人物がいた。

「ほ～ら、キミも飲んでみる～？」

美姫先輩である。封を開けたての一升瓶を持つてしらたまに近づいていく。

「…………」

しらたまはその危ない雰囲気を感じ取ったのかふいつとしつぽを向いてテーブルから降りようとしたり。

だが。

がしつ！

「エエエー。」

先輩はしらたまのしつぽを掴んだ。

しらたまの耳がびっくりしてぴんと跳ね上がる。

そして先輩はそのまましつぽを引っ張り、自分の胸に抱くと、一升瓶をじらたまの口へと向ける。

しらたまがじらひらひらに向かって鳴く。

「エエ～！ エエ～！」

どうやら俺に助けを求めてこらへるらしい。

だがそれは無理な話である。

俺の皿の上のものは不可侵条約で結ばれていたはず。締約を破棄したのは貴様の方だ、しらたま。

「」愁傷様

俺は小さく咳いてしらたまに手を合わせた。

「裏切りも」ぼつー

先輩がしらたまの口に瓶の口を突っ込む。

突っ込む寸前に何か聞こえた気がしたが、まず間違い無く、空耳で、俺の妄想で、気のせいだろう。

猫が喋つたりなんてするわけないしな、はつはつは。

「ほほほ」と音をたてて空気が入る一升瓶。

それに合わせて「ぐぐぐ」としらたまの喉が脈打つ。

「あはははははははははー」

それを見て何が面白いのか美姫先輩は大爆笑している。

きゅほんつ！

美姫先輩は酒をすべてしらたまの口に流し込むと一升瓶をしらたまの口から抜いた。

「キリ良い飲みっぷりだねえ～！ おねーさん気に入っちゃったよ～！」

本人も完全に出来上がっているらしく、顔を真っ赤にしながら舌をべろんと出して眼がうつろなしらたまに頬ずりする。

悪いな、しらたま……。その人に皿をつけられたのがお前の運の足りだつたんだ……。

オリジジンでも適わない美姫先輩つて……この人いすれ世界を崩壊させるんじゃなかろーか。

「「」うそーたまが～？ 聞こえない～」

言えるわけねえだら、と心中でシッ ハリを入れておく。

どうやら美姫先輩はかなり酔つていらっしゃるようついである。絡んでいる相手が猫だということを理解しているのだろうか。

よく見ると美姫先輩の眼は渦になつてぐるぐると面白いほど回っていた。

美姫は こんらん している！

わけもわからず しらたまの口に 一升瓶を つっこんだ！

つかそのフリだと永遠ループしませんか美姫先輩……。

美姫先輩がもう一本新たな一升瓶を取り出したのを見て、しらた

まは自分が白猫モードであることも忘れて口を開く。

「...レーベル、ナムル」

だがその『ゴ馳走様』は一升瓶の熱い口付けによつてふせがれてしまつた。

無限ループって怖くね？

しらたまのだべのこしを箸で擣んで口へと運んだその時だつた。

ぼんつ！

ついにしらたまの腹が破けて爆発でも起きたのかと思ひほどの音とともに白猫が白煙になつた。

『はふへへ～』と意味の分からないうわ言を呴きながらくると眼を回している。その少女のお尻あたりから白い尻尾が一本、によろりと出ている。

彼女こそしらたまの真の姿であった。化け猫のショウ。齢不明（一四あたりで分からなくなつたらしい）。波科高校近くにある寂れた神社に住む狐のオリジン、言の葉と共に波科の街を守つているオリジン。

「ਕਿਵੇਂ ਹੁਣ - ?」

思わず俺は口に含んでいたものを吹き出してしまつ。

おそれらくアル「ホールに呑まれて変化が解けてしまったのだろ。」

「なんぞ世界がまわつておるのじゃー」

猫耳少女は真っ赤な顔で伸びていた。美姫先輩もしらたま（猫耳少女バージョン）の下敷きにされて氣を失っている模様。

がしつ！

「わおーいっーー！」

俺は誰かに見られる前に猫耳少女の襟首を掴むと、隣の畳部屋に勢いの良い掛け声と共に彼女を投げ込んだ。

「熱いー、熱いぞ悼矢ー。儂の身体が焼けてあるよつじやー。やれ、帶をゆるめてたもれー」

力の入らない手でかりかりと俺の胸を搔いてくるじらたま。

「だあー、こんなとこりで脱ぐつとするなー、じよりと見られたらどうするー？ さつさと猫に戻つてくれ！ あとドプリンゴもういふりでもなんでも食わせてやるからー！」

俺はしらたまの胸倉を両手で掴んで揺らがつた。

「無理じゃー。あーいーぬとやせこで力が制御できんのじゃー」

俺に搖らされ、頭ががつくんがつくんとなりながら眼を回し続け
るじらたま。

これがかのエーテルが進化することで成ることができるという上位存在オリジンだのうだから笑える。かのヤマタノオロチがそうであつたようにオリジンも酒には勝てないか。

その時だ。

「悼矢ちゃん？ ビックしたの？」と背後から「よつ」の声がした。

びくつ！

俺の肩が震える。

俺はしらたまを布団が入れてある押入れの中に押し込む。

「ふきや！ 何をするもがつ！？」

俺は「よつ」へと振り返ると後ろ手に押入れの扉を閉めた。

「な、何でもないぞこより！」

何度も言つがこよりはエーテルだの禍魂だのといったことを知らないのだ。しらたまが実は猫耳少女だなんて知られるわけにもいかない。知つたら知つたで、喜んで可愛がりそつだが、それはそれ、これはこれ。

DoAge "プロローグ" 其の2 - 2

額に脂汗を搔いている俺の顔をじっと見ると、じょろつぽんじゅる
つに眉を曲げる。

「…………。悼矢ちゃん。押入れに何を隠したの？」

「な、何も隠してないってー！」

「…………怪しい。もしかしてまた壊したの？」
動く。

一ヶ月ほど前。リタがこの家にきた時、部屋をぶつ壊したこと
思い出していくのだろう。じょりの顔が渋くなっている。

「どいて」

じりつと詰め寄つてくるじょり。

「ダメですって、じょりさん！ それだけは……！」

背中がぴたりと押入れにくつづく。その背中にだらだらと脂汗が
流れ、服が張り付く。

やばいやばいやばい……！ どうする！？ 猫が人間になつたな
んてどうやつて言い訳すりやーいいんだよー。いや、リタや弥生
さんが来た時もその姿にはまったくツツミを入れなかつたこより

だ！ 猫耳だわ！ と尻尾が一本生えてよーと案外、なんてこたーないのか！ ？

かりかりかり……。

ふと後ろから扉を爪で引っ搔く音が聞こえた。

『いやー おー』

出してたもれー、とでも言つよつにしらたまの鳴き声がしたので、扉を開けてみると、その隙間から白猫に戻つたしらたまが出てくるではないか。

その姿を見て俺はほつと胸を撫で下ろした。

「もひつ、悼矢ちゃん！ しらたまをこんな所に閉じ込めちゃ可哀相じゃない！」

「はい、すいません」と俺は素直に頭を下げる。

「あー、なんで俺がこよに怒られなきやいけないんだ……！」

俺は恨めしく美姫先輩を見ると、力尽きたのか倒れたままぐーすかと幸せそうに眠っていた。

ひきひき！

出できたしらたまはふらふらと千鳥足で畠を歩いていく。が、足がもつれさせこけになつた。けまいと体制を整えよつとするしらたま。だが、うまくいかずさらに足がもつれ、タタタタと左側

へ体が流れていき、ついには壁に頭をぶつけた。

が
つ
ん
！

「ふにゅー！」

「しらたま！？ 大丈夫！？」

すぐさま、倒れたしらたまを抱きかかえる」より。

「一九四一」

猫の変化は解けぬものの眼を回したままのしらたま。

——信じられない……。しらたまにお酒を飲ませるなんて……。

惣矢ちゃんの黒鹿！
大嫌い！

かん！？

俺の胸を突き刺さる一言が発せられた。

俺はその深い傷を押さえ、置に膝を落とした。

「おまつは、一つと白い歯を見せるといつたまを胸に抱きかかえたまま、自分の席へと戻つてゆく。

その自分の席というのが、八神の隣で横になつて静かに眼を伏せているライオン、レオの背中だつたりする。

背中に座られたレオは片目を開いたが、自分の上に乗ったのがこよりだと分かるとまた眼を閉じた。

レオはハ神のエーテルである。

と言つからにはハ神はエーテル使いだ。

ハ神きづな。黒髪、腰まで届く長髪のクールビューティー。常に冷静、無口、独りで行動することを好む少女だ。しかし、生徒会四名の中で一番信頼のおける人物だろうと俺は思う。

エーテル使いとしての戦い方や、エーテル・カードのことを教えてくれたのも彼女だ。

一ヶ月ほど前、凶悪なエーテル使い藤島と戦つた時もハ神とレオは持ち前の連携力で活躍していた。

エーテル使いとしての力量もさることながら、彼女はなんだかんだで優しい心根をした奴……だと分かるようになってきた。

無表情のような鉄仮面の下にある感情。それを伺い知れるようになつたのだ。

それにハ神に関しては気になることもある。“拒絶されし子”と呼ばれ、誰も信用せずに独りで生きる彼女。俺はそんなハ神をどこか放つておけないのであった。

そしてやはりと言つべきか今回の馬鹿騒ぎにも特に加わる気はないようで、だが便宜上は生徒会の一員ということもあってか、机の隅っこの方を陣取りもくもくと栄養の摂取をしている。

「うむ。これもおいしいな」

キャベツロールを興味深く噛み締めるハ神。

「えへへー。濃厚でしょー？ お肉とキャベツに下味を付けてから煮込んであるんだよー？」

「ああ。こよりは天才だな」

ハ神にぼむと頭の上に手を置かれ、こよりは照れるように笑った。

あの二人、ほんと仲良くなつたもんだよな……。

兄として妹をとられてしまつたような嫉妬心を感じながらも俺は自分の席についた。

とにかく一息つい……。

やれやれと俺は乾いた口を潤そつと飲み物を手に取る。

すると、いきなり美姫先輩が口を覚ましたらしく、ぱつと立ち上がつた。

「はいー」と元気よく手をあげる美姫先輩。

だがその顔はまだ赤く、ビツ見てもまだ酒が回つている。

「一番、比留間美姫！ 乙女座のB型、趣味はゲームセンターの射撃ゲーム！

歌つて踊ります！」

刹那！

美姫先輩の身体から七色のエーテル・エネルギーが溢れ、体を光が包み込む。

「どれすあーつぶ」

光が止むと、そこには彼女のエーテル“星屑のドレス（スタージヤケット）”に包まれた姿。白を基調としたくるぶしにかかるほど長いコートに短いスカート。胸には変な紋章の入った胸あて。至るところに細かなデザインがなされたその変身（？）した姿はひとつ見ても魔法少女のそれである。

ピースを横にして目あたりで重ね、キュピーンとポーズを決め
る美姫先輩。

その決めポーズ毎回やるんだ……。

俺は敵のエーテルが美姫先輩を見てドン引きしていたのを思い出していた。あいつらも可哀想な人を相手にしたと思う。

そんな俺の思考をよそに、彼女は空になつた缶をマイクにするとお気に入りのアニメソングを歌いだす。

「ほ～しを～まわ～せ世界の真ん中で～

「美姫先輩！ うるさいですって！ 近所迷惑になりますから音量

を下げる。「本気のカラダ見せて付けるまでわたししねむうへりないー

「本気のカラダ見せて付けるまでわたししねむうへりないー

」

「機嫌そうに歌い続ける美姫先輩。

永眠させいやうか、このアマ。

思わず手元の大皿を掴んで投げつけようとしていた自分に自分で驚いてしまう俺。

「悼矢さま。そんなにぴりぴりしないで下をこまし。私はこのよくな楽しい席につけて嬉しいですよ」

そう言つたのは弥生さんだった。

先ほどから俺がてんやわんやとしていたのを見ていたのだらつ、どこか苦笑いを浮かべている。

和泉弥生。それが彼女の名前である。赤い着物に白の袴を着た巫女のような格好をした和風美人。黒い艶やかな髪は後ろで白い紐で結われポニーテールになっている。その色っぽいなじに定評のある弥生さんである。ちなみに趣味は俺を見ていることらしい。ふとした拍子で弥生さんを見ると、必ずといつていいほど眼が合つてしまふのだ。そして彼女は恥ずかしそうに頬を赤らめるという習性を持つている。

「どうぞ、オレンジジュースです。これでも飲んで落ち着いて下さいまし」

巫女服の長い袖を片手でおさえ、俺のコップへジュースを注いでくれる。

その一つ一つの拳動が弥生さんは洗練されているというか、流石は京都、大和撫子の名産地だ。

「あ、すいません……。有難うござります」

俺は弥生さんから注がれたコップのジュースを一気に喉に流し込んだ。

少し喉が焼けるような感覚に違和感を覚え、俺は弥生さんにグキキと首を鳴らしながら視線をやつた。

「弥生さん。もしかしてこれ

「あらまあ、すみません。アルコールが入っていたようです」

絶対にわざとだ、この人！

笑顔のままのたまい、あらあらと袖で口元を隠す彼女を見て俺は確信していた。

「と、悼矢さま……。それで、あの……」

人差し指同士をちょんちょんとくつつけながら、少し恥ずかしそうに上目遣いで俺を見てくる弥生さん。

「その……宜しければ今夜にでも契約なんかを

どくり、と胸の鼓動が否応なく高鳴る。

少し赤らんだ彼女の頬、うるんだ瞳。その表情から彼女が本当に俺との契約を望んでいることが伺い知れた。

彼女はエーテルだ。それもどうやら俺と最初に契約するはずだつたエーテル……らしい。だが俺はすでに常に全力、突撃と破壊ならお手の物という恐ろしくイノシシなエーテルと契約してしまつていたため、それを知った時大変なショックを受けパニックになつていらつしゃつた。

至近距離で見詰め合つ俺と弥生さん。

そんな弥生さんの首根っこを掴む人物がいた。

「はいはい、そこまでー

リタである。

リタは有無を言わさぬように、俺と弥生さんの間に体を無理やりねじ込むと、その場に陣とつて座る。

リタ＝ルクライル。歳の頃は俺と同じくらい。上質の金を溶かしたようなサラサラの髪を背中までストレートに流した髪型。見るからに気が強そうな女性である。更に詳しく言つなら高飛車でプライドが高くて強情で意地つ張りで頑固な女性である。しかも敵を発見しようものならご主人様をほつたらかしにして一人で突つ込んでいくようなイノシシである。この一ヶ月で俺が何度『おい、こら！俺を置いて行くな！』という台詞を彼女の背中に投げつけたか分か

らないほどだ。

しかしだ。俺にとつてやはり頼りになるヤツなのだ。手のかかるヤツほど可愛いとはよくいつたもので、可愛いげがないのがもうぐるつと一回転しちゃつて可愛いというか……。

今はノースリーブのハイネックセーターにホットパンツ、黒いニーソックスというラフな格好をしている。その細い右肩に刻まれた赤い文様は彼女がエーテルであることを示している。どうやらリタは動きやすい格好が好きらしく、短パンやホットパンツを履いては自慢の足を見せびらかしているふしがあった。こよりの服を着ているせいもあってか、彼女には少し小さいらしくホットパンツのチャックが最後までしまらず白いショーツがちょこっと見えてしまっているが、特に彼女は気にしているようである。

そして「トイツ」さんが俺と契約しているエーテルなわけだ。

「おい、リタ……。何もそこまで」

「なによ。文句あるの」

と不機嫌そうに睨んでくるリタさん。

弥生さんがきて分かつたことだが、どうやらリタは嫉妬心が強いらしい。いや果たして嫉妬心と呼べるものかは怪しいが、気に入つたものを取りられるのは我慢ならないようなのだ。そのせいか、リタと弥生さんは会つて間もないというのに数々の衝突を繰り返しているのだった。

「トウヤは私の主人なんだから、私が隣に座るのも当然でしょ

ふん、と鼻を鳴らすリタ。

またそつやつて弥生さんを煽るし……。

「あら、リタさん。その言葉には甚だしい間違いがあります」と弥生さん。

「へえー。何が間違いなのか是非とも教えてもらいたいわね」とリタ。

「悼矢さまは地球が生まれる前から私のご主人様です。そして未来永劫、私のご主人様です」

きつぱりと言い放つ弥生さん。

「言つたでしょ。トウヤは私のものよ。アンタがどうしようが、この事実は変わらないのよ」

そしてリタの方もきつぱりと言い放つ。

ぱぢぱぢぱぢつ！

二人の視線が真つ向からぶつかり火花を散らす。

またかよこの展開……。何度もやつて飽きないのか」につら……。

「そんな小さな器で貴女が悼矢さまのエーテルだなんておこがましいですね」

弥生さんは何でもなかつたように視線を反らすと手元の彼女が愛用している湯飲みに手をつけ、ずすずとお茶を啜り下す。

「アーヴィングに執着するあなたの器の方が小さいんじゃないの？」

「なんですか……！ 私がどれほど想いを抱いて京都から来た
かも知らずに、よくもぬけぬけど！」

バンツと机を叩き、立ち上がる弥生さん。

「そんなもん知つたこっちゃないわよ！ トウヤは私のものって言つたら私のものなのよー。」

対してリタも立ち上がる。

理論的な考へで物を言つ弥生さんとただ感情だけで物を言つリタ。この二人はほんと色々な面で真逆のタイプであつた。

「そんな子供みたいな言い訳をして……！ 本当に器の小さい方ですね……！」

「そんなに器が戻になるのなら、小町かどりか試してみる……。」

売り言葉に買ひ言葉。

リタから赤いエーテル・エネルギーが漏れ出す。

「まだ懲りないのですか、貴女は」

「ええぞーー！ やれやれーー！」

弥生さんからも緑色のH-テル・エネルギーが滲み出る。

「ええぞーー！ やれやれーー！」

無責任に煽る俵先輩。

俺は額に手をあててため息を吐いた。

もつ勝手にしてくれ……。

もはや彼女らを止める元気は俺に無かつた。

不毛だ。

不遇だ。

こんなメンバーでエーテル犯罪者集団に勝てるところのどうつか……。

いや、そもそもこんなメンバーが生徒会なんて運営していいのどううか。

なんでこことになつてしまつたんだ……。

三日前。

そう。三日前からすべては始まつたのだった

Dance1 “集うHーーテル使い” 其の1 - 1

生徒会生誕会から遡ること三日前。

俺は友人たちと共に学食のテーブルを囲っていた。

昼休みといふこともあってか、食堂の中はいつも通り混雑しており、レジ付近では朝一の競りかといふくらい人が群がっている。

残り少ないパンと弁当を手に手に壮絶な奪い合いと殴り合い。

と、言つのは流石に過剰表現ではあるが、あの集団の中に入つて無傷で帰つてくるのは難しいことに違いない。

そんな阿鼻叫喚な集団を傍観しながら俺はミートボールを口に入れた。

めしうまー。

ミートボールを噛み締めると、なんと驚いたことに中からとろりととろけるチーズが肉汁と共に溢れ出すではないか。

俺が持つ弁当を作つたのは我が妹であるこよりなのだが、愛妹は日に日に料理のスキルが高くなつてゐるよつて思つ。

それも日がな一日、家でじるじるしてゐるリタが『あれが食べたい』『これが食べたい』といふことを困らせた結果なのかも知れない。

「絶対に変だよな」

不意に鍊太郎がぽつりといきなりそんなことを言いだした。

七橋鍊太郎。身長は俺と同じか少し高いぐらい。一昔前に流行ったウルフヘアーの男子生徒。なんだかんだ一緒に行動することが多い俺と鍊太郎ではあるが、親友というよりも喧嘩仲間といった表現が最も近い。

と言うのも俺と鍊太郎の間では一週間に一回の割合でガチ衝突、ガチ殴り合いが勃発するのだ。

原因はとてもささいなことである。

例えば、テストの点数が一点高かつた（といつても一人とも赤点）とか、腕相撲をしているうちに本気になつて殴り合いへと発展……などなど。挙げればキリはないだろう。

そんな俺たちではあるのだが出会つた中学時代からもう既に数えて四つの春が経過している。

こういうのをウマが呟く、とか言つんだらうか……。

鍊太郎の向かいの席に座つていた古河来が弁当から顔をあげるとオウム返しに訊き返す。

「変つて……何が？」

古河来留季。身長は一六半ば。女性の中では少し高い部類に入るだろうか。下半分の縁が青くなつていて洒落た眼鏡をかけるショートカットの女子生徒だ。いつもどこか客観的に周りの人間を見て

おり真面目な印象を俺は彼女から受けている。本田の親友らしく、今年度に入つて付き合いができた女子生徒である。ちなみにだが、成績も優秀で、もっぱら俺たち四人のブレインとなつてゐる。

いつも宿題見させてくれてありがとうございます。

俺は心の中で古河来に手を合わせた。

「古河来。ミートボール食つか？ 中にチーズが入つてゐるぞ」

「どうしたの…… いきなり優しいわね……」と不審そつた田で俺を見ている古河来。

だが甘だれのかかつたミートボールを見ると食指が動いたりしへ、俺の弁当箱へとフォークを伸ばした。

これは決して賄賂ではない。ちよつとした感謝の気持ちである。

「爆破事件だよ、爆破事件

練太郎が古河来の問いかに答えた。

ぎくり。

思わず肩が震えてしまった。

箸でつまんでいたミートボールを「ほんの上に落とした俺を見て本田が怪訝な顔をする。

「？」

本田睦月。身長は一五 前半。くりつくりの瞳に小さな唇。その唇から出るヴォイスはとんでもなくアニメ声だつたりする。肩まである茶色の髪（地毛らしい）が耳の辺りからウェーブがかかつた女子生徒。その髪型はどことなく某魔法学校のハー イオニーに似ている。性格が明るく温和なためか、男女の別なく人気のある生徒。それが本田睦月だった。

本田とは去年からの付き合いになるが、能天気な奴というのが俺の第一印象であった。そして今もこの印象は変わつていない。

さて、テーブルを囲つているメンバーを紹介し終えたところで俺の自己紹介も含め、俺の愚痴 あ、いや状況説明をしておこう。

片桐悼矢。それが俺の名前だ。身長は一七五だが成長期につき絶賛伸長中である。身長だけに……。

「ブフツ」

「！？」

いきなり吹き出した俺に本田が『くわつ』と怪訝そうな視線をさらに深め、身を引く。いかにも『大丈夫か、コイツ』というような眼だが、少なくともお前の能天気頭よりは大丈夫だ。

「ホン。本題に戻る。」

この通り俺はどこにでもいる普通の高校生である。大した夢もなく、大した希望もなく。普通の大学に進学して、普通の会社に就職して、普通に結婚して、命を終える。

そういう人生を歩むと思っていた。

少なくとも一ヶ月前までは。

しかし

『トウヤ。あんた、今日から私の『ご主人様だから』

そんな言葉とともに俺の普通の人生は終わりを告げた。

Dance1 “集づHーーテル使い” 其の1 - 2

有り得ない肉体能力で人間を襲う化け物、禍魂。それをさせまいとばかりにイデア界からやつてきたエーテルたち。

兎にも角にも、かくして今の俺がいるわけで……。

俺たちの戦いはまだ始まつたばかりだぜ！

説明終了

「爆破事件……ねー」

爆破事件……といつても、事件と呼ぶほどのものでは決してない、はずである。

彼　　鍊太郎が言う爆破事件とは近頃、この街の各所で起こっているビル崩壊や公園大爆発のことを指しているのだろうと予想するのは簡単だった。

何でももの凄い爆炎と共に色んな所が消し飛んでいる……らしい。

それを目の前で見ていた俺が証言するならば爆発しているのではなく、新ジャンル『猪突つ娘』が禍魂との戦闘で大剣をぶん回して破壊の限りを尽くした結果なのだが。

その猪突つ娘は加減つてものを知らないので俺も困り果てているところだ。

常に全力。何があろうと全力。人違いでも全力。謝ついていても全力。相手が気絶しても全力。

ここ最近の禍魂との戦闘で彼女が破壊した公共施設は数知れず。まこと波科町のみなさまにはご迷惑をおかけしていると思つ。

そんなためか、こここのところ嫌な噂が俺の耳に入つてくるのである。

クラスメイトの曰く『昨日、赤いドレスを着た金髪の女に大きな剣を振り回されながら追いかけられてさー』とか。売店の前で泣いていた男の子の曰く『赤いドレスを着たおねーちゃんにアイスクリームとられたあ！ うわーん！』とか。

ガキ相手に何しどんじゃ、とツツコミを入れたいところだが今頃その張本人は家でのんびり日光浴でもしているに違いない。

それ以外にも『噂の赤ドレスの女は貧乳と言つてやると泣きながら逃げていくらしい』というようなことも耳にしたことがある。

なんというか……悲しいことだが、あながち外れていない。しかし、対処法が開発されることからも、よほど赤ドレスの女は頻繁に出没しているらしいことが推察できる。

そんなに暇か、あいつは……。

まるで口裂き女みたいな扱いである。

本人がこの噂を耳にしたとしたら……。おそらくぶちキレで、噂を流した張本人を探しだし仏様が微笑んでらつしやる雲上へと殴り飛

ばしそうだ。なのでもちろん俺はこの事を彼女に黙っている。

下手に藪をつつく」ともないだろ。ひ。

「ああ、なんか最近起こってるみたいだな」

俺は他人行儀を決め込んで、素知らぬ素振りで今朝コンビニで買つていた格闘技雑誌を開く。

そこにはちょうどかでかと、ある特集が組まれていた。

『新たなる都市伝説！？ 赤いドレスの妖怪現る！？』

「…………」

俺は無言で雑誌を閉じた。

「一ヶ月前の白い発光現象からだよなあ。爆破事件が起こり始めたのって」

鍊太郎は何か考え込むように腕を組んだ。

ぎくぎく。

俺の額にじわりと脂汗が滲んでくる。

「なんだつたのかしら。あの白い光。専門家の間、じゃサーチライトだつて言われてるらしいけど……私は絶対サーチライトなんかじゃないと思うわ」

古河来はそんな事を言いながらマルガリータをフォークで丁寧に口を運ぶ。

「……………」

まさか『実はあれ、俺が暴走して解き放ったA Eなんです。びつくりさせてごめんね』などと言えるはずもなく俺は沈黙を保つ。

これは人々に知られてはならない事実とされているからだ。まあ、そもそもA Eなどを説明したところでこいつらが信用するはずもない。

というか、俺にだつて未だに理解できていない部分が多い。もちろん、俺の特異体質も含めて。

A E。エーテルたちが住むイデア界という別世界に充満している未知のエネルギーである。なんでもイデア界というのは俺たち人間の想像を創造に変える世界なのだと。それを可能にしているのがこの摩訶不思議エネルギーのA Eというわけである。エーテルたちはその純粹なエネルギーを体内に取り込み、変換して己の力量や物質を創りだしているようだ。例の赤いドレスの妖怪もとい猪突つ娘……改めリタが人間外のバカ力を發揮できるのもそのためのようだ。

本来、人間はエーテルたちのようにA Eを変換し、力量化・物質化する仕組みを体内に持ち合わせていない。

だが、どういうわけか人間である俺はエーテルたちと同じようにA Eを変換することができるのだ。

要するに、手にA Eを込め人間外の力量を生み出し、鉄をも握り

つぶす」ことが可能なのである。

…………ほんとびで間違えた俺の人生。

そのせいか最近はAEWAで定期健診とこいつの実験を受けている。

こしてもあれからもう一ヶ月か……。

俺は何気なくちくちくと割り箸でからあげを突いた。

と、セレ吉で本田の視線に気がつく。

本田が俺のお弁当のミートボールを物欲しげに指を咥え、じーっと見つめているではないか。

「…………」

俺は箸でミートボールを掴むと本田の口元に持っていく。

すると『ぱあっ』と顔を輝かせて本田はからあげに食いつこうとした。

だが、口に入る直前でひょいとミートボールを遠ざける。

「むっ」と本田は身を乗り出したまま俺へと不満をつに眼を向けた。

「ベタだが楽しそうな顔を見るところやりたくないんだよなあ

「だめだなー。そんだから片桐くんは彼女ができるないんだよ」

「な……んだ……と?」

「片桐くんつてシンケンしてるから女の子に怖がられるタイプだもんね。仲良くなるとそういうことが分かるんだけど」

「これは新事実だ。たしかに多少トガつてているし、捻くれてているし、すぐに怒るかも知れないが、まさかそんな俺のどこに怖がる要素があるのか、そんなことを言う女子を校舎裏に連れていって正座させた上でメンチを切りながら聞いてやりたい。」

「彼女作る方法教えてあげよっか?」

魅力的な提案だった。しかし、ここで教えて欲しいというのは男として負けた気がする。

「…………興味ねえな。まあ、教えてくれるつていうなら聞いてやるものやぶさかじやねーけど」

俺が強がつてそつとふことミートボールを插差す本田。

「しゃ、しゃーねーなー」と俺は本田の口元に再度、ミートボールを近づける。

そしてパクリと食いつく本田。

「ほんわ~」と頬を両手で挟んで幸せそうな顔をする。

能天氣……。

「コホン。それで、彼女作る方法ってのはなんなんだ?」

「ん？ なにが？ 興味無いんじゃなかつたの？」

眼をぱちくつとさせる本田さん。

「…………。…………てめえ」

俺は本田の頭をわしづと掴んだ。

「しゃーしゃーーー」と楽しそうに笑う本田。

今から一ヶ月ほど前になるだろうか。

俺はひょんなことからそのイデア界とかいう世界からきたエーテル、リタ＝ルクライルと知り合つた。

彼女はくそ迷惑なことに同じくイデア界からきた禍魂という化け物に追いかけられていたわけで。すつたもんだの掛け句彼女、リタと契約することになつたわけだが……。

そうやつてエーテルと契約し共に戦うのがエーテル使いと呼ばれる存在。

詰まる所の俺のよつた存在である。

エーテル使いになつた俺は、同じくエーテル使いだつた八神きづなというクールで無口で頑固で孤独ダイスキーなエーテル使いと出会つた。これがまた一年の始業式にクラスメイトだということが発覚する。

その後、エーテル使い支援協会 通称AES Sと呼ばれる非公開組織のエーテル使い河上さんを含めた三人で、ある凶悪なエーテル使いを捕獲するにいたつた。

そう。敵は禍魂だけでなくエーテル使いでもあつたのだ。

エーテルたちはみな尋常でない運動能力と何らかの能力を保有している。そのエーテルたちを利用して犯罪を行うエーテル使いがいるのだ。強盗、恐喝、殺人、犯罪と名のつくものすべては強大な力を持つエーテルを使えばあまりにも容易い。

そしてこういったエーテル犯罪を取り締まるのがAES Sの役割。もちろん、禍魂を討伐するのも彼らの仕事である。言わばエーテル使いたちの警察といったところだろうか。その他にもAES Sは凶悪犯に賞金をかけ、野良のエーテル使いにも協力を促している。八神はこの賞金稼ぎという立場に位置するが、彼女がなぜあんなことをしているのかは未だに分かつていない。

そしてもちろん、この藤島に関する一切の事件を人々は知らない。

一ヶ月前の俺がそうであつたように、人々は禍魂なんて化け物がいることも知らずのうのうと暮らしているのである。

食事を終えた俺たちは食堂を出て教室へと向かう。

と、不意に鍊太郎がささつと壁際に寄つた。

「あん？ なんだよ、鍊太郎」

いきなりの鍊太郎の不可思議な行動に眉をひそめる。

後ろを見ると本田や古河来も道を開けるように壁際に寄つて立ち止まつてゐる。

「と、悼矢！ 早くどけつて！」

ちらちらと何かを見ながら焦つてゐる鍊太郎。

「はあ？ なんで？」

そこで俺はやつと気づいた。

俺の目の前に一人の女が立つてゐたのだ。

片側に纏めた髪をくるくるとドリルのように巻いた女子生徒だ。美麗としか言い様のない眉と眼。どこか体全体から溢れている高貴なオーラ。きつちりと制服を着こなし、脚は黒タイツで覆われていた。腕を組んだその手には黒い扇子が握られている。何か香水でもつけているのか良い匂いが俺の鼻腔をくすぐつた。

その女子生徒は毅然と前を向き、俺を見つめて いやどう良いように脳内変換してもこれは睨んでいる、だな……。

彼女の後方を覗いてみると、鍊太郎たちと同じく廊下を歩いていた生徒たちが壁際によつて彼女の道を作つていた。

その生徒たちの視線は俺の目の前に立つてゐる女子生徒に注がれてゐる。

どうやら彼女はその道を通りてきたらしい。

「誰だ、こいつ？ 有名人か？」

思つた疑問を俺は鍊太郎へと投げかけた。

指を指されたのが気に食わなかつたのか、ぴくりと女子生徒の眉が動く。

「狭霧鏡花。うちの生徒会長ね」と古河来が鍊太郎の代わりに答える。

「お前、なんで知らないんだ！ 会長はライオンも泣いて逃げだすつて言われる人だぞ……！」

鍊太郎が声を落として俺に叫んでくる。

「いくら声を抑えたところで、俺の目の前で立ち止まつている会長にも聞こえているだろ？」

本田があたふたと俺へ会長へと忙しそうに視線を移している。その姿はどこか巣穴から出てエサを探すプレーリードッグを連想させた。後で餌付けができるかどうか試してみたいところである。

「狭霧鏡花はな……！ 現生徒会を一人で運営している豪傑だ……！ 狹霧財閥の令嬢でこここの学園長にもツテがあるんだよ……！ しかも成績優秀・容姿端麗・運動神経抜群なんつもので言い表せないほどオールマイティーな人間なんだよ……！」

「へえー、いるもんだねえ。そんな完璧人間みたいなのが……」

俺は会長の眼を見た。

その瞳には確かに誇りや自信といった感情が色濃く見える。

分かる。こういう眼をするのは俺と同じタイプだ。

いわゆる頑固者。

「会長に眼をつけられたらこの街じゃ普通に暮らせないぞ……！
不良五人をあつという間に気絶させたとかいう噂もある……！ 悪
いことは言わないからどいとけって、棹矢……！」

ほう。そりゃ面白い。

既に普通の生活から逸脱している俺としてはなんてこたーない話
だった。

人生、何事も挑戦である。北に早食い大会があると聞けば挑戦し、
西にゲーム大会があると聞けば挑戦し、東に抜けない聖剣があれば
挑戦し、南に喧嘩があると聞けば乱入する。そういう人に私はなり
たいまる。

俺は両手をポケットに突っ込んだままニヤリと好戦的に笑つて会長
を見下ろす。

気分は悪役。不良A。

そしてはつきりと言葉を紡ぐ。

「通りたきや俺を避けて通りな

すつ、と会長様の眼が細くなつた。

「か、片桐くん……！」

「馬鹿か、悼矢！？」

「馬鹿はお前だろ、鍊太郎。なに道なんか開けてんだよ。たかが勘違いしたお嬢様じやねーか。道を開けてやる義理なんかねーだろーが。」

第一に、この校舎内では生徒はみな平等。 そつだろ、生徒会長さんよ」

悪い癖がむくむくと首をもたげている。正直、俺はわくわくしているのだった。

張り詰めていく緊張感。

面倒なトラブルに巻き込まれるのはもちろん好むものではない。だが自分の前に対抗する者が現れたというのならば話は別。トラブルだろうがなんだろうが、かかってきなさい。

第一に、こういった権力を振りかざす奴に従う道理は無い。権力を持つ者は悪者と相場は決まっているものなのだ！

そして俺はこの状況で完璧超人のお嬢様がどういう行動に出るか楽しみであった。

彼女は『ふう』とため息を漏らした。

「……わたしの学校にまだこんなサルが残っているなんて……。失態ですわ……」

「いいねえ。頭にくる言葉だぜ」

俺はせり口を呑めた。

空気がしいんと静まり返っている。

「セリをおどきなさい」

有無を言わぬような威厳のある一言。セリが強制力を秘めているよつな、思わず従つてしまつそうな迫力。

「悪いな。俺は今、反抗期つてやつでな」

無表情のまま俺を見ている会長。

「…………」

「…………」

無言で威嚇し合つ俺たち。

「…………」

俺と会長サマの視線が中空で火花を散らした。

ざわざわとしだす廊下内。

事を聞きつけたのか近くの教室から顔を出したり、成り行きを見に来る者もいる。やしづめ『あの会長に喧嘩売つてゐ奴がいるぞ』とこう感じだらうか。

「おどきなさい」

わつ一度、少し語氣を強めて言つてへりふらぬサマ。なので俺も彼女にせりやんと理解できるよつてひまつと喧嘩葉を口にした。

「イ・ヤ・だ」

先に言つておひや。

俺は負けず嫌いである。

しかもだ。じうと決めたら途中で間違いだつたと氣づいても、脂汗を額に搔きながら貫くといつ反骨精神の塊のような人間だ。自分で言つのもなんだがかなり頑固な部類に入ると思ひ。

そして、やはり田の前の彼女も俺と同じように頑固な人間のようだ。俺を避けて先へ進むといつ選択肢は鼻からいらしく。

不意に会長が俺の頭に手をやつた。そしてぐりぐりと左右に揺らす。

「な、なにすんだ！」

俺の文句に対し彼女は驚いたよつて言つた。

「あら。ちやんと中身が詰まつてこりょうですわね。言語が理解できないよつな小さな脳しかないせいで、カラカラと音が鳴るのではありませんかという興味に手が伸びてしまいましたわ」

「アマアア……！」

俺の激昂する顔を見てくすりと笑つ会長。

「どうしたのかしら。そんなに青筋をたててしまつて。貴方のようなサルでも脳みそは詰まつてこりょう新発見に胸が躍るよつな想いの一つでも感じ得ないのかしら。」

それともやはり貴方の脳は地を這いつぶばのズブのよつに矮小で何の驚愕も感動も感嘆も感心も感銘も感じ得ないよつな「ミクズ」以下の蛆虫の如き存在だと自覚したのかしら」

言つた後で、何かを思つ出したよつな素振りを見せる会長。

「あら、わたくしとしたことが……。思い違いをしていましたわ。空っぽだと何も音がしないのでしたわね」

「ぴつやーん！」

それが俺の我慢の限界だった。

「さつきから聞いてりやうだ好き勝手言つやがつて！ てめえの捻じ曲がつた根性を叩きなおしてやらあああああ！」

「言い遅れたが、俺は沸点が低い。」

しかもキレると口が相当悪くなる。これに関してはよりに奢められることが多くある。だが十何年とこういう性格でやつてきたものを直すというのはなかなか難しいわけで、こよりもこたさか諦め気味のようだ。

「おー、じり、悼矢！ 手をだすのはまずいー、まずいってー。」

俺を後ろから羽交い絞めにする練太郎。

わたわたと俺と会長を交互に見ている本田。

『はあ』とため息を吐き、頭を押さえる古河来。

「離せええ、練太郎オ！ お前らがそういう対応をするからこいついう馬鹿が調子乗って付け上がんだよッ！ 会長だか怪獣だかしらねーがかかるてこいや、コラア！」

「暑苦しいですわね。睡を飛ばさないで下さいます？ 馬鹿が感染しますわ」

黒い扇子を広げ、口元を隠す会長。

「俺の馬鹿はバイオハザードレベルか！？ アアンー！？」

そんな俺と会長サマを周りの生徒たちはハラハラと見守っていた。だが、練太郎のように止めに入る気はなさそうだ。

それもそうだろう。
鎌太郎いわく眼をつけられたら普通に暮らせないのだから。

キンゴーンカンゴーン。

チャイムが鳴つた。どうやら昼休みが終わつてしまつたらしい。

音が漏れでるスピーカーを見上げ、会長は言った。

「チャイムが鳴りましたわよ。早く教室に戻つたらどうなんですか。貴方のようなナノミソ（ナノ単位しか無い脳みそ）でも刺激を与えるべきくなる望みは0・0000000000000000000001%はあつてよ」

「よくもそこまで人を馬鹿にできるな！ ええ、おい！？」

「あら失礼。0.0000000000000001%は数学上で起こり得ない事象として解釈されるのでしたわね」

くすり、と口を笑みに歪める会員。

ふつちーん！

俺、二度目の噴火。

人は真に怒ると言い返す言葉も出なくなるものらしい。俺の口から出たのは原人のような咆哮であった。

「落ち着け、悼矢！ 落ち着けって！」

「これが落ち着いていらーよー。」

と、その時だった。

「なんですかーこの謔^{まわ}はーー？」

我がクラス担任の原先生がやつてきた。どうやらこれから授業の

Dance1 “集うHーーテル使い” 其の2 - 2

そういうや次は原先生の授業だっけか。

原先生は騒ぎの中心が俺であることを見とめると『またお前か』と言わんばかりの表情をなせる。

「ほら、皆一 教室に入つて入つて！ チャイムはもう鳴りました
よー。」

ぱんぱんと手を叩き、慣れているかのように野次馬を教室の中へと押し込んでいく。

鍊太郎たちも背中を押され、こちらを気にしながら教室へと入つて行く。

本田が心配そうな瞳を震わせているが、心配するな……！

必ず勝つ！

俺は本田に向かつてぐつと親指を立てた。

「うわ！？ あの人、やる気満々だ！？」と愕然とした表情で本田が言つていた。

つこには長い廊下の真ん中に俺と会長サマの一人だけが残る。

憮然と俺を見上げてこる会長。

それを見下ろして「いの俺。

「いひー いつまでやつてゐる北桐くんー。」

たすことの原先生。

ぽか！

なぜか俺だけ頭を叩かれた。

「つてえな……！」

「なんて口を聞くんですか！」

俺の頬を掴んでぐいぐいと引っ張る原先生。

「いで！ いででででつ！ すいません！ すいません！」

「まったくキミはびしまでわかつてシッパるのー 先生は哀しい
！ 哀しいわー！」

「う……すいません……。好きな言葉は『反抗・反逆・反論・反発・
反対・反骨』なもので……」

しゅんとなる俺。なんだかこの先生からせじように似た謎の迫力を
を感じてしまうのだ。

「セイジ『反骨』を追加することをお薦めしますわ」

そう言つてくすつと笑う余韻。

「ぶちぶちー。

「俺の額の血管からピュッシュと血が飛び出した。

「「ハハハハ」と言葉遊びをしている暇はないんだよー。」

「わたくしだって貴方と子供遊びをしている暇はないんだよー。」

「あー言えば、ハーハー言つやがつて……ー もう我慢ならねえー！

会長の胸倉を掴もつと俺が手を伸ばすと、

「すぐキレイないー！」

「すぱーーん、とまた頭を叩かれた。そのせいで手が宙を泳ぐ。

「原先生……！ 邪魔しないでください……ー 後生ですかー！ー！」

「さうですわ、原教諭。せつかくこんな画面におサルさんがいるんですけど、其の一つでも仕込まなければ勿体無いですわ」

「何を馬鹿なことを言つてるんですかー！ 喧嘩は許しませんよー。」

がしづ、と原先生が俺と会長サマの腕を掴む。

す、と会長の眼が細くなつた。

「離しなさいな。給付を下さられたいんですの？」

「！？」

原先生の顔色が一瞬で変わった。

「おいおい。そんな権利をどうして生徒会長が持っているんだ。波科高校の形態性に疑問を抱かざるを得なかつた。

「い、いえ……それでも私は負けないわ……」教師として正しいことを

「自分の信念に勇気を持つて従つとは見上げた態度ですね。ただ折れる場面を間違えるとそれはただの無謀だと人は言いますわ。

自分の意志を貫くことは、何かを失つことと同意義。

明日から職探し頑張りなさいな

「へ？」

「つまり

クビ。

会長がそつと眼をつむるわせて彼女は走りだした。

「最近の子たちは教師をなんだと思つてゐるのよー。もう教師なんてこつちからやめてやるんだからああー。」

なんだか凄い」とを叫んでいるが氣にしないでおけ。原先生なん

だかんだで打たれ強い人だし。

Dance1 “集うHーーテル使い” 其の3・1

にしても今の横暴振りには反吐がでる。

自分が権力を持っているのを良い事にやりたい放題か、コイツは……

「おー、会長さんよ…… これとか乱暴じやねえか……」

「あー。わたくしがいつ彼女に乱暴をしたというのかしづ」

「言葉の暴力って聞いたことあんだけ……」

と、その時だつた。

「ロックオオーーオオンー！」

「、この声は……。

俺が振つ返つたまゝにその時だ。

「ほあちやーー！」 とこう掛け声と共に、

どげしー。

「 ぬおばつー？」

こきなり足にスライディングをかけられ俺は完全にバランスを崩して派手にずつこける。

だが俺の体は固い廊下にぶつからなかつた。

スライディングした張本人が俺の下敷きになつたのだった。ふによんと手に柔らかいものが当たる。

俺の下敷きになつてゐる張本人は大きな瞳を横に反らすと、赤い顔で静かに呟いた。

「やだ……悼矢くん……」なんといひで……。せめて電気は消してよ……」

「…………。何してゐんですか、美姫先輩」

桧留間美姫。身長は俺よりも低く、一六 前半。制服を着てはいるのだが、その下にパー カーを着てゐるらしく、ピンクのフードが後ろ首から垂れていた。髪はかなり黒みがかつたマロンブラウン、青いヘアピンで前髪をとめている。彼女は一つ年上の先輩で俺が物心付いた時からの知り合いだ。小学校、中学校を飛ばして（彼女は私立の女子校に入学した）、高校と進んだ道は同じ。いわゆる幼なじみ、悪くいえば腐れ縁というやつである。

美姫先輩はかなり破天荒な人で、例えるならブレー キの壊れたダンプカーというところだろうか。彼女から発信されたトラブルは数多くそれに毎度の如く被害を受ける俺としてはいい加減にしろとボディブローを入れたいところだ。

「やだもつ…… そんなこと女の子に言わせないでよ……。悼矢くんに押し倒されてるんじゃない…… きやつ言つちやつた」

恥ずかしそうに顔を両手で隠す。

「いや、足をひっかけて俺を倒したのはアンタでしょーが」「

そう言つてやると彼女は両手を降ろして急に真剣な顔になつた。

「悼矢くん」

「はい」と思わず阿呆のように返事する。

「私はね。結果が大事だと思うの。どれだけ勉強を頑張つてもテストで結果を出さないと意味なんてないでしょ。つまり、原因や過程なんて気にしてちゃいけないってことよ」

「はあ」と阿呆のよひに生返事をする。

「そして私の上に悼矢くんが覆いかぶさつているというの結果。ここから導き出されるのは悼矢くんが私を押し倒したっていう事象なのよ」

「恐ろしく穴が空きまくりの帰納法だと思いますが」

「奇遇ね。私もちょっといつて思つていたところなの。帰納法つて難しいのね」

。　　だめだ、この人。相手してたら頭がおかしくなりそうだ

6

俺はこめかみを押さえながら立ち上がった。

すると美姫先輩はぐるりと半分後転して、廊下に両手をつき戻つてくる反動で『よつ』と立ち上がる。そしてぴしりと両腕をY時に広げた。

俺がぱちぱちと拍手すると、満足したのか美姫先輩はパタパタとスカートの埃を払い、廊下に落ちていた薄い赤のベレー帽を手に取つた。どうやら彼女がアクセントで被つていたものらしい。

「ほい。悼矢くん」

背伸びしてベレー帽を俺の頭にちょいとのせてくる。

「おー、かわいい！　かわゆい！」

「美姫先輩。男は可愛いと言われても嬉しくないんですよ」とベレー帽を取ろうとするが、

「あ、待つて！　写メ撮らせて！　こよりに送るからー。」

俺は彼女が取り出した携帯電話を光の速さで奪い取つた。

「もー、恥ずかしがり屋さんだなあ」

美姫先輩は俺の頭からベレー帽をとると、俺の鼻元にもつてくる。

「？　なんですか？」

「匂いは覚えた？」

美姫先輩のわくわくとした表情。

「は?

俺の困惑する表情。

卷之三

美姫先輩がいきなり廊下の向こうへフリスビーよろしくベレー帽を投げた。

くるくると回転しながら飛んでいくベレー帽。

俺と美姫先輩、会長は突っ立ったままそれを見送った。

[REDACTED]

.....

美姫先輩は何も言わずに自分でベレー帽を取りに行くと、無言のままこちらへ戻ってきた。

「 」 じんなりとじりりで何してゐるの?」

帰つてくると本題に入つていた。

俺には彼女の脳構造が理解できない！

「それはこっちの台詞ですよ。今は授業中ですよ。何でこんなところを歩いてるんですか」

「てへ 青空と爽風のサボタージュ」

「料理の名前みたいにして言つたな！ なんだか「ーンポタージュみたいでウマそうだけど…」

「うーん。ほら、授業中って静かだし廊下に誰もいなくなつて清々しいじゃない。みんな真面目に授業受けてるのを尻目に廊下を歩くと優越感つていうのかな、良い気分なのよね～」

両腕を伸ばしてうーんと伸びをする。

授業時間に校内散歩とは……。授業中に中庭で昼寝するハ神といい、俺の知り合いたちは奔放すぎやしないか……。

「清々しいついでに改めまして。おはよっ、掉矢くん。今日もヤサグれてるかな～？」

おいーす、と俺が敬愛する芸人であり俳優だつたいか やさんみたく挨拶する美姫先輩。どう計算しても全員集合の世代じゃないのになんで知つてんだ。

「おはよーひつてもう昼ですよ」

「何言つてゐるのよ。まだ一時間目の授業が終わつたといひじゃない。」

今、一時間目でしょ？」

「いえ、昼休み終わつてますけど？」

「……………」

「……………んあ？」

若干の沈黙。

そこで彼女はまた携帯電話を取り出して時間を確認する。

「ナアーンー？ 寝てる間に五時間目になつてゐるー タイムスリップだわ、悼矢くん！」

がーんと壮絶な表情になり、震える両手で画面を見つめている。

「おいおい。一時間目から今の今までずっとビベーすか教室で寝てたのか、この人…………」

「そうなのね…………。私、過去の時間軸から來てるのね…………。今頃、この時間軸の私はちゃんと教室で勉強しているのかしら…………」

と遠い目をして窓から空を見上げる。

「いえ、残念ですがめっちゃ青空と爽風のサボタージュをおいしくいただいてます。

俺も遠い目で空を見上げた。

一人して遠い目をしている俺たちを会長サマは『変な奴らに関わってしまったかも知れませんわ……』といつ奇異の眼で見ていた。

「どうかで見た顔だと想つたらそこには我が校の生徒会長さんじやない。なにに、悼矢くん知り合いなの？」

窓から一ひらへ視線を移し、やつと俺が向かい合つていたお相手に気づく美姫先輩。

律儀なことに会長サマは俺と彼女のやり取りを口を挟まずにずっと見ていたのだった。

「美姫先輩風に言つなら激怒と憤怒のコレールつてところです、

「ほえ？ なに言つてんの、悼矢くん」

あんたがやつたネタじゃねーかよ！？

なにこれ恥ずかしい！ ちよつとつまく返したと思った自分がすげえ恥ずかしい！

俺が顔を真っ赤にして悶えている間に、美姫先輩の興味は再び会長さまに移つていた。

「噂は聞いてるわよ。キミ、生徒会を一人で回しているんだってね。凄いねー。おねーさんがよしよししてあげよっか？」

「わたくしも貴女の噂は聞いていますわ。自由奔放で教諭たちが手を焼いている生徒が三年一組にいらっしゃると。お名前は桧流間美姫さんとおっしゃつたかしら」

「えつ！ 私つて有名人！？ 学園のアイドル！？ 親衛隊つてい
る！？」と急に眼を輝かせる美姫先輩。

学園のアイドルがどうかはともかく一部のマニアにとつては有名
人なのは違いない。そして、もしも彼女の親衛隊なんものが存在
したらそれは紛れも無い変人集団だ。

なんせこの人は昨年の文化祭ではステージジャックして壇上で歌
を歌つていたし（しかもアニソン）。周りで呆然と壇上を見ていた
クラスメイトの顔は今でも思い出せる。

たしかに一部の人たちには大ウケだつたらしく彼女の明るい性格と
その容姿からファンも多いらしいが……。

実際、長年の付き合いの身……身内に近い目線で見ればああいうこ
とをされると非常に恥ずかしく感じるわけで……。はつきり言つて
トラブルメーカーだし、火の粉が飛んでくるとかなり迷惑な人な
である。

俺の場合、自分の信念に觸れるならば口も無く自らトラブルに首を
突つ込むこともあるのだが、この人の場合は面白がつて何でもかん
でも首を突つ込むという悪い癖があるのだ。そういうえば子供の頃、
家族ぐるみで一緒に海に行つた時も

「………… #」

ぱしん！

「ナアーン！？ ぶたれたあ！？ 悼矢くんがいきなりぶつたあ！」

頬を押さえ涙目で抗議される。

「あ、すいません。つい……」

本当に勝手に手が出て彼女の頬をひっぱたいてしまったので、俺は謝つてから不思議そうに自分の手を見てしまった。

Dance1 “集うHーーテル使い” 其の4・1

「ふう……。あなた方、分かっていらっしゃるのかしら。今は授業中なんですよ。やはりおサルさんの知り合いはおサルさんとこいつとかしい」

「生徒会だつて廊下にいるじやん」

何言つてものとばかりに的確なツッコミを入れる美姫先輩。

「あ、いいじゃつと言つてやれ。

「それはこの脳みそつるつる中身すかすか男が愚かにも自分の身分を弁えず、頭脳明晰・明瞭快活・傾国美女、街中を歩けば手を合わされ拌まれる仏陀再誕の如きこのわたくしの道を塞いでいるからですわ……！」

会長サマが腕を組み、ふいとそっぽを向く。

「よくもまあ、そこまで自分に美辞麗句を並びたてられるもんだ……。お前の場合、違う意味で国が傾くつての……。

「通せんぼなんかしてねーよ。通りたきや勝手に通れよ

「どうぞどうぞ、と俺は手を横に出してやる。

「貴方のような人をサディストといつんですわね。きっとわたくしにこのよつな主義主張の無い嫌がらせをして性的快感を得てているんですね。汚らわしいサルですわね。首輪をつけて縛つておくべきか

「ひし

「どちらかっていふと言動からしてお前の方がサディストだ！」

しかもかなりベギーな女王様属性じゃねーかよ！

「私、ドMだよ」と美姫先輩が俺の制服の袖をくっくくつ張る。

「訊いてねえーよつー！」

がつちつと美姫先輩の頭を掴みアームクローする。

「あはあん……！　そこ……もつと……！　『愛のままにわがままでキミは私だけを傷つけて』……！」

本当にドMだった。おやじく俺が知っている歌の中で一番長いだるうと思われる題名までドM風味になっていた。

俺は呆れて手を離す。

「まあ、事情はだいたい飲み始めたわ。相変わらず棹矢くんつて負けず嫌いよねー」

「意地があんだよ、男の子には。Bソ轟」

「誰……そのキミシマくそつて……」

眼をぱちくつさせている美姫先輩。

あ、あつれー……この人、アニメとか好きなはずなのになー……。

「くす。いつかその意地が貴方の立場を窮地に落とさなければいいですわね」と笑う会長サマ。

嫌みつたらしい女だ……。

むつとした俺は再び会長と無言で睨み合つ。

とそこでさらに前から歩いてくる人影に俺は気づいた。

それは俺のよく知った人物だった。

「ありや、八神……」

八神きづな。この学園の三大美女の一人（鍊太郎談）で俺と同じ一年三組の生徒。

腰に届くほど綺麗な黒髪に、すっと細い眉。可愛いというよりも美しいという方がしっくりくる顔だちだろつか。スレンダーという言葉がよく似合いそうなスラッシュした体つき。スカートから伸びたしなやかな白く細い足が組みかわると、クラスの男たちはそれに釘突けになつたりする。そんな体つきをしているせいか、どうしても実年齢より大人っぽく見える。

八神は一人でいることを好んでいるふしがある。特に学校ではそれが顕著なようで彼女の周りからは『寄つてくるな』オーラが滲み出ているのだった。

そのせいか俺は八神が学校で他人と会話しているのを見たことがない。

ラブアタックを受けているシーンなら飽きるほど見かけてはいるのだが、当然の如く彼女は聞く耳持たずってな感じで無視し続けるのである。

それに休み時間になるとよくどこかへ行ってしまうし、そのまま授業が始まても帰つてこないなんてこともしばしば。そもそも無断で学校に来ない日だつてある。何ものにも縛られない、そんなクールで孤高の姿が男子生徒が心を奪われている一因でもあるのだろう。現に今も重役登校してたらしく、学校指定の黒い革鞄を右手に持つたまま背中へ乗せている。

そして何よりも特筆すべきは俺と同じエーテル使いであることだらう。

八神はAESSEが手配している凶悪なエーテル犯罪者の首を狙う賞金稼ぎなのだ。

学校に来なかつたり、途中でいなくなつたりするのはきっとそういう理由も関係しているのかもしねれない。

もちろんこの一切をクラスメイトたちは知らないが……。

「八神つて……あづなちゃん？」

美姫先輩がひょいと顔を横に出して会長の向ひを見た。

その刹那。八神が俺たちを……といふか美姫先輩に気づいた瞬間、びくりと肩を奮わせて足を止めた。

「あ、ほんとー。めづなちやんだ。やつほー！ めづなちやーん！」

授業中にも関わらず両手をメガホン変わりにし、大声で八神を呼ぶ美姫先輩。

八神の頬をつつと汗が流れ、ぴくぴくと眉が跳ねる。

感情の読み取りにくい八神ではあるが、あの表情は誰が見ても分かるだろ？

あれは明らかに嫌がっている表情だ。

そんな表情で固まっていた八神だったが、無言で急に振り返ると元来た道を戻り始めた。しかもかなり早足ですすと歩いていく。

「あ、こりつ！ 逃げるな！」

美姫先輩が走つていって八神を後ろから羽交い締めにした。

「は、離せ、美姫……！ 私は用事があるんだ……！」

じたばたと暴れる八神さん。

「嘘つきなさいよ！ どう見ても今、登校してきたばかりじゃないのさー！」

「嘘じやない……！ 忙しいんだ私は……！ 急いで帰らなければならないんだ……！」

いつもクールな八神があそこまで慌てふためくとは……。

美姫先輩……あんなに嫌がられるまでハ神になにしたんだ。

「ああん　きづなちゃんまた大きくなつてるう」

背後から両手でのハ神の胸を齧掴みにしている美姫先輩に俺は「ぶふううううー」と吹き出した。

「ば、ばかもの！　どこを触つて……くうんつ……」

ハ神が艶かしい声を発した。

「わおっ敏感敏感　悼矢くん！　きづなちゃんは感度良好よー！」

眼を輝かせてぱつと俺の方を振り返る。

恥ずかしいので俺にそういう話を振らないで戴きたい。それを伝えて俺にどうじると言つのだ。

つていうか知り合いだったのか、あの一人。

Dance1 “集うHーーテル使い” 其の4 - 2

「破廉恥ですわね。公然で何をなぞつているのかしら……」

ぱんと黒い扇子を開き、ゆっくりと扇ぐ生徒会長。

「まあ、それには同意するけどよ……。止めに入る気にはなれねーな、男として」

俺はじゅれあつていてる美姫先輩と八神を興味深げに眺め続けていた。端から見ると仲良くじゅれあつていてる風にしか見えない二人ではあるが。

「も、もひ……やめてくれ……！ つぐ……あつ……！」

美姫先輩の手から逃れようと悶える八神。

「おほほほー、よいではないか、よいではないかー！」

それを逃すまいとする美姫先輩。

禁断の桃色世界がそこにはあった。

にしても美姫先輩、楽しそうだ。いつも増して生き生きしてるじゃないか。

美姫先輩は中学時代が女子校だつたせいもあるのか、びつやうそのノリが抜け切れていないようだ。

いや、地だな、あれ。

「まったく……女性としての恥じらいを持ち合わせていらっしゃらないのかしら……。街でわたくしまでのよつな方たちと一緒にだと見られでもしたら迷惑ですわ」

の髪を背中へ流す会。信じられませんわ、とでも言ひ風に呆れた表情でくへくへひたじル

「タイプは違うがレベルで言えばお前も似たようなもんだと思つた」

その俺の一言で、ぐるりと俺の方へと振り返る。

「なんとおっしゃいまして？この清く正しい誰の足跡もない雪原のよきなわたくしのどこがあんな人たちと同じだと言うんですの？」

だんつと廊下を踏むと憤慨して俺を睨んでくる。

そんなに一緒にされるのが嫌か、あれ（美姫先輩）と。

「お前、ライオンも泣いて逃げ出すとか言われてるらしいじゃないか。しかも不良五人をノシただつて？ 女の恥じらいとやらが備わっているかどうか怪しいもんだな」

「このつ……！ そこに正座なさい！ てさしあげますわ！」

わたくしが力づくにでも躊躇

ぱんつと軽快な音を鳴らして再び扇子を広げる会長。

「面白^{面白}……。やれるもんならやつてみる。無理だろ^{うな}がじな」

俺に力づくでとはほとほと阿呆な奴である。

「後悔するといいですわ。」いつ見えてわたくしは武芸の道に通じていましてよ。貴方のよ^うなチ^ンピ^リとは訳が違いますの」

その扇子を構える格好からして確かに武道を嗜んでこ^るよ^うだつた。どこか様になつて見える。

否定しなかつたし、あながち不良五人を氣絶させた話も嘘でないのかも知れない。

対する俺は相変わらず両手をポケットに突っ込んだまま会長を見下ろしている。

不意に、会長が動いた。

良い踏み込みだった。速度も遅くない。

身を低くして一気に俺の間合^いへと入ってきた。

度胸がある。

まず俺と会長では圧倒的な体格差がある。そこから受けけるプレッシャーもあるはずだ。だというのに迷いもなく俺の間合^いに踏み込んでくるとはよほ^{ほど}自信があるのか。

俺の顔面めがけて左手に持つた扇子を横に一閃していく。

それを俺は背中を反らじて難なくやり過ごす。

「…」

その一発で決まると思つていたのか、きゅうと上履きを鳴らして左足で踏みとどまる会長。

その足を軸にして右の前蹴りへと攻撃を繋げる。

俺の腹へと会長の足底が迫る。

が、それを俺は横にスウェーして回避する。

俺は少し下がつて、とんとんと軽くつま先を廊下で打つ。

間合いが空き、会長は驚いたような表情をした。

「……………やはりますわね」

一ヶ月前の俺ならまだしも、あれからかなりハ神が言つとこらの“成長”した俺の身体能力は今やエーテルと同等といつても過言ではない。もちろん、生身の人間の攻撃なんぞエーテルや禍魂に比べれば格段に遅いわけで、身体能力を強化する必要もない。たまにリタや美姫先輩がクリティカルな光速アッパーを繰り出したりするが、あれはコミカルといつ名を力にした例外中の例外である。

「お褒めに預かり恐悦至極にござります、お嬢様」

俺は執事のように右手を折つて頭を下げた。

「馬鹿にして……！」

再び間合いを詰める会長。しかも今度は先ほどよりもより勢いをつけて、だ。そして先ほどと同じように扇を俺の顔面向けて横に薙いでくる。

ワンパターンだな。

と、思った刹那だつた。

扇子が俺の顔面から通り過ぎない！

視界が黒で覆われ、俺は慌ててポケットから手をだして扇子を弾く！

が、扇子が俺の頭上に舞うと俺の視界から会長は消えていた。

一体、どこに！？

と思つた瞬間。

きゅっきゅ！

廊下を擦る上履きの音が背後から聞こえた。

そりゃあ……！ こいつ俺の股座を通つて……！ 俺との体格差を利用しやがった……！ 勢いをつけたのはそのためか……！

「貰いましたわ」

慌てて振り返ると、俺の視界には会長の拳がでかでかと飛び込んでいた。

二十九

脚にエリ・エネルギーを込める！

それはまるでエンジンのように体内で爆発を引き起こし、俺の脚力を数倍へと跳ね上げた！

だんつ！

廊下を蹴り後ろへと間合いを空ける！

背中で風を切り、廊下に右手をあて、前かがみになつて両足でブレーキをかける！

キユキユキユキユウウウウ

上履きのゴムと廊下が擦れ、白い煙がでた。

- 1 -

111

拳を振りぬいたまま眼をぱちくとさせた。

「…………え……」と小さく声を発する。

何が起きたのか理解できていないらしい。

会長からは俺の姿が一瞬で数メートル後ろに下がったように見えたことだろ。

脂汗が頬を伝い、流れる。

やべ……。つい使っちゃった……。

Dance1 “集う” ホテル使い” 其の5 -1

会長は自分の足元。俺が跳んだ箇所とブレー キをかけた箇所、そして俺の上履きから白い煙が出ているのを見て、俺へ視線をうつす。

「…………貴方…………」

会長が何か言おうとしたその時だった。

ガラツといきなり教室の扉が開いた。

そして赤髪の男が廊下に放り出される。

放り出された男は「ぐるぐると廊下を後転すると俺と会長の間を通り壁に後頭部をぶつけた。

「なにすんねや！　このアホんだら教師！」

赤髪の男子生徒が扉の前に立っているガタイの良い角刈りの男性教師に文句を放つた。

いきなりの出来事にそのまま事の成り行きを見守る俺と会長。

「僕よお」

不意に角刈りの教師　　カンキチが呟く。

ちなみに、カンキチという名は彼の本名ではない。その特徴的な繋がり眉毛と角刈りから連想される某キャラクターに似ているため生

徒たちが面白がってつけたあだ名である。

「お前、うちのクラスじゃないだろうが。つていうかなんで一年のクラスにいるんだ」

「ええやないか！ めぐみちゃんと同じクラスが良かつたんや！」

「バカだこの人！？ 良い歳して何してんの！？ 分かっちゃいたが大馬鹿だ！？」

「ちよつとじつにいるな片桐」

……嫌な予感しかしない。

さうこひなみに俺の教科担当でもないカンキチが俺の顔を知つているのは、生活指導を受け持つ教員だからである。

「お前、ちゃんとこいつを三年のクラスに返してこい。頼んだぞ」

俺の返事も聞かずにぴしゃりと教室の扉を閉めるカンキチ。

「ちよつとキミ何やつてんのよー ずるむーー ずるむーー」

俺先輩に気づいた美姫先輩がハ神を羽交い絞めにしたままこひなみへやつてくる。心なしかハ神が青い顔でぐつたりしてしまっているが……大丈夫なんだろうか。

「ああん？ なんや女狐」

「誰が麗しの令嬢よ！」

「言つてへんし！ 勝手に変えんな！」

むしろ本物の令嬢がいる前でよく言えたな美姫先輩。そもそも麗しの令嬢は褒め言葉じゃないのか。つていうか、この一人も知り合いかよ……。

世の中つて狭いんだなあ。

とか俺がしみじみしていいる隣でヒートアップしていく一方の先輩。

「私だつて悼矢くんときづなちゃんのクラスで一緒に授業受けたいんだからね！ でも違う学年なんだもん！ 同じ授業を受けるなんて夢のまた夢なのよ！ そりや授業中散歩にもでるつてもんでしょう！」

「自分の非行を勝手に俺たちのせいにしないでくださいよー。」

俺は力一杯、ツツツツを入れた。

「あなた方、いい加減にしなさいな。今は授業中で」

「ハッ。心配せんでも来年になつたらかづなちゃんたちと同じクラスになるんぢやうか。お前、留年しそうやしなあ」

会長サマの言葉を遮つて美姫先輩を馬鹿にする俵先輩。どう考へても挑発としかとれないその言葉にもちろん素直に反応する美姫先輩。

「なあんですつてええ！　頭きたわ！　悼矢ぐん、やつておしまこ！」

びしつと俵先輩を指差し俺に指図してくれる。

あんたは水戸黄門か。

「何で俺なんですか。自分でやつて下さい。できればチリの一つも残さないほど完膚無きまでにボコボコに！」

「んおい！？　かつちやんビッちの味方やねんな！？」

「美姫先輩の味方といつわけではありませんが、俵先輩の味方じやないのは天地がひっくり返つても有り得ないのは確かです」

俺はこつこつと笑つてみせた。

「お～い……。なんかえらい俺の方は強調されてへんか……？」

「じゃあ、さづなちやんゴー！　あれは女の敵よ！」

「断る」

ひしゃつと八神に突き放され「ナアーン！？」と驚いている美姫先輩。

「はつはつは！　見放されたな、桧流間！　ええ氣味や～！」

べりるべりんと舌をだして騒ぐ俵先輩。

「なんですかー！ こうなつたら全面戦争よ！ サバイバルよ！ ジ・ハードよ！ 欲しがりません勝つまではー！」

“虎符——虎符——虎符——”

それが会長の限界だつたらしい。

ふるふると肩を震わせて、くわうと眼を見開く会長。

「うむこと言つてゐんですねー。」

キー——ンツ！

その一喝は長い廊下を反響して木霊するほど大きなものだった。

111

余の懸念は、黙つて眼をあんあんとむいてゐる俺たち。

「あなたたち！ 上級生としての意識はありませんの！？ ましてやこんな下級生のクラスの前で授業中に大声でぎやーぎやーと喚いて！ ここは動物園じゃありませんのよ！ 恥を知りなさいな！」

『すいせん』

流石に恥ずかしくなったのかうなだれて頭を下げる先輩がた。

「おお。いいぞ、さすが生徒会長だ。生徒の代弁者」

俺はパチパチと手を叩いて会長を労つてやる。

「…………」

ハ神もどっこいがすつきりした表情で腕を組んでいた。

するとキラヒツヅケを睨んで、すかずかと歩き、

すばあん！ すばあん！

扇子で俺とハ神の頭をはたぐ。

「あなた方も授業中にいつまでわたくしを付き合わせるつもりです
の……こんなところでふらふらせず、知識の一つでも頭に叩き込み
なさいな！」

「…………すこません」

「！？…………！？…………！？」

まわか自分がまでも叩かれるとは思っていなかつたらしくハ神が無
言で驚いている。

「まったく……！ まだわたくしの学校にこんな馬鹿が残っていた
なんて恥ずかしい話ですわ……！ そもそも我が校はわたくしのお
父様が…………」

がみがみぐりぐちねちねち。

堪忍袋の緒が切れたとはまるでこのことだ。

この後、会長はただらぬ気迫を奮わせながら俺たちにチャイムが鳴るまでたっぷりとお説教をしたのだった。

「ひどいめにあつた……」

俺は俺の身に起つた出来事を総評してそう呟いた。

五時間田の休憩時間。

机に突つ伏す俺の周りにいつものメンバーがやつてくる。
「お疲れ様、片桐くん。お説教されてるのずっと聞こえてたよ」と
苦笑いな本田。

「みんな、忍び笑いしてたわね」とやはりどこか客観的な古河来。

「片桐くんの負けず嫌いって筋金入りだね。頑固だし。きっと頭なんか超合金だよ、うん」

「んだと、本田あー！」

俺はわしづと本田の頭を掴んだ。

「きやーきやー！」と楽しそうに笑う本田。

が、俺は力をなくしたよつて、へなへなと再び机に突つ伏した。

「だめだ……体力がもつ無い……」

「しかし、流石は波科高校三大美女の一人、狭霧鏡花だな。身を

まとうオーラが違つたぜ、オーラが

「……お前の中では三大美女の一人だったのか。確かにツラは男受けしそうな感じだったが……」

と会長の顔を思い返す。だがすぐにぎゃーぎゃーと喚く怒り顔になつて俺は少し鬱になつた。

「何言つてるんだ悼矢。あの人に命令されたい踏まれたって人はいくらでもいるんだぞ」

百歩譲つて前半はともかく後半は物好きにもほどがありやしねーか。性癖どうーいづより、人間性が疑わしいぞ。

「男の子つてそつやつて勝手に女の子をランク付けするの好きだよねー。失礼だよ、しつれー」

「ランク付けはあんまり男女関係ない気がするけど」と苦笑いを浮かべる古河来。

「ちなみに、睦月ちゃんは波科高校三大恋人にしたい人の一人だな」

「……他にもあつたのか波科高校三大うんたらかんたら……」

俺は机に肘を付き顎をのせ、呆れ氣味に言つてやる。

「ええー、私がー？ そ、そつかなー……」と顔を紅潮させ、もじもじしだす本田。

「うん、まあ睦月は私から見ても可愛いと思つよ。睦月と付き合い

たいつて人はいつばいいるんじやないかな。
の男子とかにもウケがいいし」

古河来の言葉に本田は赤くなつた頬を両手で挟んでその気になつてゐる。

「おい、古河来。あんまり褒めすぎるなって現実を直視した時の本田が可哀想だろ。持ち上げて落とすのが一番辛いんだぞ」

「むう～。なにか、なにかあるーー！」

ふうーと頬を膨らませ唇を尖らせる。

「ブツブツ……片桐くんなんて女の子の間で名前も挙がらないくせに……ブツブツ……挙げても怖いとか言われてるくせに……ブツブツ……」

まあまあ、となだめている古河来。

じついうじるじる表情を変えるところが人気の理由なのだろうか。あまり幾嫌を悪くさせぬのを何なので俺は一念のフオロードを試みた。

「本田に魅力がないわけじゃないけどな。例えば髪型とかなんてい
うか」

『ハーマイニーだし』

俺の言いたいことを察したのか鍊太郎、古河来、俺の声が見事に揃う。

「がーん！ 別段何の意識もしていないのにファンタジー世界の住人と同一視されてるっぽい雰囲気ー！？」

「ね、ねえねえー。むしろ、それ私の魅力って言つていいのか凄く怪しくない……？」

「興味本位なのだけれど七橋の言つ三大美女つて生徒会長以外に誰がいるの？」

「がーん！ 無視された！」

古河来の言葉に鍊太郎と俺は顔を見合させ、窓際の席の彼女へと視線をうつした。

そこには当然、八神きづなの姿。

足を組み、肘をつき、席に座つたまま片手で机に広げた文庫本を押さえ、氣だるそうに読んでいる。

耳からはイヤホンが垂れ下がつており、シャンシャンと音が漏れている。さらに口にチュツパチャッバスを咥えているらしく、白く細い棒が飛び出している。

完全に周りを遮断して一人の世界に没頭しているようだった。

いわゆる本バリアというものだろうか。

今、私は読書中なので話しかけないで下さい、と周りと自分の間に壁を作り、喋りかけられない雰囲気を構成し、人との接触を避けられる効果があるという。

しかも、喋りかけたところで耳につけたイヤホンでその言葉も聞こえないという一段構え。

まったく、どこまで一人でいるのが好きなんだ、あいつは……。

Dance1 “集うエーテル使い” 其の6・1

多少の付き合いがある俺でも学校で八神と会話したことなど数えるほども無い。

というのも学校であまりエーテル使いだの禍魂だのという話をするわけにもいかないからだ。授業が終われば八神はさっさと帰ってしまうし、俺は俺で家にいる猪突つ娘の暇つぶしの相手をしなければならない。

藤島を捕獲してすぐにエーテル使いとしての基本を教わつてもらつたことがあるはあるが……。それはまた別のお話。

話は変わるがAESSが禍魂やエーテル犯罪者の情報を統制・規制しているのは人々に混乱を起こさせないためという理由もあるそうだ。

人々が禍魂なんて化け物が夜な夜な街をふらついていることを知れば大混乱は免れない。そんなことになれば“まだ大人しくしている”と言える状態の禍魂たちも何をしてかすか分かつたものではない。なので現状維持もかねてそういう情報が表に出ないようにしているのだとか。

俺とてAESSで働いているエーテル使いの河上さんからエーテルや禍魂のことについては他言無用だときつく言い聞かされている。故に、何年も前から学校に通いつつ賞金稼ぎをやっていたらしい八神にすればごくごく当たり前のことなのだろう。学校は学校、賞金稼ぎは賞金稼ぎ。一足のわらじだなんて高尚なものではないのかも

しないが、うまく切り替えをしていかなければならぬのは事実だ。

兎にも角にも、きっと周りのクラスメイトたちは俺と八神が知り合いであることも知らないだらう。

かたやちょっと物ぐさでふつきらぼうな、言つところの一般生徒である俺と、その美しさと孤高さから羨望の眼差しで見られる八神とでは校内の接点など有り得るはずもない。

「ああ。八神さんね。納得したわ」

「八神さんって凄くキレーだもんね。髪もつやつやだし。なに使つてるのかな」

「クールなところがまたその綺麗さに拍車をかけているのよね。相乗効果つていうか」

きやいきやいと八神の話題で盛り上がる女子一人。

「スタイルもいいしな」と鍊太郎が言つと、

『……なぜだか急に引っかかる』

ジト眼で一人に鍊太郎が見られていた。

そんな友人たちの会話に耳を貸し、俺は片肘をついたまま張本人へと眼を向ける。

相変わらず八神は文庫本に眼を落とし、もくもくと読み進めてい

た。

風が窓から入ってきて、彼女の横髪がさらりと頬にかかる。

口の中からチュッパチャップスを取り出すと、ちゅりと舌を出して舐める。

「コーラ味だった。

不意に八神がチラリとこちらに視線をやった。

んあ？

眼があつと八神は再び本へと視線を戻した。

何もなかつたかのよつに「ひひひ」とチュッパチャップスを口の中で転がしている。

その様子に本田も気づいたのか、少し戸惑い気味に言つ。

「今……八神さん、片桐くんを見たような……」

「ははは、まさか。悼矢なんかを八神きづなが気にするわけないって」

えりく低く見られたものである。

事実だけど。眞実だけど。現実だけど。

その時だった。いきなり彼女はぱたりと文庫本を閉じると、耳か

「イヤホンを抜いた。

彼女の様子を観察していたためか、思わず無言になる俺たち。

席から立つと、つかつかと机の間を縫つてどこかへ向かう。つて
いつか、こちらに近づいてくる。

目線の先、その進行方向からしてやはり俺たちの方へと向かって
いるようだった。

俺たちの話が聞こえていたとは思えないが、噂話でもされている
のに気づき、氣を悪くして文句でも言つつもりかも知れない。

こきなりのイベント発生に本田たちは慌ててばたばたと手を動か
し、何かすることを求めて手元の教科書（つまり俺の）をとつて顔
を隠した。本田に関しては教科書を古河来と鍊太郎にとられてしま
つたため、顔を両手で隠すという意味不明な行為にでていたが、ツ
ツ「ハミ」たい衝動を俺は抑える。

果たして、ぴたりと俺の席の前で八神は止まっていた。

なぜかシーンと静まり返る教室内。

……なにこの雰囲気……。

俺は周りを見回した。

八神が自らクラスメイトに話しかけることなど滅多に といふ
か俺の記憶の限りでは今までなかつた。

そのせいか自然と注目を集めてしまったようだ。クラスメイトたちが何事かと俺たちのことを見ている。

ぶわっと背中に脛汗が出るのを感じる。

本田たちもまさか本当にこっちにくるとは思つていなかつたらしく教科書や手から顔を覗かせ口をあんぐりと開けて固まつている。

その微妙に堅い空気を少しでも柔らかくしようと俺は笑つてみせた。

「よ、よお、八神。な、何か用か？」

きつと周りからは全校生徒が知つていてるほどの美女がいきなり目の前にきて、焦つてどもつているように見えただろ？

実際はまったくもつて別の要因でどもつていてるのだが。注目を受けることなどなかなか体験したことの無い俺にとつては緊張しない方がおかしい。

まだ先ほど会長に絡んだ時のように頭に血が昇つていてる時ならばいい。目の前の相手に注目しているため、他人の視線が視野に入ら

ないからだ。しかし、いつ冷静な時に注目を受けると、この居心地が悪いというか、兎にも角にも、慣れるものではない。

八神は注目されて、「……」となどまつたく氣にする様子もなく（もしかしたら氣づいていないのかも知れないが）口を開いた。

「片桐。今、いいか」

片手を腰にあて、凛としたクールな声を発する八神さん。

「え……あ、はい……。どうかしましたか？」

俺なぜか敬語。

クラスメイトたちに注目されていることに、やはり氣づいていないようだ、八神は至つて普通に話しかけてきやがる。

「？なぜ急に敬語なんだお前は……。今まで通りで構わない」

『今までどおり！？』

クラスメイトたちが口を揃えて叫んだ。

ざわ・・・ざわ・・・。

クズ主人公が登場するギャンブル（？）漫画のよつなざわめきが教室内に起ころる。

「あ、いや……」

つつ、と視線を逃し頬をぽりぽり搔く俺。

「変な奴だな……。知らない仲でもないだろ？ 今更そんな扱いを受けても違和感しか感じないぞ」

八神さん！ ちょっとでいいからクラス内の雰囲気に気づいて！？

「まあいい。話したいことがあるんだ。少し時間をくれないか」

そのいかにも気の知れた仲のよつな接し方にクラスメイトたちは口をあんぐり開けて驚いたままである。

そこでぐっと練太郎と本田に腕を引っ張られた。

バランスを崩し、危うく席から落っこちしそうになるのをなんとかもう片方の手で背もたれを掴んで留める。

「お、お前……！ 八神きづなといつからそんな仲になつたんだよ……！ 聞いてないぞ……！」

「ど、どどどどど、どりごり」となの、丘桐くん……！？ なんで八神さんと知り合いなの……！？」

練太郎と本田が俺の耳を食いつかんかのような勢いで耳打ちしてきました。

「……お前ら……！ 腕に爪が食い込んでるって……！」

「！」これは流石に予想していなかつた展開だわ……

古河来は震える手で眼鏡の位置を直しつつ真剣に悩んでいた。

「…………。忙しいなら出直すが……」

俺は三人に言い訳するのを後にしてハ神に向きなある。

「い、いや、構わないぞ。で、何の話だ？」

「ああ、それなんだが……あまり他の人間に聞かれたくない話でな。一人きりになれる場所へ移動したい」

『一人つきりい！？』と過剰に反応するクラスメイトたち。

お前ら、そこまで驚くことかよ！？ 確かにハ神の言い様だと何か二人の間にありそうな印象は受けるかもしれないがつ！

一人きりと言うには訳があるので。

「あ、ああ……。分かった」

「談笑していたところをすまないな。片桐を借りていくぞ」

ハ神が本田たちにそう言つや否や、本田たちは焦りながら声を大きくした。

「あ、いえいえ！ どうぞどうぞ持つていってください！」と鍊太郎。

「どこへでも好きなところに連れていくてあげて下さい！ 彼、根は良い人ですから！」と古河来。

「なんならもう帰つてこなくてもいいへりです。」と本田。

「三人に鼻息荒く詰め寄られ、

「あ、ああ……」と困り気味の八神。

「本田……お前、後で覚えておけよ……。」

「キヤー！ 八神さんと話しちゃつた……！」

俺の内心を知つてか知らずか、ぴょんぴょんと嬉しそうに跳ねる
本田。

八神は芸能人か何かですか！？

「片桐、何をしている。休み時間は少ない。早く来い」とすでに扉
まで移動している八神。

「あ、はい……」

俺は八神のマネージャーみたく背を追つて教室を後にするのだった。
扉を閉めた後、一層、教室内がざわざわとしたのは言つまでもない。

間違いなく話題は俺と八神の関係だろ。

変な噂がたなきやいいが……。

所変わつて屋上。

屋上には俺たち二人以外に誰もいなかつた。といつのも、そもそも屋上は立ち入り禁止になつてゐるからである。しかし、立ち入り禁止の札がかかつたチエーンを乗り越えれば難なく屋上にはこれるので、もつぱら不良の溜り場になつてゐたりする。

爽やかな風が吹きぬけ、八神は流れる髪を手で押さえた。

そういえば一ヶ月前もここで八神と話したことがあつたつけ。

「すまないな。お前が一人になるのを待つとも思つたのだが……」

「いや、気にしなくていいぞ。あいつら喜んでたみたいだし」

喜ぶという言葉に八神は少し理解が及ばないような顔をした。

「それで話つてなんだよ、八神」

話を促すと半ば睨むよつてひからへと顔を向ける。

さつさまでの和やかな空気が一転して張り詰めたものへと変貌してゐた。

当然である。

俺と八神の間にクラスメイトたちがきやいきやい騒げるよつた桃

色々な関係性など無い。

俺たちの話題といえば

「分かつていいだろ？ お前の体質についてだ」

まあ、当然だわな……。

分かつちゃいたが、少し残念な気持ちになり、ぱりぱりと頭を搔く。

「人間にエーテル・エネルギーを力量に変換する機能はない。それをお前はやつてのけた」

かつかつと、屋上のフェンスへ足を伸ばし腕を預けるハ神。

俺もそれに倣いフェンスへと向かう。

「それもこの街に地震を引き起こすほど非常識なエネルギー……。

あの力は一体なんだ……！ お前は何者なんだ……！」

ハ神は振り返ると俺の胸倉を掴み上げた。

「教える……！ ビリやった……！？ ビリすればあの“力”が手に入る……！」

ハ神のその眼は真剣そのものであった。ビリか焦っているようにも感じられる。

「私には必要なんだ！ 力がつ！」

「ちょっと待て！ 落ち着けハ神！」

ビービーと両手を見せてストップをかけてはみるものの、ハ神は止まらない。

「あれからお前の力のことを自力で調べたがなんら有力な情報はなかつた！ 一体どうやってあの力を手に入れた！」

三週間ほど前の話だろうか。ハ神は俺の身体のことを調べると言つていたが、この分だと結局何も見つからなかつたらしい。

「俺にもよく分からないつて話はしだだろ！ 第一に、俺がエーテル使いになつたのはつい最近だ！ エーテル使いの基本を俺に叩き込んだのもお前だろ！ それはハ神もよく知つてることじやねーかよー！」

「お前が知らないはずがないだろー！ お前の体のことなんだぞ！」

ハ神の言つことももつともだ。

あの時のことは鮮明に覚えている。

本来、自分の体であるはずのものが、まるで自分の意思に反応しなかつたのだ。

ただ感じられたのは破壊的衝動と欲求。

満ち溢れる抑えきれないエネルギーと、それを解放する快感。

『オラ、強えやつと戦うのが趣味だ』と豪語するようなサイヤ人とまではいかないものの、確かに俺は好戦的な人間だ。この一ヶ月、禍魂やエーテル使いと自ら進んで戦うこともあった。

負けず嫌いといふこともあつてか、強い者と戦えることは自分の力量を計る上で純粋に楽しいとも思つ。

だが違う。

一ヶ月前のはあはもつとドス黒いものだつた。

圧倒的な暴力で相手をいたぶるような、普段の俺が抱いている戦闘への考えとはかけ離れた思考。

自分の知らない自分の体。

これほど怖いものはない。

俺はギリッと奥歯を鳴らした。

「分かつてゐさー、だけどやつぱり何度も考へても知らねえし、分からねえんだよー！」

俺は親父やおふくろに何にも教わらなかつた……！ エーテルのことも禍魂のこともイデア界のことも……！ 何も聞かされてねえ！ つい一ヶ月前までは何も知らずに暮らしてたんだ！ 知るわきやねえだろ！

「……くつ……！」

ハ神は怒りを抑えるように俺から手を離し顔を伏せた。

「悪い。お前に当たつても仕方ないよな」

ハ神は再び、波科の町並みを見下ろすと拳をぐつと握った。

「……いや、すまない。私も悪かつた。

確かにお前に訊いて分かることならば苦労などしない。私なりに調べてはみたが完全に行き詰つてしまつてな。焦つていたんだ」

「やつぱり……。何も分からなかつたのか」

「……ああ。

「ないんだ、前例がな。唯一分かつた事といえば」

「なんだ!? 何が分かつたんだ!?!?」

今度は俺がハ神に詰め寄る番だつた。

ハ神は今まで口に含んでいたチュッパチャップスを取り出す。

飴玉はもうかなり小さくなつていた。

「唯一、分かつたことは…… A E S S の上層部ではお前が“奇跡の子”と呼ばれている……それくらいだ

“奇跡の子”。

確かにグリフオルオや藤島も俺のことをそう呼んでいたが……。結局、どういう意味かは分からず終いであった。

“奇跡の子”か……。やっぱり親父とおふくろに何か関係があるのか……

俺は誰かが中庭から運んだらしいベンチに腰をかけた。

八神は再び口の中にコーラ味を突っ込む。

「だろうな。だがお前の両親に関する情報もほとんど分からなかつた。一体、お前の家系はどういう血筋なんだ。河上から聞いてないのか？」

「多少は聞いたぜ。河上さんに言わせれば当時、最強だったエーテル使い……らしい。イデア界の開拓と研究をやつていたんだよ。河上さんは親父の弟子だったらしくて、それについていつてイデア界に行つたらしい。親父とおふくろがグリフオルオに喰われたのもその時のことだと」

「当時は“穴”があつたと聞くからな。今となつてはそそんなものが存在していたかどうかも怪しいという意見が大多数だが……。やはりイデア界に行く方法は存在していたか……」

八神は何か考え込むように街を眺める。

「お前の父親のことを調べるのがお前の体質に行き着く最短ルートかも知れないな」

「俺の前ではエーテル使いである」とは億尾にも出さなかったからな。調べるのも難しいと思うぞ」

俺に似て、いやこの場合、俺が親父に似たのか、とにかく俺と同じく好戦的な親父。物心付いた時には既に殴り合いの喧嘩をしていたのを覚えている。

というか、哀しいことに親父との思い出はほぼ殴り合いの喧嘩が占めていた。幼い少年、ましてや自分の子供に本気で対抗心を燃やす父親の図。あまり人に話せるものではない。

おふくろに関して言えばぶっちゃけあまり覚えていない。が、恐怖の対象でしかなかつたというイメージが頭に残っている。親父がおふくろにガミガミと怒られているのをよく見かけたからだろうか。姉さん女房、かかあ天下、逆亭主闘白。言い方は何でも構わないが親父が尻に敷かれていたのは変えようのない事実である。当時は『アリス』という名も周りの友人の母親と違うようで不信感を抱いていたものだ。そんな俺の気持ちを知つてか知らずか、おふくろは俺のことを猫可愛がりしていた。親父と違い相当な親バカだったのだ。今から思えばそれがまた親父の対抗心を燃やしていたのかも知れない。となると、親父もなかなかかわいい奴だと思えてくるから不思議だ。

「問題はお前の体質や父親だけじゃない。お前も気づいているだろう。今、私たちは“ラグナロク”から狙われている」

俺は昔の思い出に浸るのを止め、こちら側へと帰ってきた。

「藤島たちのエーテル犯罪者組織だよな。やっぱり八神のところに
もちよつかいを出してたのか」

「ぐりと頷く八神。

「河上も幾度となく“ラグナロク”に襲われていいようだ。どうせ
奴らの逆鱗に触れてしまつたようだな、私たちは

ふうと息をつき『面倒だ』といわんばかりに前髪をかきあげる。

「“ラグナロク”はエーテル犯罪者組織の中でも最大の規模を誇っ
ている。構成人数は一　人以上……ともな」

「けどよ。なんで俺たちなんだ？　倒したのは藤島一人だけだぞ」

「藤島は“ラグナロク”的幹部の一人だつたようだ。それを倒され
捕獲されたとなれば、私たちに報いを受けさせなければ示しがつか
ないのだろう」

「狙われる理由はそれとしても……実際、どうするんだ？　この
ままずっと受け身になつてもジリ貧だぜ。数に差がありすぎる

一ヶ月前には比べ俺も多少はエーテル使いとして成長しているため、
一人の足手まといにはならないとは思うが、流石に俺と八神、河上
さんだけで一人を相手するのは無理があるだろう。

特に藤島クラスがまだいるというのなら今度はどういう結果にな
るか分からぬ。

三人が手を組んでやつと倒せたぐらいの男だ。もし今、俺とリタで藤島を倒せと言われば……まあ、間違いなくボコられるだろう。

「そんなことは分かつていい。しかしこちらから行動を起しそうにも“ラグナロク”たちがこの街のどこに潜伏しているのか……誰が“ラグナロク”なのかが分からん……。

「」の校舎内に“ラグナロク”のメンバーがいてもおかしくはないしな

「おいおい、怖いこといつなよ」

思わず横に立つ八神を見上げる。

八神は町並みを眺めるのをやめ、フーンスに背中を預け、空を見上げた。

「可能性は〇ではないといつ話さ。

“ラグナロク”は禍魂と手を組んでいる。犯罪組織として活動するだけではなく、その組織自体に何か目的があるとは思うのだが……

「禍魂と手を組む奴らの考えてることなんか想像もつかねえな」

「やうだな。これに関しても追々調べる必要があるだりつ。禍魂たちの動きも気になる」

「禍魂たちの動き?」

「呆れたな。気づいていないのか

「…………なんかすいません」

しおぼくれる俺を見てハ神はやれやれとばかりにため息を吐いた。

「最近の禍魂の動きはどうにもおかしい。いや、禍魂だけじゃなくエーテル犯罪者もだ。

「この一ヶ月、禍魂やエーテル犯罪者の事件が激減した」

「なんだよ。いいことじやないか」

「頭を働かせる。禍魂やエーテル犯罪者に人を襲うことより優先するべきことができた、ということと同意義なんだぞ。

もしくは

「

そこで言葉を切つて、ハ神は眼を細めた。

「もう襲う必要性がなくなつた」

「それって……」

“ラグナロク”は何かの目的のためにエーテル使いや人を襲つていたのだとハ神は考へているようだ。そして、それがなくなつたというのは何からの準備が整つたことを示唆しているのかも知れない、ということ。

「ああ。嵐の前の静けさというやつだろ？。意外に早くくるかもし

れないな。禍魂たちが本気でこの世界を食いつぶしかかる日が……。

注意しておけ。次、奴らが私たちと接觸する時は多少派手にくるかもしねん……。

残る時間は多くないぞ

『ぐへり、と俺は生睡を呑んだ。

「まあでも俺たちが動かなくても“ラグナロク”的様子じゃ相手からきてくれただけだな」

俺はおどけるよつて言つて、両手を頭の後ろで組んだ。

「違いないな」

フと綻ぶように笑う八神。

八神の笑顔の珍しさに俺は思わず呆気にとられて横を見上げたまま無言になってしまう。

「？」
「どうした？」

「あ、いや……」と氣恥ずかしくなつて俺はぽりぽりと頬を搔いた。

「あ、待てよ。
AESSでは俺の親の情報がほとんど残されていな
いんだよな?」

「ああ……。そのようだが。それがどうした」

「いや俺の親父の部屋になら何か資料があるんじゃ ないかと思つて

10

「ないな。私がAESSの人間なら資料はとっくに回収している」

ごもつとも。AES内でも上層部の一部にしか知らないというな

うわういつた資料は既に回収されている可能性が高い。

「だが今の時点でそれくらいしか探る場所もないのも事実だぜ。どうせ他はもう調べつくしたんだろ?」

「…………ああ。 そうだが…………」

そこで俺はふとした違和感に気づいた。

「うつてちょっと待てよ。 なんかおかしいぞ」

「なにがだ」

「今のお流れだとAES Sは俺たちに何か隠し事をしているってことになるじゃないか」

キーン「ーンカーン「ーン、と俺たちの沈黙を覆うようにチャイムの音が鳴る。

チャイムが鳴り終わるとハ神は呆れたような表情で言つた。

「何を今更。 最初から私はそう言つてはいる。 お前も知つてはいるだろう。 AES Sが一枚岩ではないことを」

「合界派と別界派か」

エーテル使いは思想の違いから大きく一つに別れている。 異世界であるイデア界に繋がる“穴”があるといわれているが、この“穴”をどうするかでエーテル使いたちはしばしば衝突を起こしているのだ。

合界派は“穴”からエーテル・エネルギーを引き出しへの世界で利用しようと考へる者たち、要するにイデア界との共存を考える者たちである。

変わつて別界派は臭い物には蓋をしろ理論で、穴を塞ぎ現界とイデア界を完全に切り分け、禍魂から身を守りと考へる者たちだ。

結局、この二つの勢力はいつまで経つても平行線。解決の糸口さえ掴めないような状態が長い間続いているのである。

俺の言葉にハ神が頷く。

「AES Sの存在理由は確かに人々を禍魂やエーテル犯罪者から守ることだ。だが手に入れた情報を合界派が別界派に、別界派が合界派に流すかと問われれば……」

「なんだよ、それ！ 結局AES Sも真つ二つでいがみ合つてゐてことかよ……！」

そういうエーテル使いの衝突を取り締まるべき組織が内部で衝突しているとなれば、一体誰が場を治めるところのか。

「ああもうー、あつちもこいつも問題だらナジやねえかよー！」

わしゃわしゃと髪をかきむしる。

「でも悩んでたって仕方ねえ。行動しなきやな。俺たちができるひとを一つ一つやってこいつ。少しでも今の状況を変えるんだ」

そんな俺の言葉にハ神はフと笑う。

「お前は私と正反対だな」

「あん？ ビリビリ」とだよ？」

「お前は“奇跡の子”と呼ばれみなに必要とされている。だが私は
」

“拒絶されし子”。

俺はグリフオルオがハ神に言つた言葉を思い出した。

それは何を意味しているのか。

俺はAESでハ神が他のホテル使いから壁を作られ白い眼で
見られているのを知っている。学校での羨望の眼差しなどではなく、
触れてはいけない腫れ物のように見られ、扱われているハ神。

いや、今はそれを考えるのはよそう。どんな意味だって構わないの
だ。ハ神はハ神。俺にとつちや頼りになる存在であることにには代
りはない。

「帰つたら親父の部屋を調べてみるか」

「ああ、そうしろ。結果は見えているがな

「そうしきつて……手伝ってくれないのかよ、ハ神。情報が欲しい
んじゃないのか？ 他はもう調べたんだろ？」

「手伝つも何も資料など残つているはずがないからな

「そんなもん調べてみなきや分からぬいだろ」

「分かるわ。あるはずがない」

「あるかもしれないだろ。調べてみなきや分からぬいじやねーか

「いや、分かる。ないな」

「分からぬえって！ なんで決めつけんだよー。」

「分かるー。常識的に考えれば想像はつくだろー。」

「分からぬえよー。」

「分か

「らねえー！」

言葉の先を俺に取られ、ハ神は悔しそうな表情になる。

「くうつ……ー。お前はじこまで頑固なんだ……。」

「ハ神にだけは言われたくねえぞー！」

するとハ神は仕方がないとでもいう風に後頭部を搔いた。

「……分かつ分かつた。私も手伝おう」

「そつこなくつちやな。頼りにしてるぜ、八神」と、
言つて肩を叩くと、

「調子の良い奴だな、お前は」と八神は苦笑した。
気持ちの良い風が、俺たちの間には吹いていた。

Dance1 “集うHーーテル使い” 其の8 - 2

放課後。

俺は裏門に来ていた。周りを見回してみると人影はどこにも見当たらなかった。

それもそのはず裏門は山側にあるためこちらから帰宅する人はいないのだ。駅方面や住宅街に近い正門から帰るのである。

「……」で八神と待ち合わせをしているのだが、まだ彼女の姿はない。

八神の方が先に教室を出たんだがなあ……。

一緒に教室を出るとまた何を言い出されるか分かったものではない。なので俺は八神から少し遅れて教室を出たのだった。

『また』と言つからには既に何かを言われたわけだ……。授業中に教室へと帰った俺と八神は授業が終わるや否や、本田たちにどんな関係か問い合わせられたのだった。

結局、本当のこと話をすわけにもいかず、適当にお茶を濁して逃げたが。

後が怖えーな……。

そんなわけで待ち合わせ場所を正門でなく裏門にしたのもそのためである。

ハ神つて待たされるのとか嫌いそつだし、帰ったんじやないだろうな……。

そんなことを考えていると、

「待たせたな」

後ろからハ神の声がして振り返る。

「ハ神、もう帰っちゃったのかと……って、おい

「どうした」

「なんだそりゃ」と俺はハ神が持っているものを指差した。

ハ神は大きなバイクをエンジン切ったまま転がしているのだ。

「BMWのR1200Rだ。いいバイクだろ?」

そう言つて青く塗装されたR1200Rとやらを撫でる。その様子は少し可憐げだった。

「私はバイクいじりが趣味でな。新しいバイクを手に入れたら乗り回したい衝動に駆られるんだ」

「おまえ、まさかこれに乗つて学校に来てるのかよ。うちばバイク登校禁止だろ? いや、そもそも免許取るのも禁止だろ?」

「知ったことか。ほら、さつさと乗れ」

ヘルメットを渡され、仕方なく俺は後部座席に座った。

「お前の家はどの辺りだ？」

「中央公園を突っ切った辺りにクリーニング屋があるのは知ってるか？」

「ああ」

「あの近くだ」

「かなり駅前から離れたところに住んでるんだな」と八神はキーを回した。

ぶるぶるぶるぶると心地よい重低音にあわせて車体が振動がする。

「八神。スカートのままバイクに跨って大丈夫か？」

「問題ない」

と八神は後ろに座る俺に見えるように自らスカートをめくつてみせた。

あわや下着が見えるかと思いきや、八神は黒のスパッツを履いていた。

「そこまで無防備ではないわ」

スカートを離すと、白いふとももから黒のスパッツが見え隠れしている。なんか妙にそそられるがあまりジロジロ見ると殺されそう

なので俺は気にしなこう努めた。

「安全運転で頼む」

「任せておけ。私の運転テクニックはプロ級だ」

自信満々の『』様子なハ神さん。

ハ神には悪いが正直言つて不安しかない。こいつは奴は大抵、運転が下手くそと相場が決まっているのだ。

「少しばかり近道をするぞ」

ぶるうおおおん！ キキキキキイイ！

さう言つとハ神はいきなり左足を軸にしてアクセルターンで方向転換する。コンクリートにタイヤの黒い筋が伸びた。

そして前輪の向いた方向はといつと……。

「うあおおおおい！ そつちは森だぞーー？」

木々が鬱葱と生い茂る山側であった。

「言つただろ？ 少し近道をするぞ」

事も何気にあっぱりと言つ放つハ神さん。

そこで俺は少し考えを巡らせる。

ポクポクポク……。

脳内にこの辺り一体の地図が浮かびあがり、現在位置である裏門前と俺の家もとい中央公園の辺りを線で結ぶと

チーーーン！

森の中を一直線！？

馬鹿じやねえの、コイツ！

「八神さん、八神さん！ それ近道じやないんですけど！？ って
かそもそも道でもねえよ！ 聞いてんのか、おい！」

俺の話を無視し、返事の変わりにアクセルを全開にしてバイクは走りだした。

Dance1 “集うHーーテル使い” 其の9 - 1

ふわりと一瞬だけ持ち上がる前輪。

いきなり振り落とされそうになり思わず俺はハ神の背中に抱きついた。

ぎゅるおおおおおおおおん！

本来の進行方向である道を横断するように走りだす青いバイク。

「ぎゅあああー！？」

誰かこの人止めて、ふりーず！

バキバキバキバキ！

木々や草木の中を突っ切って山の中を下っていく。

「黙つていろ……！ 舌を食こなしきつたいのか……！」

ガタガタと揺れまくるバイク。まるでトランポリンの如く跳ねる後部座席。

「落ちるー？ 落ちる、落ちるー？」

俺は必死にハ神にしがみつくしかない。きっと今、俺がバイクから落ちても彼女は気づきもしないだろう。

ふと前を見るべ、どうやら森から抜けぬらしい田の光が前方に見えていた。

ああ、やつと出でれぬ……！

やつ思つたが、どうやら災難はまだ続くようであった。

なんと森の先に道が無いのである。

そこで俺は氣づいた。

この先は崖になつていて三メートルほど下に道路が通つているのである。

ぶわ！

一気に脂汗が出た。といふか死を感じた。

まさか、こいつ……！

「ハ神さんー？ その先、崖ですかーー？」

「知つている……ー」と舌で歯をペロリと舐め、更にスピードを上げやがるハ神。

「やあああああーー？」

森から抜け、光の中へと飛び込んだその刹那！

ふわつー！

妙な浮遊感が俺を襲う。

下には山に巻き付くように造られた一般道。もちろん車が走っている。

散歩の途中なのだろうか、犬を連れたおばさまが俺たちに気づいて上空を見上げ、口をあんぐりと開けていた。

そりゃそりゃ。いきなり頭上中空からバイクが飛び出してく
りや驚かないほうがおかしい。

八神と俺を乗せたバイクは一般道を飛び越え、おばさんの前に着地した。

ガシャン！ ギヤギギギギィイイイ！

「バウバウバウバウ！」

犬が驚きのあまり吠えまくつてこる。

だがそんなことを八神が気にすることもなく暴走はまだ続いた。

なんと更にそこから歩道を横断して、むりに三メートル下の中央公園の茂みの中くじダイブしたのである。

また浮遊感が我が身を襲い俺の口からすっとんきょな声が漏れ出る。

「ふおおおおおおおーー？」

中央公園の階段をガタガタと降り、ため池の中をジャブジャブと突っ切り、キス寸前のカップルの間を通り抜け、サッカーをしている真っ最中のグラウンドの中に入り、ゴール寸前のシュートを車体で止めて突っ切る。

「ルパンルパン！ ルパンルパン！」

俺は訳が分からずそう叫んでいた。

Dance1 “集うHーーテル使い” 其の9・2

キキキキキキイーーーツ！

片桐家の前に青いR1200Rが急停止する。

「ここか。思ったより早く着いたな」

八神はエンジンを切ると颯爽とバイクから降りる。

ズルリ……ズルリ

そんな音が背後からしたためか八神は自分の腰から腹に巻き付いている腕にやつと気づいてくれた。

その腕の視線の先を追うとバイクからずり落ち八神に抱きついたまま足を地面に引きずっている俺の姿。

「……おい、着いたぞ。いい加減離せ。動きにくい

ぱしんと慈悲もなく腕を払われ、俺はぱたりと地面に崩れ落ちた。

そりや……あんな近道したら早く着くだろ……。

「何をしている。わざと案内しない

「八神」

俺はふらりと立ち上がった。

「なんだ」

「もう一度とお前のバイクには乗らねえ！」

「な、なぜだ。風が気持ち良かつた筈だ。お前が望むならまた乗せてや」

「乗らねえッ……」

そんなやり取りをしながらハ神のバイクを庭に止め、俺はぐつたりとしたまま玄関の引き戸を開く。

「た、ただいま……」

「おかえりー、悼矢ちゃん。私も今帰ってきたとこ あれ？」

ぱたぱたとリビングから出てきたこよりがハ神を見とめると少し驚いた表情になる。

「お姫さん？ 珍しいね。悼矢ちゃんが女の子を連れてくるなんて」

「じょりが珍しがるのも仕方がない。なんせこの家に訪れる女の子と言えばこよりの友達か、この家の数軒先に住んでいる残念な美姫先輩ぐらいいなもんだつたからだ。

「こじつはクラスメイトのハ神。

ハ神、俺の妹のこよりだ」

俺が互いに紹介すると、『よつはに』やかに笑つてぺこっとお辞儀した。

「どうも初めまして。悼矢ちゃんがお世話になつてます」

「あ、ああ『とど』かぎりちない八神。

おそらくあまり今まで人付き合いをしてこなかつたせいで、どういつ対応をすればいいのか分からぬのだろう。

そこでいつもは俺が帰ると犬みたく尻尾を振つて『遊んで、遊んで』と寄つてくる一人の暇人を思いだす。

「リタは何してる?」

「さつき見た時は畳のお部屋でお昼寝してたよ。その前はリビングでゲームしてたみたい。机にゲーム機がでばなっし」と苦笑いなこより。

それを聞いて思わずため息が出てしまう。

まったく、俺が苦労して情報を集めようとしてるつてのに……。八神の言つとおりに『最近は禍魂の気配が薄れたせいでダレてんな、あいつ……』。

「ちょっと親父の部屋使つた。

八神、部屋は二階だ

「お父さんの部屋? どうして?」

怪訝そうな顔で首を傾げる。

「あ、いや、それはだな……」

俺はこよりにH-テルや禍魂、イデアのことを話していない。A ESSが情報規制しているのと同じように、人を襲う化け物がいることなど話しても混乱させたり、怖がらせるだけだろうという配慮もある。が、なにより『普通に生活すること』それが俺の彼女に対する望みもあるからだ。

彼女 こよりは幼い頃、少し特殊な環境下にいた。それが原因か、かなり荒れていた時期があったのだ。俺に噛みついたり反抗的な態度をとったり……。

つーか、殺そうとしたり（笑）。

そういう事態を乗り越えたこともあってか、今の俺とこよりは兄妹としての絆以上に個々人の強い信頼関係がある。

そんなわけで彼女には普通の暮らしどうものを享受していく欲しいわけだ。

俺が話したくないのを察してくれているのか、こよりも別段リタや俺たちが何をしているのかを訊いてこない。暗黙の了解みたくないつているのが現状である。

心配はするけど深入りはせず、個人を尊重して首は突っ込まない。これである。

なに?

眼をぱちくりとさせ、小首を傾げる。「うつ。」やうつと両側で結んだ短い髪が肩にかかる。

ああもう可愛いなあ、」といつぱり

え、二二、たから、それは、

頬をかりかりと搔いてどう言つたものか考えていると、そんな俺の様子に業を煮やしたのかハ神が口を開く。

「何を言い淀んでいる。素直にお前の体の

たがそれを俺は慌てて大声を出して搔き消した。

ひいぐりしたあと、しきなり大声出さないでよ。悼矢ちゃん」

俺は素早く八神にひそひそと耳打ちする。

「八神つ！ こよりは禍魂とかエーテルとかのことは知らないんだよ……！ つーか、知られたくないんだよ……！」

「何を言つてゐるんだ。」の子は

と、そこで八神はこよりの視線に気が付き眼を合わせる。

「…………」

「…………」

無言で見つめあうハ神とこより。

そしてハ神はやれやれとばかりにため息を吐くと、めぐぐくそれうに頭を搔いた。

「まつたく…………どいつもこいつも…………。部屋は一階だつたな

「あ、ああ

ハ神に尾いていこうとするが、制服の袖がくいくいと引っ張られた。

振り返ると引っ張っているのは、言わずもがなこよりその人だ。

「悼矢ちゃんつ、悼矢ちゃんつ」

「ん? どうした?」

なんだか嬉しそうなこ様子のこよつさん。

「ハ神さんつて…………いい人だねつ!」

何があつたのかこよりは笑顔でそう言つた。

「は、はあ? どういう意味だ?」

「いいから、いいから。ほお、早く行かないと。女の子を待たせちゃダメだよっ!」

「あ、ああ……」

マイシスターに背中を押され、彼女の様子を訝しがりながらも階段を上がるのだった。

一階に上がるとき八神は物珍しそうに廊下を見回していた。

「部屋が多いな。お前の家は」

「いつも見えてこの家は共同賃貸なんだよ。今は誰も入居していないけど」

後半はぼそりと呟くように言つて、廊下を歩く。その後を八神がついてくる。

「共同賃貸だと? お前の親が経営していたところだとか?」

「うういな。経営なんてそんな大層なもんじゃねーと思うけど……。

放浪癖があつたみたいでさ。俺が覚えてる範囲で誰かが住んでた記憶はないんだよな。

「ほらここだ。親父の部屋」

一ヶ月前、俺の父親、片桐司の部屋を俺とリタは探索したことがあつた。その時は片桐家にエーテル・エネルギーがたゆつてている理由を突き止めるためであつて今とは探索する理由が別だつたが……。

結局その時、俺とリタは金庫を見つけるにいたつた。

「んで、見つけたのがこの金庫だ」

あれから床に置きっぱなしの黒い金庫をぽんぽんと叩く。

八神はしゃがみ込んで金庫を調べ始めた。

「結局、鍵がなくて開けれなかつたんだけどな」

俺はお手上げとばかりに詰まれた書物の上に腰を降ろした。

「だが今ならここの金庫をどうやって開ければいいか分かるだろ?」

「へ……? ……八神、この金庫の開け方分かるのか?」

俺の言葉に彼女はこくりと頷いた。

「ここの金庫の鍵はカードキーだとは理解しているんだろ?」

「ああ。だけどこよりもカードキーなんか預かってないって言つてるし……」

そう言つた後で俺はある可能性に気づく。

「まさか……カードキーはエーテル・カードか!」

人間はエーテルたちのようにAEを力量・物質に変換するような仕組みを体に持つていなることは既に説明した通りだ。だが、それを擬似的に可能にする装置を人間は開発した。

それがエーテル・カードだ。

エーテル・カードはAEを注げばどんな人間でも発動できる魔訶

不思議なアイテムだ。しかしエーテルが発動することはできない。それはそもそもエーテルが放出するエーテル・エネルギーというものは“変換されたエーテル・エネルギー”であるかららしい。そのエネルギーのことはエーテライズ・エネルギー（A S E）と呼ばれるようだが、その辺りの説明は割愛しよう。兎にも角にも、エーテル・カードを発動させるにはまだ変換していない“純粋なエーテル・エネルギー”でなければならないのだ。まあ、要するにエーテル・カードは人間がイデア界に接触できることを最大限利用した画期的な装置、というわけだ。

「おそらくそういうことだらう。だとすれば鍵となるエーテル・カードがない限りこの金庫は開かないだらうな」

「なんだよ。結局手詰まりなわけか」

コンコン。

扉がノックされこよりが入ってきた。

「お茶とお菓子持つてきましたよー」

さすがはマイ・ラブシスター略してマブシスである。こいつの気遣いができるのがお兄ちゃんと違つて友人が多い理由なのかも知れない。

「炭酸飲料のジュース残つてなかつたか？」

お茶が入つたコップを見つめているハ神を見てこよりに尋ねてみる。

「「」「」めぐね。リタさんが全部飲んじゃったみたい

…………。あの野郎…………。

リタがこの家に住みはじめてから著しくエンゲル係数が跳ね上がりてる気がするのは錯覚じゃないだろうな…………。

「いや、構わない

と、無表情に言つハ神ではあるが微妙に残念そうに見えるのは俺だけだらうか。

「「」やつへつして行つてくださいこねー

「ようつは手をふりふり部屋を出て行く。

「…………自慢の妹か

出で行つたこよつを田で追つてハ神はコップに口をつけた。

「可愛いだろう。料理もうまいんだぞ。毎朝起きててくれるし俺の弁当も毎朝作つてくれるんだぞ」

「…………お前がシスコンと呼ばれる意味が理解できた

「ねーねーねー。

「さうかし、この金庫が唯一の手がかりだと思つたんだけどなー

「諦めるのはまだ早いぞ。金庫以外に何があるかもしれん

ハ神は本棚の本をペラペラとめくり始める。

資料などあるはずがないとか言ってたくせにハ神の方が断然やる氣あるじゃねーか。

そんなに欲しいか俺が持つてる特異体质。

と、その時だった。

ピンポーン。

家の呼び鈴が鳴らされた。

「ありや来客か」

『悼矢ちやーん！ 今、手が離せないから出でーー！』

階下からそんなこよりの声が聞こえてくる。

「だそうだ。ちょっと行つてくる

「……ああ」

興味深い本でも見つけたのかハ神は本に眼を落としたまま生返事する。

この分じゃしばらく放つておいても大丈夫か。

俺は静かに部屋を退出した。

私は本をして文字を追っていた。

興味深い内容だった。

片桐の父親はなかなかに面白い趣味をしていたようだ。おそらく相当、知識欲の高い高尚な人間であったのだろう。

本を閉じ、私は何か他に目ぼしい物はないかと部屋を見回す。そしてある本が眼に入った。

『悼矢 成長の記録』

何気なく私はそのアルバムを手に取る。ハードカバーで手にずしりとくるそれを開いてみた。

そこには片桐の赤ん坊の頃からのまさに成長の記録ともいえる写真が貼られていた。その写真の近くにはどこで撮つたものなのか、いつ撮つたものなのかななどがこと細かく記されていた。

両親に放浪癖があつたとは言つていたが、どうやらそれに片桐も幾度となく連れられていたことがあつたらしい。

無邪気でわんぱくな子供時代を送つたらしい奴の写真を見て、ふと顔がほころんでしまう。

幸せそうだった。

今でこそ両親が亡くなつたとはいえ、昔はそれこそ普通の家庭と同じく育てられたのだらう。

本当に……“正反対”……だな……。

『あの子が例の……』

『まつたく……いい迷惑だな……』

冷たい視線。白い眼差し。私を避ける人々。

暗闇。雷鳴。

『助けてよ！ 誰か！ 助けて！！ お願いだから……助けてよっ
か助けて……！』

血を滲ませて剥がれる爪。

『どうして……誰も助けてくれないの……！ 助けてよ……！ 誰
か助けて……！』

体温を奪つ雨。尽きていく体力。

『誰もお前を助けない。誰もお前に興味はない。八神きづな、お前
は独りで生きるしかないのだ』

嫌な記憶が脳裏に蘇り私は頭を押された。

頭に血が昇つていて。

興奮したためエーテル・エネルギーがじんわりと体から漏れ出る。

と、そこで私はある違和感に気づいた。

それはほんの微量なエネルギーの残り火。

「……？」

発生源は手に持つ片桐のアルバム。

そのアルバムからエーテル・エネルギーが微かに感じられたのだ。エーテルが見れば一発で分かるだろうが、人間が見れば見落とす程度のごくささいなもの。

通常、本からエーテル・エネルギーを感じることなどあり得ないことだ。

つまり、誰かがこの本にエーテル・エネルギーを込めたということ。

これは、まさか……。

エーテル使いは一般人に秘密を知られないように文章に特殊な暗号をかけることがある。

仕組みはエーテル・カードと酷似している。一般人が見れば普通の何でもない文章なのだが、エーテル・エネルギーを注ぎ込めば真の文章が浮き出てくるという代物だ。昔からエーテル使いがよく使つ

た秘密隠匿のための技術である。

「ぐく、と生睡を呑む。

AESは気づかず回収し忘れたか……！

おそれく……いや、間違いなくこのアルバムには何か重要なことが書かれている。

すぐさま私はそのアルバムにエーテル・エネルギーを注いだ。

すると、貼り付けられていた笑顔の片桐の写真が違う写真へと変貌していく。文章もまた違う意味のものが浮き出てくる。

「つー？」

本来の写真と文章を見た瞬間、ビセツとアルバムを床に落としてしまっていた。

どういう意味なのか、理解できなかつた。

何が写っているのか、理解できなかつた。

だが思考が結論に辿り着いた瞬間、手からアルバムが離れていた。

声にならない。

いや思わず叫んでしまいそうになつた。

だが自分の口を手で塞いでそれを阻止した。

顔から血の気が引いたのが分かる。

「！？！？！？」

驚きのあまり脳が考えることを拒否していた。

キツい。

キツすぎると。

「こんなことがあっていいのだろうか。

こんなことが本当にあるのだろうか。

田畠がして体がくじりつと揺らめき背後の本棚と背中がぶつかる。

片桐がこの事実を知つたら……！

知るべきではない。

見るべきではない。

教えるべきではない。

AESSが片桐に隠している意味が分かる。

何もAESSは悪巧みで隠していたわけではない。奴らの心遣いから誰にも知られないように秘匿にしていただけだったのだ。

そして私があの特殊な力を手に入れることは絶対にできない。

奴はやはり世界で一人しかいない絶対唯一の“特別な存在”だつたのだ。

落ち着け……！ 片桐が戻ってきたらどうする……！

私はすうーっと深呼吸した。

…………大丈夫だ。ちゃんと普段通り接しよう。

そして呟く、本当の意味を知ったその言葉を。

「…………“奇跡の子”…………か…………」

私の手から離れたアルバムはただただ笑顔で無邪気に笑う子供時代の片桐を映し出していた。

「はーい」

俺は氣だるい感じで片桐家の門を開けた。

門前には一人の少女が立っていた。身長は俺と同じか少し低いくらい。歳は俺より少し上くらいだろうか。

白の着物に赤の袴で身に包まれた姿。その巫女さんや剣道場で着られるような格好と相まって清楚とした佇まい。

透き通るような黒髪を白い紐で結っている。いわゆるポーネー ルと呼ばれる髪型。その頭には三度笠。足には白い足袋、わらじといつ遙か昔の旅芸者 のようだ。その背中にはまるまるとなつた大きい風呂敷を背負つて いる。

とても綺麗な人だつた。大和撫子とは彼女のために作られた言葉なのではないかといふほどの和風美人。

しかしじうしたことだらう少女の眼は涙で潤んでいた。

まるで感極まつて いるかのよひ。

「ど、どう様で しょうか？」

俺が開口した瞬間。

ぶわっー。

彼女はどぞりと風呂敷を地面に落とし、眼の幅涙をだああつと流し始めた。

鈴が鳴るような澄んだ声で彼女は言った。

「やつと……一 やつとお会いすることができました、棹矢さま…

…」

だきつ！

胸に飛び込んでくる巫女装束の女性。

「と、悼矢さまあ～！？」

そんな呼ばれこともない敬称に俺はただただ驚くしかなかった。

Dance1 “集うHーーテル使い” 其の11・1

しばらくして客間には俺と彼女の姿があった。客間の窓からは庭が見えており、縁側では白猫のしらたまが田向ぼっこをしている。気分でも良いのか尻尾がリズム良く廊下を打つていた。

客間は畳部屋で、俺の背後には『千客万来』の文字が書かれた掛け軸がかかっている。

昔はよく親父が来客の度に利用していた部屋だつたらしいが、今は来客もほとんどないためもうほとんど利用していない部屋である。その割に埃が見当たらないし、木目調の低いテーブルがぴかぴかなのはこよりがまめに掃除をしているからなのだろう。

俺たちはそのテーブルを挟んで座つていた。

彼女はまるで訓練されたかのように清らかな佇まいで正座。

彼女、というのは言つまでも無く巫女チックな姿をした黒髪ボーテの女性である。

対する俺はあぐらを搔いて少しその場に面づりをう。

俺が居づらそうにしている理由は一つ。

彼女の俺を見る眼だった。

彼女の視線は憧れ、感激、陶酔とまあおよそ俺が今まで受けた経

験の無い類の想いが伺い知れるほどの熱視線だからだ。

なんか変なことになってしまったなあ……。

「どうぞ、粗茶ですが」

「よりがお茶を客間へ運んできた。

「有難うござります、じよつとも。どうかお構いなく」

「い、じよつとも……」

「よりは俺と眼を見合わせると首を傾げてみせた。『誰?』といつたところだらうか。

俺は両の掌を天に向けて『ああ?』と返す。

「よりはそのまま興味深そうに彼女を見ながら部屋を退出していった。

ずっとお茶に口をつな、ようと熱い息を吐いて一息つく彼女。

一人つきになつた部屋でする事も無く、彼女を見ていると不意に眼があつた。

すると彼女は頬を赤らめ、視線を斜め下に反らすではないか。

「嫌です、悼矢さま。そんなに見つめないで下をいまし。恥ずかしいです……」

「反らしながらも上田遭にチラチラとばかり見てこる。

「あ、ああ。すまん……」

なんだか様付けで呼ばれる」とむず痒い気持ちを抱きながらも謝る。

「えーっと、それでうちは何の用で?」

これを切り口に話を促してみる。すると彼女は急にしゃんとした顔になつた。

「申し遅れました。私は和泉弥生と申します。悼矢さまの父君である同さまの命を受け、参上仕つた次第にいざります

なつ!?

なんつった、今!?

「親父の!? 親父は生きてるのか!?」

いきなりの展開に身を乗り出す。

そもそもその筈。グリフィオルオの言葉を信じるなら俺の親父は既に死んでいるはずなのだ。

しかし弥生さんはゆきへつと首を振つた。

「私は同さまがご存命かどうかは存じ上げません。

私が命を受けたのは十年以上も前の話ですか。その時、同さまは時期がくればすべてを棹矢さまにお話しようと……。

そして今こそ棹矢さまにすべてをお伝えする時機だと考え、遙々京の都から来たのです」

「くつと俺は生睡を飲んだ。

親父が自分に伝えようとすること。

おそれ、俺の体に關することだらう。

「話してくれ。親父は俺に何を伝えたかったのか

俺の真剣な眼差しを受けて弥生をくつと頷いた。

「こんな話をいきなりされて信じられない部分も多々あると想います。ですが今から話すことは真実です。

どうか心を強く持つてお聞きください」

「話してくれ。親父は何を伝えたかったのか」

俺の真剣な眼差しを受けて弥生さんはこくりと頷いた。

「こんな話をいきなりされて信じられない部分も多々あると思いました。ですが今から話すことは真実です。

どうか心を強く持つてお聞きください」

そう前説を置いて弥生さんは胸に手をあてると真剣な顔で言った。

「悼矢さま。実は私、人間ではないのです」

「…………」

「私はイデア界といつ異世界からきたエーテルと呼ばれる存在です」

「…………は、はあ……」

俺はぽりぽりと頬を搔いた。

あー、エーテルだつたんだ、この人。

それが俺の素直な感想である。

すると弥生さんは眼を閉じ、かぶりを振った。

「ええ、分かります。悼矢さまが困惑するのも当然です。いきなり異世界だのエーテルだのと言われてもお困りになることでしょう。ですがどうか受け入れてください。これは真実なのです、事実なのです、現実なのです」

どうやら弥生さんはひどい勘違いをしているらしい。俺はまだイデアのこと、エーテルという存在のことも知らないと思っているようだ。

「はあ。まあ、別に疑ってないですけど。親父が俺に伝えたかったことってそれだけ？」

そんな平然とした俺の様子に弥生さんは驚き、感嘆して俺を見つめてくる。

「そ、そうですが……。あ、いえ他にもエーテル・カードなるものやら、禍魂やら……！」

無論。そのどれもの知識を俺は持っている。

「…………。他には？」

「し、信じられません……！ も、さすが悼矢さま……！ 私のご主人様です……！ なんという理解力なのでしょうか……！」

詰まる所、俺にエーテルやイデアのことを教えるのは弥生さんの役目だつたつてことか？

弥生さんの話から鑑みると、親父は俺が時期がくれば非日常の世界を、この世の真実を伝えようと昔から決めていたらしい。その役目

を担つたのが彼女のようだ。

しかし俺は一ヶ月前リタからイデアだのなんだのとこいつ話は既に聞かされているわけで。

「あ、いや……俺、もつたのとこまでに知つて」

既に知つてこることを伝えようとしたその時。

弥生さんは何か訝しそうに眉をひそめる。

「あら？ 悼矢さま」

くんくん。

俺の匂いを嗅ぎ取るよつて鼻をひくひくさせる。すると弥生さんの表情が徐々に黒いものに変わっていく。

「…………。これは一体どうしたことなのでしょうか。悼矢さまから他のおなじの“匂い”がしますが……」

「ガ”ガ”ガ”ガ”ガ”ガ”」

弥生さんはから凄まじい臭のホール・エネルギーが立ち昇つている。

ふるふるふる。

そして俺は弥生さんの足にそえた白い手が震えているのを見逃していない。

『さうして俺は気づいていた。

『他のおなじの匂い』とはおそらくリタのことなのだな、と。

エーテルたちはエーテル・エネルギーに満ちた存在だ。そのため近くにいる者はエネルギーの残り火を受けることになる。リタと一つ屋根の下で暮らしている俺からリタの“匂い”がするのも当然の話であった。

それは人間には分からぬとさになものだ。が、エーテルである彼女は気づいたのだろう。

『さう説明しようかと俺が悩んでいたその時だった。

すぱーん！

軽快な音とともに密間のふすまが開く。

「トウヤー。お腹すいたー。なんか買つてきてー」

寝起きっぽいリタがそこには立っていた。

思わず俺は『げ』と呴いてしまつ。

なんとなく今、この状況でこの一人が出会いのはまずい気がしたのだ。

リタ＝ルクライル。何を隠そう俺が契約しているエーテルである。上質の金を溶かしたようなサラサラの長い髪に、気の強そうなところ

ろが分かる眉と田。黙つていれば美人なのだが、性格は残念なことに猪突猛進で俺に負けずとも劣らぬ頑固、自信家、おてんば、高飛車、じゃじゃ馬なのだつた。

今は白いタンクトップにホットパンツ、黒のニーソックスという部屋着まんまな姿をしている。こよりのを着てているせいかサイズが小さく、タンクトップはへそ出しに、ホットパンツのチャックは最後までしまらず白いショーツが見え、後ろは半分お尻が出ているような状態だ。リタとしては動きやすい服装を選んでいるつもりなのだろうが、俺にとつてはまるで男としての度量を試されているような格好でしかない。

そう。彼女こそがイノシシも田んぼむき出すぐらこの猪突つ娘なのである……！

そんなリタをまじまじと見つめる弥生さん。

そんな弥生さんをまじまじと見つめるリタ。

まるで本田のようにリタへ弥生さんへと、交互に視線をやりながらどう説明しようかとあたふたと慌てている俺。

決して自分は悪いことをしたわけではないはず。だといつのに襲い掛かってくるこの嫌な予感は何なんだ……！

「あれ？」この人、もしかしてエーテル……ですか？あれれ？」

弥生さんの頭上に『』マークが頻出しているのが見える。

そりゃそりゃだらう。弥生さんは俺がエーテルという存在など知らないはずだと思つてゐるのだから。

リタは弥生さんを指差して俺に問いかけた。

「…………誰？　エーテルみたいだけど」

「リ、リタ！　あとで何でも買つてきてくれるから今は回りに行つてろ！　なー？」

俺は慌ててリタを追い出そうと彼女の白い肩をぐいぐいと押す。

「気安く触らないでよ、変態。」

『ぱ』ー！

アッパーを入れられた。

なぜちよつと触ったぐらいで殴られたのだろう。俺、こいつの契約主のはずなのに……。

ああ、そうか。やっぱ弥生さんと契約するのが正規のルートだつたんだな……。

涙がちょろりとこぼれた。

「ど、どうしてホテルがこの家に？　あれ？　あれ？　あれれれ
？」

弥生さんはなんだかパニックになっていた。

「どうして……。私、トウヤと契約している」

そんな弥生さんに平然とのたまうコタ。

あ、地雷を踏んだ音が聞こえた。

顔色がどんどんと悪くなつてくるのが自分でも分かる。

「へ？」と間抜けな顔をしてくる弥生さん。

それはまるで言葉の意味が分かりません、とでも言つて居るよつ
だつた。

なので相手にひきやんと意味が伝わるよつて、リタがもつ一度言つ
直す。

「いや、だから……トウヤは私の主なのよ。なんか文句あんの？
？　つていうか、誰なのよ、アンタはー。トウヤに何の用ー？」

なんだか喧嘩腰になつてきてませんか、リタさんー？

お前の性格はよく理解しちゃーーー。が、正直、この状況でそつ

いう態度はやめてもらいたい。どんな時でも強気な相方を持つと辛いものである。

「ど、どういふことなのでしょうか？ 悼矢さまの最初のエーテルは私で…… そしていづれは私と悼矢さまは」によごによごによ……でも悼矢さまにはもうエーテルがいてあれ？ あれれれれれ？」

ふしゅーと弥生さんの頭から煙があがる。

「うむ、ひとつと落ち着いてくれ、弥生さん！」これは違うんだ！

「ち、違つて？」違つて何が違つて、アヤー。

ぱちーん！

頬を引つ 叩かれた。

「このエーテルは一体何なのよ！？ 私が寝てる間になに連れ込んでるのよ！ ことと次第によつちや私も手が出るわよ！？」

「お約束のように手が出してから言つた、このバカ！ つか、おまえ黙つてろ！ 話がややこしくなるだろーが！」

「どういうことなのですか、悼矢さま！」のエーテルは何なので
すか！？ 「これでは話が違います！」

「話!? ちよつヒトウヤ! あんた、このH-テルとビビリこの話になつてたのよー。詳しく聞かせてもらおうじゃないのー。」

リタの手に光が収束してバカでかい大剣が姿を現す。

アルデヴァイン伯爵！」登場お！？

流石にそれでツツコミへれられたらAEで肉体強化しても死ぬぞ。

「まてまて！ アルデヴァインしまえ！ つーか、おまえ、そりゃ勘違いだつての！」

「ガーン！ 勘違い……そ、そんな……私は悼矢さまのエーテルになるために今まで鍛錬を積んできたというのに……！ 悼矢さまと言葉を交わしたい、でも許されていないという針の筵の中に幼い頃からいたというのに……！」

「悼矢さま、あんまりです！ ひどいです！ 恨めしいです！」

眼に涙をためて、両の拳でだだつこのように俺の胸をぽかぽか叩いてくる弥生さん。

「お、幼い頃からあ！？ あんた、子供の頃から既に手を出してたつて言うの！？ ここのシスコン！ 色情魔！ 変態！ シスコン！」

「二回もシスコンって言つたな、コラア！ つていうかお前もう黙れ！ つて、いてて！ こら弥生さん、爪をたてないで！」

あーだ、こーだ。

どたつばたつ！

「な、何してるの、みんな……」

騒ぎをあわつかれてやつてしまつた「よつは遠巻かじめやー、めやー」と騒ぐ三人を見つめていた。

部屋の縁側にいるしらたまは三人の様子を見ると、青空へと視線を流しあぐびをした。

「ふなあーお」

今日も片桐家は平和だった。

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

客間を沈黙が包んでいた。

沈黙の空気だけならまだ俺も心持が穏やかでいられただろう。しかし残念なことにその場の空気は最悪だと言わざるを得なかつた。

壮絶な掴み合い、醜い罵り合いの果てに落ち着きを取り戻した俺たちはそれぞれ座布団の上に座つっていたのであつた。

落ち着いた俺たちがまず行つたのは互いの状況説明だつた。

俺は一ヶ月ほど前にリタと出会い、H-ホテルや禍魂について知つたことを弥生さんに話した。

「…………ルクライル…………。貴女はルクライル家の方なのですか…………」

弥生さんが少し戸惑つように言葉を発した。

「なによ」と睨むリタ。

「…………あ、いえ…………」

「ホン、と咳払いをすると弥生ちゃんは話し始めた。

「私は幼い頃から京都のとある社に住んでおりました。そこには他にもエーテルたちが住んでおり、私たちは切磋琢磨しあいながら日々を過ごしていました。

そこへある日、悼矢さまのお父様が本殿にいらっしゃったのです。お父様はとても気の良い方でした。本殿から出たことのない私はよく司さまからお話をしてもらつたのです。その時に、司さまは悼矢ちゃんといつ可愛い息子がいることを私に話してくださいました」

すつと着物の袖から古ぼけた写真を机にだす弥生さん。何年も前のものらしく、淵がかなり変色してしまっている。

その写真を手にとると、そこには砂場で遊ぶ幼い俺の姿だった。

「司さまの話を聞いているうちに私は悼矢さまに興味を抱くようになりました。そんな私の心中を察して下さったのでしょうか。司さまは私に精進し、その時がくればすべてを話すよつにと大事な役目を貰えて下さりました。

そして私は悼矢さまのホテルになるために鍛錬を積んで参りました。それは悼矢さまのためとはいえ苦しき日々でした。しかしそれもこれもすべては悼矢さまのため。この身を不幸だと思つたことは一度もありません」

しゃんとした佇まいとすつ宣誓する弥生さん。

「もうこいつですリタさん。悼矢さまを返してください。私はい

わば契約の許婚なのです

少し睨むように弥生さんは俺の隣に座つて いるリタを見た。

「却下よ。トウヤは私のものだもの」

しかしリタは弥生さんの願いを一蹴し、机の上の茶菓子を手に取つた。そしてそ知らぬ顔でぱくつつく。

そんなリタの素つ氣無い態度に弥生さんはぱんつとテーブルを叩いた。

その大きな音にびくり、と俺の肩が震える。

もなかを口に含んでいたリタはビクビクと胸を叩いて「くくく」と嚥下する。

「そんな言い分が通るとお思いですか！？ 人の『主人様を奪つておいて！』の泥棒猫つ！」

泥棒猫で……。毎メロドラマでももはや使われてない単語なんじやないか……。

弥生さんの発言に対してもリタは見せつけるように俺の右腕に両腕を絡めてくる。

「何言つてんのよー 早い者勝ちでしょー ベーだー」と舌をだすリタ。

ガキか、お前はー？ つていつか腕に胸あたつてますつてリタさん！

“ないちち”でも男にとつて魅惑的な部分であるには違ひなかつた。

「くつ……！ あと一ヶ月早く……！ 私が電車の乗り方さえ分かつていれば……！」

悔しそうに肩を震わせる弥生さん。

って、あんた京都から歩いてきたんかい！

京都から関東の片田舎にあるこの街まで果たして何キロあることやら。よく途中で諦めなかつたものだ。その不屈の精神は評価したい。

「リタさん！ エーテルにとつて契約は生涯の伴侶を決めるような神聖なもの！ 貴女に悼矢さまと添い遂げる覚悟はあるのですか！？」

たいがいのエーテルは契約者と生死を共にするらしい。たいがい、と言うのはエーテル使いつまり契約主であるマスターが死亡すれば自然契約は解除されるのだが、エーテルよりも先にマスターが契約主が死ぬというのは稀なケースか、最初からそういう目論見であつたケースのようだ。ともかく、ほとんどの場合は死ぬ時は一緒らしく、それ故にエーテルにとつて契約を決めるることは生涯を共にすることと同意義なのだとか。

エーテルにとつて契約がそれほど大きな人生の機転らしいことはリタに出会つた時に聞いてはいたが……。

「当たり前よ！ 馬鹿にしないでくれる！？」

紋章が反応したといふのももちろんあるけれど、私がトウヤを気に入つたから契約したのよ！」

「紋章なら私だつて……！」

いきなり弥生さんが立ち上がると着物から肩をはだけさせ、上半身を外気に晒す。

白い肌が、胸に巻いたサラシが顕になり、俺は思わず両手で視界を隠した。

「ちよつと、弥生さん！？」

だんつと勢いよく白い足袋の足をテーブルの上に乗せる。そして遠山の金さんのように左脇腹を見せた。

「御覧なさい！ 悼矢さまに会つて私の紋章は反応し続けています！」

瞬間。俺の目を緑色の光が覆つた。

そこにはその存在を主張するように爛々と輝く紋章。四葉のクローバーのように葉っぱが四枚、先が四方を指した紋様。どうやらそれが弥生さんの紋章であるようだ。

エーテルにはそれぞれ個々に独特的の紋様が存在する。例えばリタの場合は右肩にある赤い紋様。それはエーテルである証であり、ご主人様探知機のような役割でもあるのだとリタが言つていたが。

「それに私は……！ わ、私は悼矢さまを愛しています！」

両の拳を胸の前で握り、眼をぎゅっとつむり、顔を真っ赤にしながら叫ぶ弥生さん。

「悼矢さまが望むなら夜伽もこなせます！」

『ぶふわ~わ~わ~』

俺とリタは思わず吹き出してしまっていた。

いきなり何言っちゃってんの、この人おおー？

エーテルとの契約といつことが激しく誤解されそうな発言だった。

対抗心に火が点いたのか、やめときゃーーいのにリタも負けじと言いい返す。

「わ、私だって……そ、それくらいなら……！」

「う、嘘をつかないで下さい！ 貴女と悼矢さまの態度を見る限りそのような関係でないのは分かりますー！」

「う、嘘じゃないわよー！」

やつは「や否や、いきなりリタが俺の肩をがしづと掴んだ。

そして、じつと俺の顔を見つめてくる。

「おーおー、リタ……！ 落ち着けって！ お前が負けず嫌いのは分かってるが、それは違うっていうか……！」

つていうか、本来ビキニのシーン展開のはずだのに、いつのつて！ なのになんかすぐえ嫌だ！ つていうか普通に怖えツ！

「るるーー！ あんたは黙つてなさいー！」

顔を真っ赤にして額にびっしりと脂汗が浮かんでいるリタ。

その顔が、体が、俺を押し倒すように体重を預けるように徐々に近づいてくる。思わず畳の上に手をついて押し倒されるのまがされた。

わらわ、トリタの金髪の髪が鼻をくすぐついたばゆー。

弥生さんはそんな俺たちを見て恥ずかしそうに眼を手で覆ついた。ぱっちり指の隙間から見ているが。

「お、おーーーーー、リタ……！」

「トヲタ……」

リタが俺の顔に顔を近づける。

ふつくらとした荒れ一つない瑞々しい唇が眼に入る。

触れ合つていう瞬間。

ガツン！

俺は額に頭突きをされていた。

しゅ～～と額から白い煙が出て、俺はじたばたと畳の上を転げ回った。

なんとなく期待しちゃつた俺が馬鹿だつた！ 分かつてたのに！ こうなるつて分かつてたのにい！

「ト、トウヤは……不能だから別にいいのよ。」

「勝手な設定を付け足すなよ！」

「そ、それみたことかです！ 強がつてもダメですよ！」

それにリタさん、貴女のその胸では棹矢さまを満足させる」ことはできないでしょう！」

ピシャーン！

リタが雷に打たれたような表情になり、ぱっと両腕で隠すように胸を抱いた。

「や、弥生さん！ それはリタにとってタブーなんですね……！」

リタ！ 頼むから喧嘩沙汰には……！」

俺はリタがぶち切れてないかと慌てて振り返ると、彼女は部屋の隅っこで背を向け三角座りしていた。

チーン。

意氣消沈とはまさにこのことを意味のだろう。リタの周りだけどんよりと暗黒の空氣が渦巻き、じめっとした雰囲氣が漂っている。

そのまま放つておいたら、あそこだけカビが生えそうだ。

「このままでは埒があきませんね。仕方ありません……」

弥生さんがくるつと勇ましい顔で振り返る。やしてとんでもないことを言いだした。

「……リタさん、わたくしと尋常に勝負ですー。」

ズビシイとリタを指差す弥生さん。

瞬間。ぴくぴくとリタの耳が動いた。

「ふーん、多少なりとも腕に自信があるようだね……」

すっと背後を向いたまま立ち上がるリタ。

その体を赤い光が包んだと思つと、ぱっと振り返る。

「虎穴を掘つたわね！」

振り返つたりタはいつもの戦闘服になつていた。

墓穴だ、馬鹿。なんだそれ、どういう状況なんだよ。混ざつてゐる
じゃないか。

真つ赤なドレスに左腕、両足を覆う部分的な甲冑という見慣れた格
好になるリタ。それこそが彼女の戦闘服なのだ。

それは決して無から有を生み出したわけではない。AE（厳密には
エーテライズ・エネルギー^{エナジー}）を利用した物質化（エーテル化）である。俺も詳しく理解
しているわけではないがASEというのは使用者の状況、求めるも
のに応じて性能・在り方を変えるものらしい。時には今のように物
質に、時には肉体に作用し強化を促すエネルギーに、その使い方は
多岐に渡る。エーテルたちはこういったASEの特殊な性質を用い
て「」の武器や服を生成しているようだ。

「おこおこおいおいおこおいおいおい……」一人とも落ち着けよ…

今すぐにでも弥生さんに飛び掛かりそうなリタ。そんなリタにい
つでも反応できるように身構えている弥生さん。

幾らなんでもこんな所で戦わせるわけにはいかず、俺はすぐさま
二人の間へ割つて入つて両手を左右に広げた。だが、

「トウヤは黙つて…」

「悼矢さまは黙つていてくださいまし…」

二人に凄まれて二の句が継げなくなつてしまつ。

エーテルが持つ生命エネルギーって凄いよな。

結局。窓から空を見上げて現実逃避することにした。

さわさわ……。

静かに風が吹いて桜の木が揺れる。

片桐家の庭はそれなりに風情の感じられる景色で春には桜を覗きにご近所の方が訪れたりすることもあつたり、なかつたり。

かくいう俺も春休みに入つた頃、美姫先輩とこよりの三人で花見を行つたのだが。

あの平和だつた風景が今ではどこ吹く風。

庭の中央で対峙している二人のエーテル。

その二人が発する戦闘前の緊張感で庭はしんと静まり返つっていた。

そんな二人を縁側で眺めているのは俺+日向ぼっこ中のしらたま。

そこへ八神が二階から降りてきた。

「おう、八神。一人で調べさせて悪かつたな」

「いや、構わないさ。興味深い本が何冊かあつてな。持つて帰つてもいいか」

「ああ、構わねえぞ。こよりも読まないだろ？ しな」

俺が読まないのはわざわざ言つまでもないことだろ？。

「そりゃ。で、客人が来たのではなかつたのか」

「それが、ちょっと厄介なことになつてな」と俺は中庭の一人に視線を戻した。

ハ神も俺の視線を追つて、彼女たちに氣づく。

「……何の騒ぎだ、これは」

「なんとかしてくれ。俺じゃ手をつけられない」

お手上げとばかりに俺は両の手を天に向ける。

「H-テル同士で決闘か？ 相手はどう？」のH-テルだ

ハ神の顔が少し興味深そうに変化する。

「俺のH-テルらしいんだよ、これが

「お前のH-テル？」

と眉をひそめて俺を見てくる。

「ああ。かくかくしかじかで」

俺が事のあらましを話すとハ神はやれやれとばかりに重い息を吐いた。

「お前は本当に厄介な事に巻き込まれるのが好きだな。トラブルを呼び込むのも特異体質のせいじゃないのか」

「好きで巻き込まれてるわけじゃねーつーのー！」

と、その時だ。ふとリビングからよりの声が聞こえてきた。

「ハ神わーん。クッキー焼いたんですけど食べますか～？」

「ああ。食べる」とハ神はリビングの方に歩いていった。

俺としてはできればこの状況を止めて欲しかったのだが、残念なことにハ神の興味はクッキーの方に傾いたようだ。

残るしらたまはこいつの『クッキー』とこいつ葉っぱくつと耳を動かしたもの、相変わらず眠そうな眼で縁側に伏せリタと弥生さんを眺めている。

彼女はどうやらクッキーより、こちらの方に興味をお持ちのようだ。

俺はしらたまを抱き上げると、あぐらを描いた足の上に乗せて背を撫でてやつた。

気持ちはこのかゆいからと由て尻尾が揺れる。

「なあ、じらたま。お前ならあの一人を止める」とぐらりと朝飯前だよな……」

「なーあ」と返してくれるしらたま。

「後でプリンやるから止めてくれよ。好きなんだろ、プリン」

「うなー？」と首を捻つて俺を見上げるしらたま。

どうやら今は猫を貰くつもりらしい。紛う事なき猫かぶりをしていぬしらたまから中庭の一人へと視線を移す。

俺もこじまできたらびつかり合わないと止まらないだらつとは思うが……。

「勝つたほうが悼矢さまの真のエーテル。私が勝つた場合、悼矢さまとの契約を解約して貰います。それでいいですね？」

凛とした佇まいにリタを見据える弥生さんはそう確認する。

「もううんよ。いつでもしないとあなたは納得できないでしょ。私が勝つたら本殿とやらに大人しく帰つて貰つわよ」

対するリタは腰に片手をあて余裕そう。

「後で泣きついてきても知りませんよ」

弥生さんの瞳の中に闘争心の炎が点り始める。

「言つてなさい。泣きつかなきやいけないのがどっちかすぐに分かるわ」と涼しげに受け答えするリタ。

睨み合つ一人。

すつと静かにリタがボクシングスタイルで拳を構えた。

弥生さんは深く呼吸を吐くと、拳を作らざるやかな構えをとる。

ざあああ……。

再び風が吹く。

その風が吹き終わったその瞬間。

一人が動いた！

風が吹き終わったその瞬間。

二人が動いた！

地面を蹴り、互いの間合いが高速で詰まる！

相変わらずだがエーテルの身体能力は凄まじい。相手が人間なら一呼吸する間に間合いを詰められ、一撃で気絶させられているだろう。

先に手をだしたのはリタだった。

フックとは思えない強烈な左フックが唸りをあげて弥生さんへと放たれる。

速いな。腐つても鯛か。最近ダレていたとはいえ、こと戦闘に関してリタは天性の才能を持つている。

リタにとって戦闘こそが本業。掃除、洗濯、料理ができなくとも彼女がまったく気にせず、この家で大きな顔ができる理由。

それは己に絶対の自信を持っているからだ。八神に鍛錬をつけてもらった時にも話が出たが、この自信というものがかなり重要らしい。

リタの左フックに反応して弥生さんは左に体を傾けて避けようとする。しかし

「甘いわよっー！」

「ぶうおんつ！」

「風を切る音！」

「！？」

左フックが引っ込み、その反動を利用するように右拳が放たれていた。

左はフェイントか！ 入る！

持ち前の当て勘で弥生さんが左に回避することを読んでいたのか、リタの右拳が弥生の顔面に迫る！

だが！

「甘いのは…………！」

弥生さんはリタの右拳の手首辺りを右手でいなす！

「貴女です！」

すると勢いにのつていたリタの体が弥生さんに引き込まれるにつに、前に傾き体勢が崩される。

「つー？」

弥生さんは出した右手の運動エネルギーに反発せず、円を描くようにその場で体を一回転させて左肘でリタの左頬を打つた！

「ハ！」

「さあああ、リタが後方に弾き飛ばされる。庭にリタが踏みとどまつた一本の線ができた。

あんまり地面を掘り返さないで欲しいなあ……。

弥生さんは腕の褶をふわりと翻しながら体をくねくね回転をせり、ゆっくりと回転を止める。

辺りに散らばっていた葉っぱが弥生さんの周りをひらひらと舞う。まるで水が流れるような自然な動き。

その洗練された様に思わず「ぐぐ」と唾を飲んでしまつ。

柔術？いや合氣道か、あれは……。

見ると彼女の足元に草鞋で描かれた円ができていた。その円はまるでコンパスで描かれたかのような真円。それは彼女がどれだけ修練を積んだかを物語つていた。

「あのエーテル。強いぞ」

隣からいきなりそんなぽつりと呟く声が聞こえた。

いつの間にかハ神が戻ってきて「ひとびとくつてしまつ。

ハ神は縁側に立つたままぽりぽりとクッキーを齧り、観戦モードだ。

じらつたまも先ほどまでの眠むつた眼ではなく、俺の足の上で眼を細めて弥生さんを見ている。

そんな彼女らの様子を受けて俺はリタへと視線をやつた。

負けたりしないだろ？ あの馬鹿。

リタはべつと血を吐いて手の甲で口元をぬぐつた。ビリビリの口を切つたらしい。

「フン。柔よく剛を制すつやつ？」

「ええ。貴女のような野蛮な方にはない発想でじょ？

にこりと微笑む弥生さん。

誰が見ても分かる明らかな挑発だつた。

ひきつー。

リタの額に怒りマークが浮き上がる。

「こりこり爛に触ることを……ー

あーあ。怒つてゐる、怒つてゐる。これじゃあ弥生さんのペースに巻き込まれちまうぞ……。

再び拳をリタが構える。

だが、どうしたことかすぐに攻めはしない。じりじりと間合いを詰めながら相手の出方を伺う。

「冷静だな。あの一合で相手のスタイルを見抜いた」

八神に言われてから気づいた。

リタは弥生さんの戦闘スタイルが待ち型だということを既に見抜いたようだ。そもそも合気道はその体捌きによって自分よりも力が強く大きな相手に対し最も有効な格闘術で、自ら攻めることよりも、相手の出方に技を返すことが最も合理的とされている。

だからこそリタは少しづつ距離を詰めることで、どの辺りから弥生さんの間合いなのか計ろうとしているらしい。

流石……といったところか……。戦闘慣れしているだけはあるな

……。

「分かっているな、片桐。これはいいシユミレーションだぞ。エーテル使いにおいて何が重要なのか。お前に何ができるのか、よく考えながら見ておけ」

ぐつと俺の拳に力がこもる。

「ああ」とだけ俺は答えた。

なぜだろうか。俺は彼女たちの戦いを見てわくわくしていた。

まるで体が戦闘を望んでいるかのような感覚。思わず笑みがこぼれる。

確かめたいんだな……俺は……。どれだけ成長したのか……。

「良い判断です。伊達や醉狂で掉矢さまのホテルになつたわけではないようですね」

いや、伊達や醉狂で契約したようなもんだったけど……。

俺は心中でツツツツを入れていた。

「ですがまだまだ読みきれていません!」

刹那、弥生さんが地面を蹴つた。

『！？』

それにリタだけではなく、俺やハ神も驚く。

自らリタへ間合いを詰めた……！？

Dance1 “集うHーーテル使い” 其の15・1

待ち型の筈の弥生さんから接近したことに俺たちは驚く。

中空でぐるりと横に一回転し、姿勢を低くして右足で蹴りを繰りだし足払いをかける。

俺たちと同じようになりタも弥生さんがまさか自ら攻めてくるとは思つていなかつたようだが、後ろに軽くステップして足払いをやり過ぎすことに成功する。

しかし、そこへ弥生さんは更に体を一回転させて立ち上がりながら左手の甲でリタの頬を狙つていた！

「バックハンドブロー！？」

リタは足払いを避けたことでまだ地に足がついていない……！

「追い打ちだ……！ 逃げ切れんぞ……！」

チツ、とリタが舌打ちをする音が聞こえた。

リタは迫り来る手の甲を左腕でガードする！

ばしいっ！

二人のAEがぶつかり合い、接触面から光が弾けた。

よく今の奇襲に反応できたものだと俺は感心した。

だが ！

弥生さんの回転はまだ止まっていない！

ぐるんっ！

左の手の甲を振り抜くと、更に勢いを増して真下から右の掌底をリタのあごに向けて繰りだす！

ずがあんっ！

「あぐっー。」

流石にそれに反応する」とせできすコタの体が上空に吹っ飛んだ！

「足払い、裏拳、掌底の三連コンボか。無駄のない動きだな」と八神。

リタの体は宙を泳いでいく。クリーンヒットしたせいで脳が激しく揺れているはずだ。

あのままじゃ追撃にあつだ……！

事実、弥生さんがリタの落下地点を予測して距離を詰める！

だが俺の心配をよそに、リタはまるで何事もなかつたように上空でくるっと後転して体勢を立て直し地面に着地した。

うーむ……。リタの奴……馬鹿みたいな打たれ強さだ……。

リタを追つて間合いを詰めていた弥生さんが意外に早く彼女が体勢を立て直したことに驚き、ブレーキをかける。

だがつけた勢いは殺しきれない。

追撃をかけてきていた弥生さんにリタがカウンター気味に右ストレートを放つ。

「ふつー！」

ぎゅるおん！

リタの右腕を風が巻き込むように唸る！

「くつー！」

リタの右拳を左腕でいなそうとした弥生さんだったが剛力をいなし切れず弾くことに留まる。

ぱあんっ、と快音が響いて閃光が眼を瞬かせた。

やうに追撃をかけるべくリタが左拳を放つ！

轟ツー！

リタの一撃は重い。一発でも受けてしまえばその衝撃で行動が止まり、ラッシュと巻き込まれてしまう。

相手にガードされたって構わない。とにかく押せ押せで自分のペ

ースへと持っていく。

それがリタの強み！

一度勢いがつくとも止められない。あいつの性格がよく分かる戦い方だ。

しかし、その一撃田を弥生さんはリタの左手首を左手で掴み、舞うように回転してリタの背後に回る。そして掴んだリタの左肘に右の掌を当てた。その回転によつてリタの腕がねじれ、自然とリタの体が前かがみになる。

「一教……！ 合氣道技だ！ まずはいざ、リタ！」

俺は思わず口に出していた。

（）のままではリタは地面に組み伏せられてしまつ。そうなつてしまつてはまず次の一撃は避けられないだらつ。

だが俺の心配をよそに、危険を感じ取つたリタは地面に叩きつけられる前に自ら大地を踏みしめていた足を離して前転、腕のねじれを直すではないか……！ そのおかげでまた弥生さんと対峙する格好になる……

「！？」

これには弥生さんの顔に驚愕の色が広がる。

「なんて馬鹿げた身体能力だ……」

八神も感心した様子。

やはりリタの一度ついた勢いは止まらない。

左手首を掴まれていることなど関係なく、左拳を振りかぶる。リタの左手首を掴んでいた弥生さんの体がそのままリタに引きよせられる。そして左手首を掴まれたままリタは弥生さんの顔面に左ストレートを放つた！

慌てて右腕でガードを上げる弥生さん。

ずがん！

しかしリタの左ストレートは弥生さんのガードを弾き飛ばしておでこに直撃していた！

弥生さんは吹き飛ばされながらも体を自ら横に回転させて少しでも衝撃を減らす。

そして回転が止まると同時に再び構えに戻っている。

はりはりと、弥生さんの周りで木の葉が地面に落ちる。

再び問合いが開いて睨み合つ。

まだ互いに相手の実力を計っているのか一人は目まぐるしく思考しているようだった。

Dance1 “集うHーーテル使い” 其の15・2

私は相手の想像以上の力量に驚いていた。

戦闘に関しては私も自信がある。

それは悼矢さまの足手まといにならないよう鍛錬してきた努力への絶対的自信。

……なんて怪力……。止めようと思つても止められないなんて……。あれは力任せに振るつていいだけの拳ではありますね。インパクト時に最良の状態の拳を当てるといふみたいです。恐ろしいのはそれを自然体で把握していること……。

生まれ持つた戦いの才能。

その才能に私は嫉妬さえ感じてしまう。

それに加えてあの度胸と大胆さは……。

流石はイデア界で勇猛に名高きルクライル家……。まさか人間を敵視、毛嫌いしている名家の彼女が悼矢さまと契約しているなんて……！

……強敵、ですね……。

弥生とかいつたつけ、こいつ……。

半端な攻撃じや通用しない。いなされて反撃に繋げられるのがオチね……。

かなり練られた型があるみたい……。

厄介、だわ。マーカー化されていると言つてもいいこの戦い方。特に相手の攻撃に合わせて手管を変えるのは並外れた思考力と反射神経がなければ意味がない。この事からも弥生が分析思考型の戦闘タイプだということが分かる。戦いの場の雰囲気を感じ取り、直感・閃きで判断する私とは真逆の位置にある戦い方ね……。

マーカーの弱点は予期せぬ事態だけど……。弥生の場合、かなり細部まで作り込まれているような感覚を受けるわ。

完璧に練られた隙の無い戦いのマーカー。

……まるで難攻不落の城じやない……。

私はどんな攻撃を仕掛けても返されるような……そんな感覚を相手に覚えていた。

こんなに攻めあぐねる相手は久しぶりだわ……。

じりじりと双方の間合いが詰まる。

「しかし！ 負けるわけにはいきません！」

「だからって負けるわけにはいかないのよ！」

同時に地面を蹴り一人の間合いが零になる！

カアカア……。

日も暮れ始めた夕方。

俺は縁側に座つて呆ながら一人を見ていた。

「はあはあ……」

「ハアハア……」

満身創痍、疲労困憊になりながらもリタと弥生さんは対峙し続けていた。

双方あちこち傷ついて肩で息をしている。

要するに決着がついていないのだった。

本当に力が拮抗する者同士だと決着が付かないらしいが……。

お前らは決着が着かず千日戦い続けるとこう黄金聖闘士か？ 最後は一人して消滅するのか？

しらたまは決着がつくのを待てなかつたのかとつぶやびしかへふらりと行つてしまつた。

それともどちらが勝つか終局まで読みきつたのか。

「なあ……もう暗くなるしきりで終わらこしないか

と提案してみるが、

「あんた、なかなかやるじやない」

「貴女じや。正直じまでもやれると想つていませんでしたよ」

「聞いたやいねーや。

一人は構えたままふつふつふと不気味に笑いあつてゐる。

なんだか川原で殴り合つたライバル同士が意気投合したような雰囲気だ。」のまま終わってくれればいいのに……。

「セツなちゃん！ タジ飯できたよー！ 食べていくよー！？」

不意にリビングから「よりの声が飛んでくる。

「ああ。すまないな、こより。有難く呼ばれよー」と食卓に向かう八神。

こよりと八神の奴は妙に仲良くなつてゐるし……。

「うむ。これは實に美味しいな。こよりは料理が得意なんだな」

「えへへー。おいしいだけじゃなくて健康にもいいんだよー。それ玄米使つてゐんだからー」

おい八神、そのポジションは俺の特等席だぞ。

ん？ つーか、あれ？ 僕の「」飯は？

あつちはあつちで団欒していく、こつちはつちで殺伐と睨み合つてゐる。

そんな相容れない状況に挟まれている俺は深いため息をついた。

そこでポンと優しく肩に手を置かれる。

誰かと思つて振り返るとそこにはライオンの姿をしたエーテル、レオがいた。

レオは八神が契約しているエーテルだ。ふさふさのタテガミが夕日にあたり金色に輝いて見える。

じゅやら八神の帰りが遅いので探しにきたらしい。

『まあ、元気だせ』とばかりに哀れみの眼をして俺の肩に手をのせているライオン。

俺は余計に哀しくなってしまった。

「ひななつたら互に最高の技で決着をつけるしかなことひね」

「そのようですね」

と、そこでついにリタと弥生さんが動きを見せる。

「はあああああああああッ！」

気合一発。リタから大量のエーテル・エネルギーが溢れ出し、彼女の体を赤い光が包み込む！

そして眩い光がリタの右手に収束していきバカでかい大剣を象つていく。

アルデヴァイン。リタの愛剣でその大きさは眼を見張るほどデカい。二メートルはあるだろう長さにして横幅は四センチほどだろうか。どちらにせよその重量・デカさからして人間には決して扱えることができないような大剣。全般的に装飾されていて、中央には崩れつながった何語か分からぬ文字が彫られている。

「ハルチ・ウムチ・ツヅチ！ おいでまし、心翼！」

弥生さんがぱつぱつと両手で印を結ぶと体からエーテル・エネルギーが噴き出し、緑色の光が彼女を覆う！

そして眩い光が弥生さんの右手に収束していき鋭い大薙刀を象つていく。

それこそが彼女の武器らしい。エーテル化させた長さ二メートル後半はあらうかという大薙刀を頭上でくるくると回転させると、弥生さんは右脇に柄を挟む。それは薙刀術の構えというよりも棒術の構えに近い。おそらく彼女が自分で考案した構えなのだろう。

「つて分析してる場合じゃねえ！？」

お前らストップストップ！ 縛らなんでもこんなところではまずいって！」

思わず立ち上がる。

だが俺の言葉など聞く気もなく一人のエネルギー量は膨れあがつていいく！

「オオオオオオオオオオ……！」

二人のエネルギーが中心でぶつかり合つて暴風を生み出す！

「つてバーサク状態ですか、お二人さん！？」

「どなたかデイスペル！ デイスペルを唱えられる方は当機におられますか！？」

「いっくわよ！」これが私の最強の一撃！

リタが上空に跳んだ！ いや、跳ぶな！ 近所の人見られたらどうするんだ！

高い……！

片桐家の屋根を越えている。

思わず俺は目線で追いかけて夕焼けを見上げるつに頭を後ろにする。

リタがアルデヴァインをぐおんつと振り上げた！

それに對して弥生さんは薙刀の切つ先を上に
そしてすううと息を深く吸い込む！

「アルデ！」

リタの体が弥生さんに向かつて自然落下するのに合わせて大剣を振り下ろした！

「ブレイバアアアアアアア――ツ――！」

瞬間
！

弥生さんが薙刀の柄、石突と呼ばれる部分を地面にどすつと刺す！

護翼・心想結界ツ！

刹那ツ！

ざれぬゆう！

薙刀の左右から緑の光で象られた巨大な羽根がばさりと伸びる！

その羽はまるで親鳥が子を守るかのように、弥生さんを包み込む！

そこへアルデヴァインがぶつかる！

ギヤゴオオオオオオオオオオオオオン！

火花と緑の閃光が弾ける！

「……つ！？ 堅いッ……！」

リタの眉が苦しそうに曲がる。途端、緑の羽がその翼を広げた！

それにリタの愛剣が弾き返される！

超重量級の大剣が弾かれ、リタの体が靡く。

まずい……！ 腹ががら空きだ……！

そこへ

「続けて」

舞い散る緑の羽根の中で弥生さんは薙刀を逆手にして両手で持っていた。そして後ろに振りかぶり、思いつきりすくい上げる！

薙刀の半分以上が地中に埋まり、しなりながらぼこぼこと地中を進む！

つて、地面！？ 庭がああああああ！

そして薙刀の切つ先が地中から顔を出した瞬間！

割れた地面から光が溢れた！

撃翼・逆三日月ツ！

ドゴオオオオオオオオオオオオオオン！

まるで火山が噴火でもしたかのように地中から放出された緑色の奔流と共に薙刀の一閃がリタを襲う！

金属同士がぶつかりあう音。

そして地中から溢れ出ていた光の波動が收まり、同時にリタが地面に着地した。

波動に焼かれたのか、しゅううづう、トリタの体から白い煙が上
がっている。

弥生さんは逆手で振りぬいていた薙刀をぐるりと回転させて順手に持ち替え、リタに切つ先を向ける。

「私の逆三日月を咄嗟に剣で防いだのは素晴らしい反応でした。

しかし、勝負ありましたね」

弥生さんの言葉の通り、リタの手にアルテヴァインはなかつた。
おそらく先ほどの一撃を防いだ時に弾き飛ばされてしまつたのだろう。
う。

俺はとりあえず一人に大きな怪我がなく終わつたことに少しほつとする。

その代償として庭があまりにも悲惨な状態になつてゐるが……。

あーあ、どうすんだよ。その亀裂……。

と、その時だつた。

ପ୍ରକାଶନ କରିବାରେ

と風を斬る音がして、上空に弾き飛ばされていたらしいあの馬鹿でかいアルテヴァインが片桐家の屋根を突き破つて家の中に突っ込んだ。

がしゃああああああーーん！

俺は真っ青になつて叫ぶ。

修繕費いくら！？ 俺のお小遣い何年分！？ いや、それよりも
じよりにSATUGAIされる……！

リタは呆然と自分の右手を見ていた。

「そ、そんな……アルデ・ブレイバーが……」

完封。 そう言われても仕方がない。 リタが絶対の自信を持つている必殺技が弥生さんには通用しなかった。

これには流石のリタもショックを隠しきれない様子だ。

俺は中庭に降りてリタの傍まで歩いていく。

地面に女の子座りでへたり込んだまま、眼に涙を溜めて俺を見上げるリタ。

「うう……トウヤあ……。…………負けちゃった……。
私……負けちゃった……」

まったく、負けるとすぐ泣くな……。 悔しいのは分かるが……。

もしかしたら唯一、得意分野である戦闘で活躍できないとなると
自分の存在価値が危ぶまれ、不安になつてしまふかも知れない。

「リタ……」

家をこんなにしやがって説教の一つでもしてやる」と思った俺ではあつたが、半べそかいて凹んでいるリタを見、どう声をかけていいか分からなくなつてしまつ。

「それでは約束通り。悼矢さまは私のものですね。契約を解約して頂きます」

するとリタはぱつと泣くのをやめ、眼を拭いてけりと言い放つ。

「ヤだ」

「なつ！？ 貴女、約束を忘れたとは言わせませんよー。」

「ヤだ」と能面なまま繰り返す。

「何をわがままな

「ヤだ」

リタがいきなり俺の腰にがしりと抱きつき顔を腹に押しつけてきた。

「……ヤだ」

そう呟くリタの顔は見えない。

やれやれ、と俺は後頭部を搔く。

まるで駄々っ子だ……。

リタがここまで俺と離れるのを嫌がるとは、正直思つてもいなかつた。この一ヶ月、共に命を賭けて戦い、一つ屋根の下で暮りしていたわけだから、俺も多少なりリタに情を感じている。

流石にこれでお別れとこるのは俺も……ん?

ふと腹に違和感、いや、痛みを覚える。キツく抱きしめてくれるってこうか、これはキツすぎやしないか……?

ギチギチギチ……!

「あの……リタさん……。すんばえ苦しこんですナビ……離してくださいませんか?」

リタが本気で俺にしがみついてるので、ちよつて腹が締まつているのだ。

「やだ」

それも抱くなー?

「いや、マジで離せない……! 折れる……。骨折れると……。ぎやああああー!」

ギチギチギチギチ! ピキッ!

鳴つてはならない音がした。

「と、悼矢さま！？」

口から泡を吹き始めた俺を見て弥生さんが口元を手で覆い顔面蒼白になる。

俺がぱたりと地面に倒れると、リタはすぐりと立ち上がりて『うーん』と伸びをした。

「あー、スッキリした」

『い、ご主人様で負けたストレス解消とは……。心配した俺が馬鹿だつた……。』

「きやあ！ お気を確かに、悼矢さまっ！ 傷は浅いです！ い、今すぐ人工呼吸を や、やだ人工呼吸だなんて……そんな……私が『』ときが悼矢さまの唇を……ぱつ』

手で赤くなつた頬を挟み、くねくねしている弥生さん。

「しかしやるしかありません！ でもああつ……どうしましようつ……身を清めてくるべきなのでしょうか……？ もし接吻に発情した悼矢さまが私の身体をお求めになられたら……！ ああいけません、やめてくださいまし悼矢さまっ！ こ、こんなところで……！ 焦らずとも私は身も心も悼矢さまに捧げて……ああ、やだ恥ずかしいです……！」

俺を忘れて妄想旅行しちゃつてる弥生さん。

助ける気あんのか、あんた……。

弥生さんの口から出てきた妄想にリタが顔を赤くして迫る。

「な、何考えてるのよ！？ あんたが治療しなくていいわよ！ ト
ウヤは私の主なんだから私が介抱するわッ！」

リタが俺の右腕を引っ張った。

「悼矢さまにこんなことをしておいて何をおっしゃるのですか！
悼矢さまの治療は私が致しますっ！」

弥生さんが俺の左腕を引っ張る。

「離しなさいよッ！ 私の契約主よ！」

「ですからッ！ 元はと言えば悼矢さまは私の主さまなのですっ！
何度言えば分かるのですか！」

ぐいぐいと腕を引っ張りあう一人。

な、なんでもいいから医者を呼んでくれ……。

「大岡裁き」という言葉を知っているか

見るに見兼ねたのか、そこへハ神がやってきた。その手にはご飯
茶碗とお箸を持ったままで。

「オオオカ？」

「裁き？」

リタと弥生さんは一人して顔を見合わせる。

八神はこくりと頷くと、お箸をカチカチと合わせた。

「息子と取り合つ一人の母親がいてな。先に手を放した方が本当の母親、本当に思い遣つている者という話だ」

『！？』

二人は同時に俺から手を放す。いきなり離され支えを失つた俺は、がつんと地面に後頭部をぶつける。眼に火花が散り、鈍痛が頭を駆け抜けた。

「～～つ！ ～～～～つ！」

「だいひょーぶか」

じたばたと痛みにもがいていると、呆れ顔で八神が手を差し伸べてくれる。口に箸を咥えて。

「や、八神……貴女が女神様か……」

「…………。まずいな。重症だ」

八神に手を引いて起こして貰い、肩を借りる。

「ひつなつたらどうやらが悼矢さまを治療するか勝負しなければならないようですね……！」

「エヘヘ、もうみたいね……。」

「アホアホアホアホ……！」

家にあがる前に振り返つてみれば、再び対峙している一人。

もう止めるのもアホらしく……。

俺は今日何度も分からぬため息を吐いた。

Dance1 “集うHーーテル使い” 其の17・1

しばらくの後、俺と弥生さんは客間に戻っていた。

睨み合っていたリタと弥生さんはこよりの雷で休戦を迎えたのだった。

その鶴の一聲がなければ未だに一人は戦っていたに違いない。

負けたショックもあってカリタはあれから自分の部屋にこもりっぱなしだ。きっと不貞寝でもしているのだろう。

弥生さんは赤い顔で眼を伏せ、ちらちらと上目遣いにこちらの様子が伺っている。

「で、ではその約束通り、私と……け、結婚 ではなくて契約を

……」

その眼差しはこれから起る事に期待している様子……なんだが

……。

「言っておきますけど俺はそんな約束した覚えはないですからね」

そうである。そもそも勝った方が俺のエーテルとかいう話はリタと弥生さんが勝手にヒートアップした結果であって、俺の望んだところではない。

俺の言葉を聞いて弥生さんは俯き、拳をぎゅっと握った。

「…………。そうですか……。そんなに私のことがあまりませんか……。つ……」

俯き、声を、肩を震わせ始める。

ポツリと、零が彼女の足に垂れ落ちた。

「あ、いや嫌いだとか好きだとかいう問題じゃなくてですね?」

俺が弥生さんとの契約を済る理由がある。

それは俺のAE容量の問題である。

何もエーテル使いは好きな数だけエーテルと契約ができるわけではない。

当然、そこには限界があるのだ。

例えば俺のAE容量が一エネルギーポイントEPあつたとしよう。この容量にあるAEの分だけ俺はエーテル・カードが使用できるわけだ。要するにAE容量はゲームでいうところの最大MPみたいなものと考えて貰えれば分かりやすいだろうか。

しかし、エーテルとの契約の場合、AE容量そのものを削ることになる。AEを使用して契約が成立するのではない、AE容量の器を幾分か占拠されるのだ。

俺は既にリタと契約している。リタが俺のAE容量から一エネルギーEPほど占拠していたとしよう。そうすると今の俺のAE容量はハハEPとことになる。

本来、消費したAEは休息や睡眠をとることで回復するのだが、契約で削られた分はいくら休息や睡眠をとったところで回復しない。つまりAE容量が一EEPに戻らずハEEPが最高値になる。契約を解約しない限り、だ。

そこから更に弥生さんと契約するとなると、弥生さんもリタと同じAE容量一EEPを占拠するとしても、俺のAE容量は六EEP。戦闘時はこの六EEPでエーテル・カードをやりくりしていかなければならぬ。ゲーム感覚で考えて最大MP四割カットのデバフ。最初の一EEPに比べると、かなりキツいことになる。

当然、これはでたらめな数値であり、本来はもっと複雑だ。俺が今、どれだけのAE容量を持つているのか、その中でリタが何%を占めているのかはAESSに向いて調べて貰わないと分からぬことだろう。

スカラーミたくペペツと数値が出せれば楽なのだが。実際はものの見事に素っ裸にされ、体の部分という部分に計器類を貼り巡らせ、うん時間もその状態で寝かされることになるらしい。娯楽になるようなものも持ち込めないので、暇で暇でしょーがない上に、終わつた後は何時間も同じ体勢でいたせいであちこちが痛くなる、とは河上さんの談だ。そんなことを聞いては調べる気も起こらず、今までAE容量がいくらか分からぬままやりくりしているわけだが……。

弥生さんはすっと指で眼をぬぐつた。きらり、と光るもののが落ちる。

「……いえ、契約は悼矢さまのお気持ちもありでしょうし強制す

るつもりはありません……。

リタさんがいる今。私の役目は終えたも同然ですしお

その哀しそうな眼に胸が痛む。

「弥生…… もん……」

参る。なんだか非常に哀れに思えてきた。

「しかし私の心はやはり悼矢さまにあります。」迷惑かと存じますが、この家でしばらぐの間、住まわせてはもらえませんか

言つとすつと、座布団から正座のまま下がり、三つ指をつべ。そして身を折り、頭を下げた。

「…………どつか…………」

いわゆる土下座というものだった。

真摯だ。これほどまでに純粹な想いを俺は生まれてこの方、ぶつけられた記憶が無い。

「住まわせてあげたいのはやまやまなんだが、うすにはこれ以上居候を増やす余裕なんて……」

そうだ。どちらかといつと A E 容量なんかより、金銭的問題の方が大きい。お金がなければ何もできない、お金こそ全てだ、と世界から人を見放すような突き放すようなこといや言わぬが、食つていくためにはお金が必要なのもまた事実。

特に無料飯食らいを抱えている片桐家の財政は赤字路線をまっしへら。終着駅に辿り着くのもそう遠くはない緊迫ぶり。

「裁縫、しつけ、炊事、洗濯、掃除……！ 女のさしこせそは心得ております……！ どこのエーテルよりはよっぽど役に立つと自負しています……！」

『役に立たなくて悪かつたわね！ どうせ家事なんてできないわよ！ どうせ戦うのが趣味だわよ！』

一階からリタの大声が聞こえてくる。

リタのやつすんげえ地獄耳……。つか、聞いてんのかよ。

「それに私の能力は特殊でしてエーテルには効果は無いに等しいやも知れませんが、対禍魂に關してはこの上なく役に立つかと……！」

「こりどばかりに自分を売りに出していくる弥生さん。

対禍魂には効果が抜群というと……あれだろうか。ゾンビ系のモンスターにレイズすると瞬殺みたいな感じなのだろうか。

……いかんな。ここ最近リタに付き合わされてゲームばっかしてたせいか、ゲーム脳になりつつある。

ちなみに、リタもエーテルの端くれなのだから何らかの特殊な能力を持つているようだが“使わない”らしい。使えないのではなく、“使わない”という口ぶりが気になるところだが、今のところ使わなければならぬような窮地に追い込まれる場面も少なかつたので

俺は触れずにいた。能力の話をしようとするといつから嫌な顔をして話題を変えようとするのだ。

腕を組み、うーむと悩む。

弥生さんの想いには応えたい。が、現実的に考えるとどうにもこうにも首が回らない。

そんな俺の渋い表情を読み取ったのか。

弥生さんはすくっと立ち上がった。

「無理を言つて申し訳ありませんでした……。いきなり押しかけて困らせてしまいましたね……」

大きな風呂敷を首にかけ背負い、笠を頭に乗せる。

俺は何も言えない。

ただ座つたまま腕を組んでいる。

「…………忘れるところでした。悼矢さまのお父様からこのようなものをお預かりしています」と弥生さんが「じや」そと着物の袖に手を入れる。

そして取り出したのは一枚のエーテル・カードだった。

「同さまは鍵だとおっしゃっていましたが……。そのエーテル・カードでエーテル使いとしての準備が整うと。リタさんを助けてあげて下さいまし」

動こじとしない俺の手を掴むと弥生さんは俺にエーテル・カードを握らせた。

鍵と言われて真っ先に思いつくのはもちろん親父の部屋にあるアレである。

「まさか……金庫の……」

俺の手を両手で握つたまま、

「私にとつて契約主は悼矢さま……あなただけです……。悼矢さまのことは生涯忘れません……。悼矢さまも私のような馬鹿なエーテルがいたくらいには頭の片隅において頂けたら……嬉しいです」

そう言つて微笑する弥生さん。

「や……よい……わん……」

辛い、笑顔だった。

「あ……」と俺が何かを言つ前に、いや言わせぬよつこ、

「御免!」

さりとて零れ落ちる涙を振り切つて、部屋から走つて出て行つてしまつた。

「弥生さんー」と思わず立ち上がりてしまつ。

たつたつたつと廊下を駆けていく音が小さくなる。

だが追いかけはしない。
追いかけたところで掛ける言葉もない。

『あれ……、お帰りですか?』

ふすまの匂いが廊下から入るの音が聞こえてくる。

はい、この辺でお騒がせて顶きます!』

そ
う
で
あ
た
」

「いかゞ達者で……！」
悼矢をまをよべくお願ひします……！」

ヒシヤリと玄関の扉が隠ある音がした

なぐたよ
これ……こへあるしかね」のかよ

後咲力思し

俺はとかり
との場に腰をおいた

手にあるのは彼女が残していったエリ・テ川・カリト

しばらくして座つてゐると部屋の扉が開いた。

「よりだつた。

「よりはあぐらかく俺の前に無言で正座した。

「なんだよ……」

ペち！

額を叩かれた。

「なんだよ、じゃないよ。泣いてたよ、和泉さん」

ビニが怒つてこようつた。頭のつゝみの頭。

知つてこる。そんなことは分かつてこる。

「いいじゃない。住むへりー

「聞いてたのか

「聞いてた」

俺は顔を伏せた。

「うちにそんな余裕はない

「でも元気はある。それがうちの家柄じゃないの」

俺は顔をあげた。

「よりは笑っていた。

ぱはん、と胸の前で手を呴ぐ。

「はい、お説教はおしまい。

早く和泉さんを追いかけてあげて

霧が晴れていくやうだった。

やはりあれでお別れといつのは夢見が悪い。

「ああ……！ ああ！」

俺は立つや、否や、ふすまを開けるのもめんべくへ蹴り破つて廊下に出た。

「つて、こらああああ！」

後ろからこじりが怒りに叫んでいるが構いやしない。

俺はすぐさま、靴を履き外へと飛びだす！

中庭を突っ切り、家の門を開け、左右を見回す。

だが既に弥生さんの姿はない。

京都……つて方角的こはざつちだっけ……？

と、数メートル走つて俺はブレーキをかけた。

ふとした違和感。

とあるものが眼に入ったような気がして振り返る。

家の門のすぐ横。

その壁に背を預け。

三角座りして膝に顔をうづめ。

じつとしている弥生さんの姿がそこにはあった。

しゃがみ込んでいたせいで、さつきは気づかなかつたらしい。

俺はほつとして弥生さんの前で足を曲げる。

そして彼女の手をとつた。

すると彼女は顔をあげ、やつと俺に気づいたようだつた。

その頬には涙が流れている。

「……と、悼矢さま……ー? どうして……あれ……!?

ぱつと立ち上ると、袖で涙を拭う弥生さん。

「す、すいません……! 決して未練がましく離れがたい想いに囚われていたわけではなく……!」

良かった……。

「これはそのなんと言いますか」

俺は彼女を抱き寄せた。

ひとり、と胸に彼女の重みが伝わってくる。

こきなりの俺の行動に俺の胸で眼を丸くしている弥生さん。

「と、悼矢さま……？」

「弥生さん、悪い。俺が間違つてた。虫の良いことを言つてるかも
しれないが、俺に力を貸してくれ」

「悼矢…… わお……」

弥生さんが幸せそうな顔で俺の背中に手を回す。

「悼矢さま……！ 悼矢さま……！」

感情が溢れるように、胸に顔をうづめ、強く抱き返してくれる弥生
さん。

じーー。

ふとねめつけるような視線を感じ、俺は家の方に眼をやつた。

そして彼女に気づいて俺は思わずびくっと体が震えてしまつ。

片桐家の二階。

部屋の窓からリタがこちらをじっと頭で睨んでいた。

「けつ」

面白くなさそつた顔をしげこる。

「悼矢わまつ！ 悼矢わまつ！」

それを知つてか知らずか、幸せそつに頬を俺の胸にこすりつける
弥生さん。

「こつまでやつてんのよー！」

リタが投げた田覚まし時計が俺の頭にぶつかった。

「「ハ」」

「ど、悼矢さま！？ 敵！？ おのれつ！」

辺りを見回し、弥生さんはリタに気づいた。

「リタさん！ 何をなさるのですか！」

「ふん」と腕を組むリタ。

「悔しいのなら貴女も多少は素直になつたらどうなのですー！」

言われてリタは顔を紅潮させ、窓から身を乗りだす。

「な、なによ！ 私は別にトウヤのことそんな風には思っていないもの！ 相棒よ、相棒！ ただのパートナーなの！」

「何を世迷い言をおっしゃるのですか！ 悅矢さまのパートナーは私です！」

『わやー、わやー！

道ばたと窓で口論を始める二人。

『近所迷惑なこと』の上ない。

『わんわんわんっ！』

一人の口論につりれるよつてかで犬が吠え始める。

これから騒がしくなりそうだと俺は地に倒れたまま思つのだつた。

Dance1 “集うH-テル使い” 其の18

俺は金庫の前に立ち、エーテル・カードを差し込んだ。

「エーテル・カード発動！」

するとカチリと音がして扉が開くではないか。

扉を開け、中に入っているものを確認する。はたして中に入っていたのはカードフォルスターだった。

そのフォルスターの中を見て思わず俺は驚く。

そこには数十枚にも及ぶエーテル・カードが入っていたのだった。

た、宝の山！？ これをAES Sに売ればか、金が……生活費が

……！

「悼矢さま、中に手紙が」

「お、ありがとう。なにに」

これを見ているということは弥生から話は聞いたはずだ。そのフォルスターは俺が昔から使用していたものだ。俺には必要なくなったからな。有難く使えバカ息子。

あのクソ親父……。弥生さんと契約した時のことを考えて用意していたのか。

初めて親父が役に立つた……。

手紙にはまだ続きがあった。

追伸　お前は禍魂やエーテル使いから着け狙われることになるだろ？　俺の子だからな。死にたくないれば現実を受け入れて精進する」とだ。」よりのことを頼む。

もつ既に狙われまくつてます、お父様。

あー、あと彼女できたか？　お前はたしか桧流間さんとの美姫ちゃん

「うぬせーよー。」

くしゃくしゃに丸めて手紙を放り投げた。

俺はフォルスターを腰に巻くと姿見の前に立つ。

お、これ今持つてるのは好きかも。

「なかなか真っ当に見えるじゃないか」

声がした方を見ると開いた扉を背にして、腕を組みハ神が立つていた。

「話はまとまつたようだな。私はもうそろそろ帰らせてもらつてもいい。AESISに顔を出さなければならぬ用件もあるからな」

「なんだか長い時間とらせて悪かつたな」

「いや構わない。久しぶりに健康に良い物を食べる」ともできたら
な

満足そうにお腹をなでるハ神。

「言つた通り、これらは借りてこいぞ」

手に持つていたスーパーの袋を見せる。おやじの手の中には本が
入っているのだろう。

「ではな」

「おひ。また明日、学校でな」

手を背でふりふりハ神は廊下を歩いていった。

と、そこで弥生さんは部屋の時計を見た。

「あら、もう二時間。私はお風呂の支度をして参りますね」

「ああ、頼むよ」

弥生さんは元氣と微笑むと部屋から出て行く。

俺は手に入れたカードの種類や効果を確認しながら思つ。

話は聞いてたけど親父って本当にエーテル使いだったのか……。

その古いフォルスターと手紙を見てやつと実感が沸いてきた。今ま

では話に聞くだけであつてもしかしたら何かの間違いじゃねえのと
いう疑惑の念があつたが、こんなものを見せられればもはや疑う余
地はなくなつた。

「このカードを使いながらあの親父が禍魂と戦つていただなんてな
……。

「…………」

きづなは机の上にアルバムを放つた。

河上治はいつものようにこやかな微笑みを浮かべながらじつと
ソファに座つている。

そこは A E S S が設けている客室であつた。客室といつても豪華
なものではなく、その部屋にはソファと低いテーブルといった調度
類のみしか置いていない狭い空間であつた。壁に館内終日禁煙と書
いた張り紙がある。他にもエーテルとエーテル使いの大きなポスター
が張られてある。そのポスターには『あなたも A E S S で働こう
!』と太い文字がプリントされていた。

河上治は一 代前半といった風貌の男だ。身長は一七半ば、銀

縁の眼鏡をかけており、長い前髪が縁にかかっている。その身は紺色のスーツに包まれているため、一見、どこにでもいそうなサラリーマンだが、何を隠そう彼はA E S Sに所属する一部隊を預かる優秀なエーテル使いである。

対するきづなは向かいのソファに座らず立つたまま腕を組んでいる。片桐家から直接バイクを飛ばしてきたこともあってか、服装は制服のままだ。

ソファに挟まれた机には彼女の好きな炭酸飲料が置かれてあるが、きづなはそれに手をつけようとほしない。

（相変わらず嫌われている感じですねー）

すぢやり、と治はレンズとレンズの間、フレームを人差し指で押し上げる。

そしてそのアルバムを手に取った。

ぱりぱりと無言でページをめくり、手の平を写真にかざす。すると写真が違うものを映し出した。それを見た治はアルバムを閉じて再び机に置く。

「言いたいことはあるか」

言われ、治はやれやれとため息を吐いた。

「…………。逆に聞かせて貰いましょうか。

どうするつもりですか？　この事を悼矢くんに？」

きづなの細い眉がぴくりと動く。

「言えるはずがないだりuff……」

「でしょうね。感謝しますよ、八神くん。これを届けてくれたことも含めて」

苦笑いを浮かべる治。

「悼矢くんが“奇跡の子”と呼ばれる特別な存在だとこいつことを知っているのは A E S S にもうく少數います。その中で、ここまで詳細を知っている人間といえば……はてさて、片手で事足りますかね……」

「その中の一人になってしまったわけか……」

きづなはソファの背もたれに腰を預ける。

「説明しろ」

「説明も何も……。ここに書かれてあることで全てですよ。彼は“そういう存在”というだけです」

治は紙コップに入った白湯に口をつけた。

「藤島を捕獲してすぐに片桐が A E S S にきて体のことをお前に尋ねただろう」

「ああ、あれは八神くんの差し金でしたか。えらく質問の内容が的

確についていたので戸惑いましたよ」

「なんと答えた

「『君は人間とホテルの間に生まれた特殊な体质の人間なんですよ』」

「…………お前、らしいな」

治はにこりと微笑んだ。

「血は争えませんね……。君は結局、この件に関わってしまっているんですから」

深いため息を吐く治。

きつながらやつと治の方を向く。

「ええ、そうです。この件に関わっていたのは当時、イデア界にいた者。つまり、君のお父さんもこの件に関わっていたんですよ」

とんとんと治はテーブルの本を指で叩く。

きつり、ときりなは奥歯を噛んだ。

「君の意志は……ずっと変わらないんですね」

「…………」

治の言葉にきりなはただ黙っていた。

「知っていますか。幼少期、小学校、中学校、高校、大学、社会を経ると、人一人の知り合いは五　人にも昇ると言われています」

「……それがどうした」

「もちろん、その知り合い五　人にも同じく知り合い五　人がいる。仮にこの波科町に五　万人の人口がいたとしても、街ですれ違うまつたく知らない人物が君の知り合いの知り合いである確率は一　分の三ということになるんですよ。もちろんこれは単純明快にした計算ですし、この街には五　万人もいませんけどね」

「何が言いたいのかさっぱり分からぬが」

治がヤカンから白湯を紙コップに注ぐ。

「世界というのは不思議なものですね。関わりがないようで色んなところで関係が繋がっている。私の父、八神くんのお父さん、片桐くんのお父さん……」

（そして……ルクライル家……）

治はくいっと眼鏡を指で押し上げた。電灯の光がレンズに反射する。

「世代は代わり、今もこうして関係がある

「フン。感傷に浸っている暇があるのなら仕事をするんだな」

きづなはソファから腰を放すとそのまま部屋の扉へと向かった。

「八神くん」

不意に治が呼び止める。

「もし……『穴』が見つかったら……君はどうしますか……？」

「…………この世界に未練など無い」

そうだけ答えてきづなは部屋を出て行つた。

「愚問、でしたか……。五　人が哀しみますね」

きづなが客室から出て一階ロビーにきたところだった。

「あら、きづなちゃん！ おこん！」

見知った人物を見かけた美姫はすぐに声をかけた。

「美姫……か……」

きづなは声の主が美姫だと分かると、足を止めた。

（ありやつや……。なんか元気ないぞう）

美姫はすぐにきづなの無表情から感情を読み取った。

美姫はすでに私服に着替えており、制服のインナーだったピンクのパークー、白いミニのスカートになっている。

「んー？ 上の階に用事あつたの？」

と、両手をパークーのポケットに突っ込んだままきづなの向こうにある階段を見る。

「ああ、ちょっとな。もう用件は済んだが

そしてきづなの手に持っている紙を見て、彼女がここへ何しに来たのかを理解する。

「お、換金。一緒にこきあしょ」

美姫はスカートのポケットから紙を取り出すと、ひらひらと見て用事が同じであることを知らせる。

AESSの一階には食堂と談話室、斡旋所、換金所、エーテルカードの販売所、修理所がある。一階はAESSに属していない野良のエーテル使いが最も訪れることのある階層なのだった。

換金所へと続く道すがら、

「誰を捕まえたの？」

美姫は隣を歩くきづなに尋ねた。

「ああ……。小物さ。宝石店を襲つた奴だ。

AESSの人間を誘拐したエーテル使いを確保したかったが、誰かに先を越された。良い値だつたんだがな」

「ふーん」

「美姫は誰を狩つた」

「てへへ 誘拐した奴」

ぱつと美姫を見て立ち止まるきづな。

「……っくー お前だつたのか……！ 獲物をとつたのは……！」

「はいはい、睨まない、睨まない。こちちだつて稼がなきやいけないの分かつてんでしょー。たまには師匠に花を持たせてちょうだいよ」

「ア

美姫は苦笑いして手をひらひらと振る。

「誰が師匠だ！」

「何言つてゐるのよー。独学の荒削りだつたきづなちゃんにちゃんとしたエーテル・エネルギーの使い方を教えたのも、戦い方を教えたのも私じゃないのぞ！」

「教えてもらつただけだ！」

「一般的にそういうのを師匠つて言つたよ」

手をひらひら振つて歩きだす。

「ぐうー」と悔しそうに唸るきづな。

だがすぐには平静を取り戻し、彼女の後を追う。

「……お前、片桐と知り合つたんだな」

「まあねー。家近かつたし親が仲良くてねー。昔は美姫ねーちゃん、美姫ねーちゃんつてひよこみたいにくつついてきてたつけ

昔を思い出すように顎に指をそえ田線を上にする。

そうして前を歩く彼女にきづなは呼びかけた。

「美姫」

「なーにー?」

「……“奇跡の子”を……知つてゐるか?」

美姫の肩がびくりと震え、立ち止まる。

「……。 “奇跡の子”がどうかした?」

振り返らず問い合わせる。

「…………いや…………」と口元をきつとな。

美姫はぽりぽりと頭を搔いてから、やつと振り返った。

彼女の素振りで美姫は気づいたのだ。きづなが知つてしまつたのだと。

“奇跡の子”がただ特異体质という羨望の眼差しで見られる存在ではないことを。

だからこそきづなから次の言葉が出てこない。

だからこそAESは“奇跡の子”をひた隠しにする。

「…………。あー、そつかー。

知つちやつたんだ。“奇跡の子”が一体何なのか

視線を外して いたきづなが顔をあげる。

眼があうと美姫はにこつと笑つた。

「美姫……お前……。いつから……」

「小学生の時かなー？ ケツコー衝撃受けた記憶があるわねー。どう扱えばいいか分からなくなったりして。暴走されても困るしねー」

あつはつは、と笑う美姫。

「くつ……！」

そんなあつけらかんとしている美姫に対しきづなの中で一気に怒りが込みあげる。

気づけば美姫の胸倉をきづなは掴みあげていた。

「なぜ貴様がエーテル使いだと教えてやらない……！ あいつはずつと悩んでるんだぞ……！ 分かっているのか！」

言われ美姫の顔から笑みが消え、俯きぐつと唇を噛んだ。何かに耐えるように拳を握り、震わせる。

「昔馴染みなのだろ……！ お前がエーテル使いだと知ればあいつがどれだけ頼りに」

キツ、と顔をあげると美姫はきづなの手を痛烈に殴った。

「分かってるわよ……！」

急に出した美姫の大声にあつなは口を止める。

「そんな」と……嗚われなくとも分かつてゐわよ……」

トーンを低くして美姫が呟くよつと語りへ。

強く握つた拳が血の氣をなくして白くなつてゐる。

きづなからは前髪で美姫がどんな表情をしてゐるのか見えない。いきなりの豹変に胸倉を掴んでいたきづなの手が緩む。

「……美……姫？」

「なーんぢやつて」

と、顔をあげた美姫の表情はいつも通りぢやらけでいた。そして、片手を顎に添えるとほんほんときづなの肩にもう片方の手を置く。

「んー、なんて言えぱいいのかなー。私と焯矢くんつて姉弟みたいなもんだからねー。

あんまつ近づきすぎると、ひつとおしがられるのよー」

彼女は困つたよつた表情でいつ語つた。

「それはお前の性格が起因しているんぢやないのか……」

「なーんー？ なにそれー！ こんなふりちーな私のどいがつりとおしこのよー。」

「やつこつといひがだ」

「べも無く言われ、むー、と口を膨らませる。

「中学生に上がる時なんてほんとひどかつたんだからー。親が傍にいなかつた分、反抗期の影響が全部近くにいる私にきぢやつてさー。あれだけ嫌われたらそつや私も女子校選ぶつちゅーねん！ あの朴念仁め！」

美姫は『うがあー』と吼えて、近くにあつたゴミ箱を蹴り倒した。

「まあ、悼矢くんつてずつと反抗期みたいなといろあるし、あの頃に比べればちよつとは大人になつてゐみたいだけ……。私には分かる！ 親の心、子知らずといつ言葉の意味が！」

「……なんだか知らんが、色々と苦労をしたようだな……」

散らばつたゴミをぐしごしと踏みつけていた美姫は冷静さを取り戻すと、ふうと深い息を吐いた。

（タイミングが必要なのよ。また嫌われるかもつてと思つと躊躇して当たり前じゃない……）

「悼矢くんのことはきづなちゃんに任せると。今はもう悼矢くんも私よりきづなちゃんを頼りにしてくるでしょつし」

後は若い者に任せましょ、とばかりにひらひらと手を振る。

「おー、美姫……！ 何を勝手な……！」

「ま、こんなこと言わなくともきづなちゃんのことだから自分から悼矢くんの世話を焼いてたと思うけどねー。

「だいぶ前に三階で悼矢くんと特訓してるので見ちゃつたし。私の出る幕は無さそうかなー、ぐふふふ」

口に手をあていやらしい眼で笑う。

一
み
美姫
い
」

きづなは顔を紅潮させて怒鳴つた。

「後でカフH行こうよ、カフH。悼矢くんとの馴れ初めを聞かせて貰おうじゃない。ジユースくらい師匠が奢つてあげるよ?」

「…………つ！…………歸る…………！」

「なあーん!? ちょっとー! 換金どうするのよー!?

「フン……！」

きづなはすたすたと階段に向かって歩いて行つてしまつ。

「あいやつや。怒らしきやつたか

一人になつた美姫はきづながさつき言つた言葉を反芻していた。

『なぜ貴様がエーテル使いだと教えてやらない……！　あいつはずつと悩んでるんだぞ……！　分かつていいのかー』

（……あんなに熱くなつちやつて……。妬むのじやなこのわ……。
意地悪の一つも聞こたくなぬつてもんどう）

美姫は悪戯が成功したよつひがれと叫んで叫んだ。

翌朝

「下わし、憚矢を拂、朝ではある」

優しく緩やかに体が揺すられ、俺は眼を覚ました。

うーん、こより、もう朝か？ つてゆーかなんか暗くないか？」

あらまあ 憎矢さま寝ぼけでいはうしゃいますね」

あくあく笑ハ體

言われ起こしに来た相手の顔をよく見てみると

弥生さん！？

それは誰であろうか。紛う」となき弥生さんだつた。赤と白の袴の上に、割烹着を着ており、その姿は京の若奥様といった感じだ。

「おはよー！」ぞこます悼矢さま。

そんな他人行儀な呼び方はやめてくださいまし。呼び捨てで結構ですよ」

「はあーくしょい！ うう……寒い……」

見上げると穴の開いた天井。

昨日、アルデヴァインの空襲でできた穴から外の寒い空気が流れ込んできていた。

「あらあら。大丈夫ですか？」

弥生さんは俺の手をとつて『はあ』と暖かい吐息をかけ摺り合わせてくれる。

その優しさに心まで暖かくなりそうだ。だが激しく恥ずかしい。

「い、今何時ですか？」

俺はその照れを隠すように彼女に問つた。

「五時半です」

「ここに笑顔でのたまつ弥生さん。

は？

訳が分からず阿呆のようにぽかんとしてしまつ。

「五時半です」

「ここに」。

なぜ一回言つたですか、なぜ二回言つたですか。

「五時半！？ まだ二時間は寝れるじゃないですかー！」

「めーーー！」

ペリットと額を叩かれた。

「何をおっしゃるのですか、悼矢さま。朝は早く起き、夜は早く寝る。先入たちはみなそうして健康を保つってきたのですよ？」

と人差し指を立て、子供に諭すよつて言つて。

「あ、いや、しかしですね……」

「しかしもかかしもありませんつ！ 早く着替えて下さーましー！」
と言つと、ぱぱぱぱと俺の寝間着変わりのタンクトップをはぎ取る。

だが

「こやんー！」

俺の上半身を見て弥生さんは頬を赤らめ目を覆つた。

「と、ととと、殿方のむ、胸板……！ は、はやく着替えて下さー、
悼矢さまー、田のやり場に困ります……！」

自分で脱がしといて何言つてんだ、この人は。

仕方ないので俺は渋々と箪笥から黒のTシャツを着込んだ。

すると彼女はビヤビヤと高鳴っていたらしく胸を押さえながら口を
と息を吐く。

「朝から刺激的なものを見せないで下さこまし……」と弥生さんが
じりじりと振り返る。

すねと、

「わわわー」と顔を強張らせて固まってしまった。

「今度はなんですか？」

弥生さんの視線を追いつとまじこは男性特有の朝があった。

ズボンを履いているとまじこは、我が息子様がその存在を主張しまく
つていたのだ。

「ねむー?」

俺は慌ててその部分を手で隠す。だが時は既に遅かつたらしく。

弥生さんはぶくぶくと泡を吹いて背中からひっくり返ってしまう。

「や、弥生さん! ? しつかり! ?」

「と、とと殿方の殿方がー!」

田を×にして『殿方殿方』といわないとのよつ口にする弥生さん。

「わわわー! 方面にまとんと免疫が無いらしい。よくこんなで夜

伽ごうじつ聞えたものである。

「弥生さん！ 大丈夫ですか！？ 聞こえますか！？」

「ハッ！？ 龜の頭が！？」

不穏なことを言いつつ田を覚ます弥生さん。

「だ、大丈夫です、悼矢さま……。違うのです……少しばかり驚いただけです……」

「はあ……。大丈夫ならなによりですが……」「はい。悼矢さま！わたしも知識は得ております！ 及ばずながら悼矢さまの殿方を鎮めて……」「ぐつー！」

弥生さんが喉を鳴らして唾を嚥下する。

「つじょうつとー？」

「だ、大丈夫です……！ 経験はありませんが奉仕の心と悼矢さまへの愛は十二分にあります……！」と震える手で弥生さんが俺のチヤックに手をかける。

「んぎや ああ！？ なにこの展開い！？」

「あ、暴れないでくださいましー、つまくできないではありませんか！」

「できなくていいですってー！」

と、その時だつた。

ドギヤン！

壊れんばかりに扉が開く。

「ひぬせこのよ朝つぱらからー。何時だと想つてんのよ、トウヤー。」

扉を開けたのは誰であろうかリタであつた。

リタは扉を開けはなつたまま俺の上に覆い被さつてゐる弥生さんを見、半分脱がされかけている俺のズボンを見た。

「…………」

「…………」

「…………」

三人が三人とも固まつたまま嫌な沈黙と空氣だけが流れる。

俺の息子もしおしおと身を屈めるほどの緊張感が走つていた。

やべえぞ！ なにがやべえつて、こんな状況を見たら絶対にリタが誤解するじゃねーか！ どうする！ ？ どうするつてそりやおめー俺は悪くないんだから堂々と事の顛末を話せばいいだけじゃないか！

大丈夫だ！ ちゃんと話せば理解してくれるー ああ、そつとー！ フラグを自分で立てまくつてるような気がするけど気にしちゃいらねー！ いくら緒突つ娘でリアル筋筋で口より先に大剣ぶん回す

リタでも話せばなんとか

リタの体がいつも赤いドレスに包まれ、振りあげた両手にはもちろんアルデヴァイン伯爵おはようござりますう！

「アーテリタあんッ！？」
「あー？」

「亞流出ええ！ 武靈威罵ああーー！」

この日、にわとりの鳴き声のかわりに爆発音が波科町の朝を告げたといつ。

「まつたくなに考えてるの一人ともー。また部屋をあんなにしづかって！ なんでもかんでもすぐ」喧嘩するのはやめてよ！ 昨日は昨日で庭をめちゃくちゃにするし！ ちやんとあの穴埋めておいてよねー？」

『はー、すいません』

「こつまでも子供なんだか、ひー。」

小五の妹に子供だと言われるこのふがいなさ……。いや実際まだガキなんだけど……。

俺はちがつと横で同じく上座をさせられていのリタを見た。

眼が合つとコタは『ふんつ』と顔を反らしてしまった。

「おんのアマアアー！？ ほんと可愛くねえ！？

怒りに打ち震えながら救いを求めて弥生さんへと視線を向ける。

が弥生さんはあらぬ方へと眼を反らし、脂汗をかきながらぼりぼりと頬を搔いていた。

今にも口笛を吹きそうな素振りである。

孤立無援、孤軍奮闘とまわこのことをこいつのだろ。

「ちやんと聞けよ、おー」

ギロリとじょり様の眼が鋭く据わる。

『ひいっ！？』

かくしてじょり様のお小言は一時間続いたのであった。

俺はふらふらと学食を手指して学校の廊下を歩いていた。

なぜこれほどまでにへばつているのかもつ語るまでもないだらう。
もちろん朝の惨劇に疲弊しきっているためだ。

ちなみに鍊太郎たちは一足先に食堂へ向かつた。

だけどまさか親父が俺のエーテルを育ててただなんてな……。

和泉弥生さん。白と赤の袴に身を包んだ和風美人。俺のために鍛錬を積んだようだが……。なんせリタと対等、いやそれ以上の立ち回りを見せたのだ。きっと血の滲むような毎日であったに違いない。
それもこれも俺のため……ってか……。

弥生さんの熱視線を思い出して、額に脂汗が滲む。

期待されるのは悪くは無い。が、過度の期待となるとプレッシャーにしかならないわけで……。特にああいった羨望の眼差しというのを受けたことがないだけに俺は彼女に対してどう対応すればいいのか分からぬでいた。

今朝、彼女がこよどと一人で仲良く洗濯ものを集めているのを俺は見ていた。きっと今も洗濯したものを取り込んだり、掃除したりと精を出しつづけていることだろう。

「じょりはじょりで『自分の時間が持てるよ』と嬉しそうだし。どこかで昼寝して壊すだけが取り柄のエーテルとはまるで違うな……。

本人にそんな事を言えばどうなるかは眼に見えてるので口が渓谷のように裂けても言えないが。

やうして弥生さんのことを考え歩き、階段へとさしかかった時だ。

前の廊下から美姫先輩が歩いてくるではないか。

「あら悼矢くん。ほんと最近は良くなつわね。……やっぱり赤い運命には逆らえないのかしら」

最後の方を何かぶつぶつ呟いている美姫先輩。いつものように制服の下にパーカーを着ているらしく、後ろ首からフードが飛びだしている。

俺の正直な気持ち。

激しく関わりたくない。

しかも今のこの状態では特にだ。

「もしかしてフラグがたつたのかしら。

おめでとー、悼矢くん！ キミは今、美姫先輩ルートに入ってるわ
よー。」

ペーパーをだしてぐっと親指を立てる美姫先輩。

なんだそのめんどくわいつなシナリオルートは……。全力で願い下げしたい。

「つてうわなにそのクマー？ 顔色も悪いし、精氣も欠けてるわよ。
徹夜でゲームでもしたの？」

あんたと一緒にすんな。

「ああ……美姫先輩……」んばんは

「「」んばんはつてまだお昼だけど？」

言われ俺は辺りを見回した。

あ、ありえねえ……。疲労的にはもう大方だぞ……。

どうやら朝早く起されたせいもあってか体内時計が狂ってしまった

てこるよつだ。

前回と立場が逆になつてしまい、半ば放心している俺を見て美姫先輩が田の前で手を振る。

「お～い、生きてるか～い？ ゴムパッチンでもして生きてる実感つていうのを確かめてみる？ でゅわな、でゅわな～。おにいちゃーん！」

生きてるつてなんだろ、生きてるつてなあに、と美姫先輩は体を揺らす。

「美姫先輩つていつでもテンション高いですね……。

いやね……昨日、ちよつと色々あります

「色々……ー？」

なこやら視線を上にしてもやもやと想像している美姫先輩。

「だ、だめよ、悼矢くん！ 近親相姦なんて！ 確かにこよつは抱き枕にしたいほどカワコイけど！ やわこいほつぺた！ 小さなおで！ お口様の匂い！ ああん、こよつ萌え！」

……。ほんとあなたの頭の中はぞひつなつてるんだ。

俺の両肩を掴み、がくがくと揺さぶつて俺の妹の愛くるしさを叫ぶ彼女はぞひやら本気で言つているらしかつた。

「勘違ひしないで下せこよ。妹に手をだすほど飢えちゃいませんつ

て

「「つーん？　じゃあ誰と？」

美姫先輩。あなたはそういう方向でしか考えられないんですね。

「あーもうこいです。今から食堂に行くんですけど美姫先輩も一緒にどうですか？」

「こーわねえ。それじゃ、食堂マートとこもおしおつか

セーフティと彼女は振り返り颯爽と駆けだした。

「オホホ！　ほーら捕まえて！」りんなさーい！」

俺はそんな先輩を放つておいて、ゆっくつと食堂まで歩いていくのだった。

「ひどいわ、悼矢くん。後ろを見たら知らない人しかいないんだもん。

きやつさやつふふしながら一人で食堂に入つて変な眼で見られただ
やない」

大丈夫です。あなたは常に変な目で見られていると思います。

「美姫先輩が勝手に一人で走つてつたんじゃないですか」

今日も今日とて学食のカウンターは戦争状態だった。

もともとは学食は平和な場所であった。しかし、現生徒会長がここを戦場へと変貌させたのである。

要するに経費削減をうたつた商品数の減少である。しかも人気商品ほどその品数が少ないという明らかに何らかの意図を感じる仕様。そしてどう考へても外れなメニューを増やしたのだ。

かくして学食戦争は始まりを告げたのだ。品数数が変わつた初日、生徒会長は戦場となつた食堂を見て大爆笑していたらしい。

あの性格からすれば確かにこれは噂ではなく真実に近い話なのだろう。

とにもかくにもその外れメニューの中の一つがハルマゲ丼なわけだが……。

「ハルマゲ丼一つ！」

元気良く注文する先輩にぎょっとする周りの生徒たち。

そんな視線を独り占めして渡された丼をほくほくと幸せそうな顔で席まで運ぶ美姫先輩。

お怒りのこよりに昼飯抜きを通達された俺も定食を受け取つて席に

向かう。……美姫先輩。……その丼を見てみんな振り返りますよ。

どうぞと何が含まれているのか分からぬゲル状のタレがかかつた丼を前に割り箸を折る。

「こつただきまーす！」と口に運ぼうとして美姫先輩は箸を止めた。

「あ、きつなぢやんだ」

どうやら田畠敏く美姫先輩がハ神を見つけたらし。

その腕に持っているのはカツラーメンとスナック菓子である。お世辞にも健康的なものと呼べるものではない。

ハ神はこつらに気がつくといつぱりへやつってきた。

「邪魔するわ」

こつらの応えもきかずテーブルの空いでいる席につくハ神。

「あら。こつもは避けるのに珍しい」

言われハ神は眼を閉じ冷静に言葉を放つ。

「不本意だが席がなければ仕方ない」

「ハ神、お前学食なんて利用するタイプだったのか

「たまにな」

「おー、おひたおひた。かつかやん、つれないやない
」

そこで僕先輩の体が止まる。

美姫先輩に気づいたのだ。

美姫先輩は美姫先輩で僕先輩を睨んでいる。

かくして俺たちの昼食は始まった。

うつわあ、なんだこの雰囲気……。

そこは学食の端にある一角。

その四人がけの真四角の白い枕には俺、ハ神、美姫先輩、僕先輩の四人が座っていた。

相変わらず美姫先輩と僕先輩はお互いに睨み合っている。

これだけ敵意を剥き出しにするだなんて、この二人の間に何があったんだ。

そんな二人には興味なさそうに、と言つよりも触らないようにカツプラーーメンをすすつているハ神。

君子危うきには近寄らず、とは言つが……こいつ、この雰囲気でよくメシが見えるよな……。

その一角からえも知れぬオーラが漂つてゐるせいか、周りの生徒たちも和やかな食事というわけにはいかないようだつた。ではどんな風なのかというと、ハラハラとしながら様子を伺うか、ハ神の生足をちらちら見るか、眼を合わせないようにもくもくと栄養の摂取を進めるかのどれかだ。

そしてその中に鍊太郎たちの姿を見つけた。

鍊太郎は『よつ』と手をあげ、本田がふりふりと手を振つてくる。

それに応えるように俺も手をあげてみせた。

「おい、見ろよ。桧流間先輩だ」

「え、どうじ?」

ふとそんな声が聞こえてきた。

思わず俺はそちらの方へ視線をやる。

すると三人ほどの男子生徒がこいつらのテーブルを見て何かを話している。

「桧流間先輩可愛いよなあ。あんな人に甘えられたいよ」

「いや、俺はあの明るい勢いで桧流間先輩に振り回されたいな」

「おおっ? 美姫先輩、意外だが男子に好感触じやないか。

確かに客観的に見れば誰とでも親しくなる美姫先輩は面倒見が良さそうに見られるのかもしれない。

だが、これだけは言いたい。振り回されたいって言つた奴、一回俺の代わりになれや。一度と美姫先輩に近づこうと思わなくなるぞ。

「おい……! ハ神きづながいるぞ……!」

違う方向からそんな声も聞こえてくる。

そちらへ視線をやると、やはり男子生徒が数人でひそひそと話してハ神に見とれているではないか。

「すっぴえ美人だな……。噂以上じゃねーかよ

「だろだろ。でも鉄壁らしいぜ」

相変わらずだな。ハ神の人気は不滅か。

ハ神の耳にもさつきの言葉は聞こえているはずだ。気分を害していないかと彼女を見てみる。

が、ハ神はもくもくとポテチを齧つていた。

「？ どひひた？」

ハ神が俺の視線に気づいてポテチを咥えたまま尋ねてくる。

「…………。いや」

ハ神はポテチの袋を見下ろすと再び俺を見た。

「食べるか？」

「いや……いい」

「そつか」と自分の食事へ意識を向けるハ神。

「こつ、やっぱ聞こえてないな。

つーか、カツプラーーメンにポテチ、ソーダって食べ合わせが混沌としすぎやしないか。

「おいおい。あのテーブル、僕までいるじゃないかよ

「あの噂の！ 百人斬られ男の俵衛助か！」

「俵先輩……。そんな不名誉な通り名があつたんスか……！」

と、目ぼしい人物を回つてついに俺の話題になつたらしい。

「もう一人の男は？ 誰だよ、あれ」

「さつきからきょりきょりしてんな

「さあ、見たことないな

でーすよーねー

「…………」

まあ、そりやそうだろ？ 波科高校では美人でクールと有名な八神、それに負けるとも劣らぬ美しさと可愛さを持ち合わせた美姫先輩、そしてあまりにも目立つ赤髪な上に関西出身の俵先輩。

この顔ぶれは豪華さを通り越して滑稽でしかない。

注目を集めてしまうのは仕方が無いことだろ？ 俺が震んで見えるのも仕方が無いことだ。

このメンバーの中にいることが嬉しいから涙こやら。俺は窓から空を見上げて涙を流した。

「あらやだ。悼矢くん、なに泣いてるのや」

「いえ、いいんですよ。気にしないで下を」

「ううん、やうはにかないわ。お姉さんに相談して？ ね？」

「や二三まで言つならじやあ……俺の田の前にかなり面倒な先輩がいるんですけど、どうにかしてくれませんか」

「言われてるわよ、衛助。わざわざどうか行つてよ」

美姫先輩がしつしと僕先輩を手で追い払つ仕草をする。

「いや、貴女ですか？」

「ナアーンー？」

美姫先輩はそう言つて口を大きく開けたまま固まつてしまつた。どこかのジヨーさんみたく真つ白くなつてしまつていて、これはどうでもいいことである。

「かつかつか。ええ氣味や。かつちやんはお前が悩みの種やで～

「や、できれば僕先輩も

「ハーンー？」

美姫先輩と同じように口を開けて固まり、真っ白になる俵先輩。

「阿呆だな」と肘をつき窓の外を眺めながら言つハ神。

「悼矢くんがお望みみたいだし、わざわざ消えたら?」

「それはお前もやる。わざわざ消えたらどうや?」

バチバチバチ。

ぶつかる視線の間に紙でも出せば燃え上がりそうな勢いだ。

「バカ派手髪」

「アホ女狐」

「音の出ないスピーカー」

「ブレークのない三トントラック」

ついには相手に對して訳の分からぬ文句を言い合い始める。

「おい、片桐。この二人、何があつたんだ」

と耳打ちしてくるハ神。

「知るかよ。そもそも俺はお前と美姫先輩が知り合いだつてことが不思議でしようがないってのに」

なので俺もひそひそと静かな声で返す。

「…………想像くらべつべだらわ」

「ついてねえから説いてんだよ」

俺の答えに八神はやれやれと首を振った。

「キヤー、悼矢くんとさなちゃんがひそひそ話してぬうー！ ラブ臭！？ ラブ臭がするわ！？」

乙女チックに眼をきらきらと輝かせて俺と八神を見る。

「……なに勝手に盛り上がってるんですか、美姫先輩」

「いやいや。かつちやんとやがみんがお似合いのカップルに見えるんは確かやでー」

言われハ神の方に視線をやると、ハ神はちらりとこりらを見て、すぐに視線を戻し、顔を赤くしながらゲフフゲフとわざとらしい咳払いをした。

「くだらんことを言つた。私と片桐はそんな関係じゃない

「えー？ 昨日、悼矢くんの家で夕飯食べたくせにーー？」と底意地が悪そににやにやとした顔の美姫先輩。

な・ぜ・知・つ・て・い・る・？

俺と同じくハ神もなぜそれをとぼりに驚いている。

特にやましいこともしていないし、俺とハ神はそんな桃色な関係ではないが、美姫先輩の言い方だとどうしても変な方向性を感じてしまつ。こんなことを言われて互いを意識するな、というほうが難しい。

しかも、周りにはハ神に注目している男子生徒がいるのだ。奴らに聞かれようものなら、ちょっと後で校舎裏こいやイベント確定である。しかも今なら確率変動で大フィーバーだ。

「美姫先輩……！」あ、あんまり大きな声でそういうことを」と俺が『しー！　しー！』と周りを気にしながらボリュームを抑えろとボディランゲージで伝える。

そんな俺を見てニヤリとほくそ笑む美姫先輩。

次の瞬間。

「えええええ！？　昨日、片桐悼矢くんの家でハ神きづなちゃんが夕飯食べたくせにいいいいい！？」

余計に声を大きくしゃがる美姫先輩。

つーか、説明的すぎるだろ！

『なんだと、オラアツ！？』

がたん！

音をたてて立ち上がる男子陣。

いきなり周りの男子生徒から俺に殺氣という名の視線が集まつた。

このアマ……。人が嫌がることを嬉々と……。

「か、かつちゃんが自分の家に女を連れ込んだやと……？」

「 し、信じられへん……。あ、明日は雹が降るな……。カキ氷シロ
ップ買つとかな……。」

すいません、僕先輩。今はツツコんでられません。

「な、何を馬鹿な……！」そ、それは片桐が……！「と反論すべく立ち上がるハ神さん。

「お、落ち着け八神！ そういう反応をすると余計にからかわれるだけだ！ 美姫先輩は分かってやつてるん」

「うぬせー！ これが黙つていられるか！」

ごがあつ！

頬を殴られ俺は椅子から転げ落ちた。

エーテル・エネルギーでガードする暇もねえ！？

八神さんのお怒りは頂点MAXサイヤ人4並であつた。

「つてか美姫先輩、なんでそんなこと知つてるんですか！？」

「」よりから聞こひやつた「

「より様あああああーーー？」

俺の脳裏に『教えひやつた』と舌をだす「よりの姿が浮かぶ。
OH……マイ・ラブシスター略してマブシス。なんて人にべつち
やくつてんだ。そりやからかう種になるつてもんでしょう……。

それでなくとも注目されるメンバーだつていうのに、『あやーあやー
一騒ぐから周りの人から余計に注目を受けていいんじゃないか。

俺には殺氣の視線がぐさぐさ刺さつてゐる。

どうしたもんかとため息を吐いた時だつた。せりての場を混沌
とせせるよつた彼女の声が聞こえてきたのは。

「悼矢さまーー！」

「」この呼び方は……まさかーー？」

俺が恐る恐る振り返つて声のした方を見てみると、食堂の出入り
口に誰であろうか弥生さんが手を振つていた。

しかも田立つことこの上ないあの巫女っぽい姿の上に白い割烹着
を着ている。足は草鞋ではなく黒塗りの高級感が溢れる婦人下駄だ。

やつぱり京の若妻ルックーーー？」

いつものポニー テールを首元で上に折り曲げ髪留めで止めているのが、すっきりとしたうなじが見え驚異的なまでの破壊力を産み出していた。

「な、ななな、なんで弥生さんがここに！？」

カラカラと黒い婦人下駄を鳴らして軽やかに駆けてくると弥生さんは手に持つている大風呂敷を俺の畳の前に掲げてみせた。

「決まつているではありませんか。お弁当を届けにきたのです。その様子では残念ながら間に合わなかつたみたいですが……」

「あらあらー キヅなちゃんとライバル現るー？ これはピンチじゃないのぉー！」

美姫先輩がぐふふといやらしく含み笑いしてハ神の脇を小突く。

「美姫！ 私と片桐はそういう仲ではないと言つていろだろ？！」

顔を赤くしてパンツと机を叩く。

「おほほほほ！ 照れなくともいいのよ、キヅなちゃん。初めての時は替えの下着とナップキンを持っていかなきゃダメよ！ それとちやんと避妊もしなきゃダメだからね！」

「なつ！？」

顔からボッと蒸氣を出して固まるハ神。

あ、ハ神がフリーズつた。

だが悪いな、八神。美姫先輩はお前に任せ

と弥生さんへ振り返ろうとする。俺先輩が飛びかかってきた。

「どうじいひ」とやねんな、かつちゃん。俺たちの童貞同盟はどうなってん!?

俺の両肩を掴んでがくがくと揺さぶつてくる俺先輩。

「『スタンダップ』!? なんですかそのドラマみたいな同盟は! 勝手に加えないで下さいよ!」

「うるさいわ! うるさいわ、うるさいわ! かつちゃんだけは味方やと思ってたんや! 縛らなんでもこれは俺の拳が黙つてへんで!」

顔の前まで右拳を持つてきてぶるぶると震わせる。

「ほひ。それは面白いですね」

イライラしていたこともあり俺も少し喧嘩腰になる。

俺先輩は急に拳をぱくぱく動かして裏声をだした。

「オイ、コラア! チョーシノッテンジャネーボ!」

「どげしつ!」

俺先輩のボケなど知ったこっちゃない。俺の振り下ろした拳を脳

天に受け、俵先輩はぽてりと床に倒れた。頭から白い煙がしゃーつと出てるがきっとこの人なら大丈夫だ。

そしてやつと俺は弥生さんに向き直る。

「ダメですって弥生さん……！」「なんといふに来たら……！」

できるだけ人目につかないように弥生さんはみかん箱に捨てられた子猫の押し込む。既に注目を受けている中ではどう考へても無駄だが、そうせずににはいられなかつた。

「あら……なぜです？」と弥生さんはみかん箱に捨てられた子猫のよつにテーブルの下から俺を見上げ、寂しそうに問う。

「なぜですかね……！」「アンタ自分の格好見てみんとねえ！？」

「かつちゃん。どこの人やねんな」

復活したらしい俵先輩が丁寧にツツコウを入れていた。

「だから違うと言つていいだろ！？」

「おほほほー、じゃあどうしてそんなに必死に否定するのかしらね～！」

「それはお前が勝手なことを……！」

あつちはあつちでヒートアップしているがもはや止めに入る気にもなれない。

と、その時、不意に弥生さんが不穏な台詞を吐いた。

「ちなみにリタさんも来てますよ」

は？

なんだって？

思わず眼が点になる。

「見学していくとおっしゃって校舎の方へスキップで行かれました
」

「ここ」とテーブルの下で微笑みを絶えない弥生さん。

なにしきせつてんの、あの馬鹿！？

「じじぢやいられねー！ これ以上、騒がしくされてたまるか！
つていうか本音を言ってしまえばこの場にいたくなーーー！」

「俺ちよつと探してくれるー」

と入り口に向かおうとするが、八神がささつと俺を避けるように道を開けた。

「へ？ な、なんだ八神……」

その訝しげな行動に俺が八神に手を伸ばすと、八神はさりに俺から離れ真剣な顔で言った。

「やめる、触るな。妊娠する」

「は？」と眼が点になる俺。

『ふふ——!』

八神の言葉に口を押されて噴き出す美姫先輩と俵先輩。

「ひーっひっひ！ に、にんしひーっひっひ！」と眼に涙を溜め、腹を抱えて大爆笑している美姫先輩。

「わわわわわわわわー、か、かつちゃん、やがみんにきらわれひーっひっひ！」

俵先輩は俵先輩で大爆笑である。

この二人マジでどつきでええええ！

「妊娠！？ どうこいつことです、悼矢さ 」

妊娠という言葉を聞いて立ち上がりうつとした弥生さんだったが。

がつん！

自分がテーブルの下でしゃがみ込んでいたのを忘れていたのか、頭を盛大にテーブルにぶつけ、再び頭を押されて無言でしゃがみ込んでしまった。

「ああもうー、俺は行きますからー、ちゃんと八神の誤解解いてお

いて下さいよ、美姫先輩！

「はいはーい、いつてらつしゃーい」

にぱにぱと手の平を開いたり閉じたりして俺を送り出す美姫先輩。
その顔がにやにやと笑っているのは腹が立つが今は構つている場合
ではない。

俺が出入り口へ走る最中。道を開けるようにすすすと割れる生徒の
波。

『変人さんの仲間へいらつしゃーい』

脳裏でそう言つて手を差し伸べる美姫先輩、俵先輩の幻影。

俺は涙をちょちょきらせながら校舎へと走つていった。

といふこと。

私は観光気分でトウヤの学校を見て回っていた。

なかなか興味深い建物だった。コンクリートと呼ばれる素材で構築されているようだが、イデア界ではもっと強度のある物質を建物には使用していた。

よくもこんな柔らかい物で学び舎を作ったものだ。私にしてみれば塩の塊で作っているようなもんである。いきなり学校が崩れてしまつてもおかしくはないだらう。

チラ。チラ。

なんだらう。さつきから視線を感じる。

「すげつ……金髪……」

「いや……良いスタイルしてんなあ……。足長すぎだらう……」

ふと私は振り返る。

すると、皆ほけーっとこちらを見ていた。

目があつと、慌てたように顔を反らす。

彼らの服装を見、私は自分の服装を見下ろした。

彼らはトウヤと同じような制服を着ている。そして私はノースリーブのパーカーにホットパンツ、黒のニーソックスといつ出で立ち。

ああ、そっか。制服を着てないから立派に立つやつてるのね……。

あとでトウヤに怒られるのは嫌だ。

トウヤが本気で怒ると本当に怖い。こよりからの説教を聞きなれているせいか、じょりぱりの説教を垂れ流してくれるのだ。

一ヶ月前はまだ会つたばかりで互いに遠慮する部分もあつたのだが、今ではもうなんら遠慮の無い付き合いになつていて。と言うのも一ヶ月前はトウヤが知らないことばかりで、エーテル使いとしてもひよつこだった。私が教えられることも多かつたのだが、今のトウヤは私よりも知識を持つている。

河上やさしこから教わつているらしい。時間があればAESSTへと出かけているし、毎日のAES修練、体力作りにも余念がない。

エーテル使いとして成長してくれるのは嬉しい事なのだが、私が離れていくよう寂しい気もしていた。

誤解のないように言つておきたいが今の関係が嫌いというわけでは決してない。むしろ良い関係だと想つ。私の暇つぶしにもよく付き合つてくれるし……。

そもそもエーテル使いは契約しているエーテルへの絶対的強制力を持つている。トウヤが私の体を自由に操れるということだ。しかし、トウヤは一度たりとも私を強制したことがない。そんなトウヤ

の心使いには感謝しているし、なるたけ迷惑はかけたくないと思つ。

私は近場のトイレへ、そして個室へと入る。

そして意識を集中させ、頭の中で今の自分の姿を思い浮かべる。そして徐々に女子生徒が着ていた制服を自分が着ている自分を想い描いた。

白い上着に黒く短いスカート、そして上履き。

皿を開けると、果たして私の身を頭で思い浮かべた通りの制服が包んでいた。エーテル化させたのである。

いつもの戦闘服と違つて、多少の時間と集中力はいるがエーテルにとってこれくらい容易いことだ。

ふりつとお尻をつきだし、背中の方へと皿をやつた。短いスカートがさらりと揺れる。

んむ。完璧。

これでトイヒヤに怒られることもないだろ？。

私は再び、トイレから出て観光を再開した。

ざわざわ……。

未だにざわついている食堂でものともせず弥生はお茶を飲んで熱い息を吐いていた。

「ほう……。やはり宇治茶に限りますね……」

テーブルの上には茶具が出されていて、急須から白い湯気が出ている。周囲から注目を受けていたが彼女たちはまったく気にした様子を見せていなかった。

美姫との戦いに疲れ果てたきづなは中庭へ戦略的撤退をし、この場に姿はない。

「久しぶりやな、和泉。本殿の工ーテルが一体何の用や?」

衛助が横目で弥生を見る。その質問に弥生は心なしか心外そうな顔をした。

「あら、嫌ですね。勘違いなさらないで下さい。ただ本殿で育つたというだけであって、私は元より悼矢さまの工ーテルです」

彼女の言葉にハルマゲ丼をたいらげた美姫が驚いたような顔をする。

「え……きみって工ーテルなの?」

「はい。悼矢さまのホテルです」とにこやかな笑みで返す弥生。

「A.E.がまったく感じられないし黒髪だから人間……っていうか日本人だとばかり……」

「私は幼少の頃からこちら側にいまして、A.E.消費を〇にして活動するよう訓練して参りましたので」

ホテルたちは知らず知らずA.E.を使って活動している。それを限りなく温存に近いかたちで減少することは可能だが、それを普段は人間と同じく消費の状態にしていると弥生は言うのだ。

戦闘になつて初めてA.E.を消費して活動するといつゝとは、A.E.を最大容量の状態から活用できるといふことだ。このアドバンテージは大きい。

「本殿つてあの京本殿でしょ？ 神那ちゃんのところよね。お父さんに連れられて何度か行ったことがあるある」

「聖巫女様、元気いっぱいですよ。毎日、退屈そうにしていらっしゃいます。悼矢さまにも近いうちに聖巫女様と面会して戴くつむじです」

「神那もそりや退屈やうなあ。あそこ向もないしなー。ビ田舎じ

そんな衛助の知つた風な口ぶりに美姫は彼へと視線をやつた。

「そりいえば衛助も本殿に関わりあるんだっけ

「うーん、まあなあ。もつ関係ないっぢやないんやけど……。追い

出された身やし

と、ざつちづかずな返答をしてついでとをつづく。

「…………儀さん」

「なんやー？ 『あぬやるー』

「有難いびざります」

言われ衛助は「ふつと麵を吐きだした。

「な、なんや……急に」

「貴方が悼矢さまを見守つておなつていたのですね」

彼女の真摯な視線を受けて衛助は口元をぬぐつた。

「おいおい、ええ風に考へんといてくれや。わいの立場、分かってんねやろ？ もう本殿とは関係ないんやで？」

「はい、聞き及んでいます。それでもです」

弥生の真剣な顔に衛助は「なんだかなあ」と頭を搔いた。

「ねーねー、弥生さん。」につけて何が目的で悼矢くんに近づいてるの？

「目的は間違いなく悼矢さまの力でしょう。それで何をするのかは存じ上げません。味方と考えるには難がありますが、敵と考えるに

「…………」

困ったような弥生の表情。

「せうやなあー。中立やと思つてくれたらうえーで、ちゅーいつ。

俺にも夢の一つかつはあるつてことや」

「ずるずるといづどんを口に食む。

「…………夢…………ね…………。あんた、もしちょつとでも不審な素振りを見せてみなさい…………。そしたら…………」

ズズズズ…………！

美姫の周りにAEが揺らめく。

「私も…………許しませんよ…………」

す、と鋭い眼で衛助を見る弥生。彼女の身体からじんわりとAEが滲みでる。

そんな二人のプレッシャーを受けながら衛助は平然としていた。

「お前のHーTELは面倒やからなあ。和泉の能力も厄介やし。できれば敵にはしたくないなあ」

両手で碗を取り、じっくりと汁を飲む衛助。

「フン。一対一でも勝つ氣満々のくせに

「ひとり、と碗をテーブルに置くと衛助はこやつと口を歪めた。

「…………ありや…………バレてもーたか

「…………」

衛助からもA.E.が放出され、不可視のエネルギーがテーブルの間でぶつかり合つ。

ピシッ。

テーブルに置いてあつたコップにヒビが入つた。

不穏な空気が充満し、視線で互いに腹の底を探りあつ。

一触即発。そんな雰囲気の中、彼はへらへらと笑顔を見せた。

「ま、かつちやんに危害加えるよーなことはせんつもりやから、そんな怖い顔すんなや」

（グリフオルオはどうか知らんけどな……）

心中で黒髪オールバックの禍魂を思い、空を見上げた。そして眼を細める。

空の向いから何かが迫つてくる感覚。

（「ひいや…………。一騒動ありそつやな…………」）

おかしい。

チラツ。チラツ。

じーー。

辺りから感じられる視線。

ちゃんと制服に着替えたのに……。

どこか違うのかと自分の姿と女子生徒を見比べてみる。しかし、同じだ。なんら変わるとこはない。

そこで私はあることに気づいた。

気づいてしまった。

そうだったのね！？ 私があまりにも美人すぎるから注目されているのね！？

自分の美貌を恨む瞬間だった。

しかし、悪い気はしない。

「ふふん」

心なしか足取りも軽くなる。

だが、その時だった。

いきなり体を舐めつけるような不気味な氣味の悪い視線を感じる。

背筋にぞくりと悪寒が走った。

思わず振り返る。

踊り場から階段へと誰かが動いた影が見えた。

……金髪？

金色の髪の男子生徒だったようだが……。

……氣のせい？

後ろを気にしていると、

「あの……」

いきなり前から男子生徒に声をかけられた。

顔を戻すとそこにはウルフヘアーの男子生徒が立っていた。

傍には一人の女子生徒もいて「もうっ、やめときなって」とか言つてゐる。

「わ、私？」と私は自分の顔をさした。

גַּתְּתָה

どうやらやはり私も嬉しい。

「あー、密しい者じゃなくて……。ひとつ情報収集……あ、いいや。お話をうてね。留学生か何かかな?」

「充分怪しいと思うわよ」

眼鏡をかけた女子生徒が言った。非常に同意したい。

תְּהִלָּה

私は迷いもなく、きつぱりと答えた。

「今年から留学生がきてるって噂を聞いてたけど本当だつたんだ~」

なにかの映画で見たような髪型の女子生徒がほわーっと私を眺めて言う。

「何組なんですか?」と再び男の質問。

困つた。

「一年二組……かな?」

適当にトウヤのクラスを書いておこうとした。

「へ……？ それって俺たちのクラスだけど……」

一人の女子生徒も私のことをぽかーんと見て いる。

は……親戚、そう親戚のクラスだつたかな？」「…………。あー、えーっと、勘違いしちやつたかな。一年三組

「親戚つて?」と映画に出演していた子が今度は質問していく。

卷之三

いいや。

えーっと、片桐トウヤつていつて

「は？ 悼矢の？ マジで？」
悼矢から親戚が高校にいるなんて何
も聞いてないけどなあ」

「片桐くんって意外に秘密主義だからねー」と苦笑いをしている眼鏡の女の子。

「ああ。言い忘れてた。俺は七橋鍊太郎。悼矢の友達なんだよ」

私は本田睦用。
よろしくね。

「古河来留季よ」

「わ、私はリタ。リタ＝ルクライル」と握手を交わす。

「参ったなあ。俺がまさかこんな美人を見逃して居るとは……波科高校三大美女に変動が起るかも知れない……」

ふーむ、と悩んで居るレンタロー。

や、やばい……。これは後でトウヤに怒られる……！

脳裏にガオーと怪獣のように火を噴くトウヤの姿がよぎった。

だああっと背中に脂汗が吹きでる。

私は早々に話を切り上げることにした。

「え、えっと……私、やうなくちやいけないことがあるから……」

「ええー、そいつはなよ」

「もうひ、リタさん困つてゐるでしょー」

「ははは……。『めんね……』

と歩き出でたとしたまさにその時だった。

ぐいっと誰かが私の首根っこを掴み、ぐいと首が絞まる。

「ぐえい！」

振り返るとそこには私の主人様が立腹な顔で私を見下ろしていた。

「何ひとつ、やせぎはー、お詫せー。」

ひーん！ 時すでに秋ーーー。

「何しどんじゃ、お前は！」

俺はリタの首根っこを掴んだ。

怒りを込めてリタを見ると、リタは俺の顔をみてがくがくと震えだす。

「なんだこの格好は！？」

「えつと、あ、えと、これは、その……」

「ああん！？」
きいこえねーぞ！
お前、自分が何やつてるか分かってんのかー？」

俺は口から火を噴かんばかりに怒鳴り散らす。

びぐびぐ。

リタが米粒みたいな目をして、口をにし、だあああつと涙を流す。『ごめんなさい』と小さく何度も呟いていた。

「いや、片桐くんっ！ 女の子イジめちゃダメでしょ！」

そこで俺は気づいた。

なんとつたの田の前には見知った顔三つ。

鍊太郎、本田、古河来が立っているのだ。

「あれ……お前ら、なんで……」

リタと本田たちを交互に見やる。

「親戚で留学生なんだって？ なんで教えてくれなかつたの～？」

本田の摩訶不思議な言葉。

つににそこまでボケたか、本田。

やつ思つてから俺はピンときた。

リ、リタのやつ……嘘八百を……！

思わずリタの首を掴んでいる手に、きゅうと力が入る。

「「めんなさい」「めんなさい」「めんなさい」……！」

揉むように手を合わせてくるつた。

まつたぐ、ここは……。

やれやれと俺はため息を吐いてリタの首根っこから手を離す。すると安心したのかリタはほつと胸を撫で下ろしていた。

「まさか隣クラスに転校してきた留学生が悼矢の知り合いだとはな

「は？ 留学生？」

俺は眼を点にする。留学生がきてくるなんて話を初めて耳にした。

「知らないのか？ うちのクラスの隣に転校しきた留学生」

「いや、違うんだ、鍊太郎。こいつはその留学生とは別物だ」

「あれ？ 違うんだ？」と古河来。

「ああ。ちゅうとこいつ、うちの家庭と訳ありでな。一応、親戚つてかたちにはなってるんだが、本当は俺の親父の妹の向かいに住んでるおばさんがよく行つてた酒屋さんにいる叔母さんに似てている宅配屋さんが病気で入院してる病院がリフォーム中なんだよ。ところが、この酒屋さんに住んでいるお兄さんと俺の妹が結婚した旦那さんが産んだ子供の孫と親父の妹の向かいに住んでるおばさんの隣の家に住んでるお姉さんがはとこでな。今、地球温暖化が危ぶまれているんだよ。

このままだと地球がまずいだろ？

「え、あ、えつと、まあこのかな？」

「ん、あー、温暖化はまずいよな？」

へぬへぬと皿を回していく本田と鍊太郎。

明らかに混乱していた。

「まあいんだよ！ もしかしたら、お前たちにバレたことでも地球温暖化に拍車がかかつてしまつかもしれない！」

「なんだかよく分からぬ複雑な関係だけど、大変なんだな、リタちゃん……！」

「なんだかよく分からぬ複雑な関係だが、大変なんだな、リタさん……！」

田を回しながらそう言つ二人。

馬鹿なやつらで良かつた。

「いや、ツツ『ミビ』りありまぐりでしょ」と古河来が一人だけ納得していなかつたが。

「とにかく俺たちは温暖化から逃げるから、あとよろしくな

「ああ！ 任せろ！ 冷房をつけて地球を冷やせばいいんだな！」

「任せといてよ、片桐くん！ 地球を守りうよ！」

田を回したまま意氣込む二人。

今、セーブアースの旗を掲げる二人の戦士が立ち上がつたためたしめでたし。

「温暖化よりも一人の将来が本気で心配になつてきたわ……」と額に手をあてる古河来。

そんな三人を置いて俺はリタの手を引いて走りだした。

しばらくして俺たちは中庭にいた。

俺は腕を組み、無言でリタを見下ろしていた。

リタはつーんとした感じで、横を向いて立っている。私悪くないもん、という雰囲気だが、その頬には脂汗が浮かんでいた。しかも、ちらりと目線だけで俺の顔色を伺っては再び視線を横に戻す。

何してるんだろう、とクスクス笑いながら女子生徒の集団が通つたが気になどしない。

彼女らが離れていくて若干の沈黙の後、俺は言葉を口にした。

「なんでお前、学校に来たんだよ。色々とやらせやしないのは分かってるだろ」

「わ、分かってるわよ……それくらい。でも」

言葉を濁す。

「でも？」と俺が促すとリタは視線を反らしたまま口を尖らせた。

「だつて、弥生がトウヤのガツコーに行くって言つから」

「…………。そういうことか。

つまりまた『あんたが行くなら私も行くわよー』って対抗心を燃や

して弥生さんに会ってきたわけか。で、来たはいいが俺に会つてよりも校舎に興味を惹かれてふらふらと見学してた、と。

なんとも単純な思考だった。

俺は『はあ』とため息を吐いて、腕組みをやめた。

「いいわよ、反省してるわよ！ 言いなさいよ！ 言いたいことがあるなら言こなさこよ！ 騙す雑言だろ？ が誹謗中傷だろ？ が受け止めてやるわよ！ えーえー、私が悪かったわよ！ 全部私が悪いのよ！ 地球温暖化だって私が原因よ！ 冷房をつければいいんでしょー？」

なにムキになつてるんだ、ここつせ。つか、お前が原因だとしたらどうな肺活量で二酸化炭素排出してるんだ。そして冷房はつけるな。

「悪いと思つてゐなうれでいい。これ以上俺から言つひとはねーよ」

説教されると思つていたりしゃべりタは少し肩すかしにあつたような顔をした。

「……怒つてないの？」

「怒つてゐる」

「うぐう」

「でもなくやつてやるとこタは少し身を引いていた。

俺は中庭に置いてあるベンチに座る。

「ほり、座れよ

言われ、リタも素直にベンチに座った。反省していると言つた手前、意地を張る気にもならなかつたらしい。しかし、彼女なりの精神一杯の反抗なのか、リタはベンチの端に座つていた。俺を避けるかのようだ。

「何もそんな遠くに座らなくてもいいじゃねーか！」

客観的に見ても不自然としか言ひようがなかつた。

「ふん

両手を膝の上に乗せたまま、ぶつとあらぬ方向を向く。

「おい、リタつてば

「.....」

無視。

つーん。

俺は立ち上がり、自販機を指差した。

「何か飲むか？」

「午後ティー」

……ちやんとそういうことには答えるのね……。

中庭に設置してある自動販売機に小銭を投入して飲み物を選ぶ。片手で一本の缶を取り出し、一本をリタに放った。

ちなみに、午後の紅茶のレモンティーである。リタはミルクティよりもレモンティーが好みなのだ。

俺は再びベンチに座る。だが先ほどのように間隔を開けてではない。

リタの真横に座つたのだ。

「ちよ、ちよっと……！ 近いわよ……！ もつと離れてよー！」

慌てたように顔を赤くして俺の肩を押していく。

「あのなあ。付き合いたてのカッフルじゃねーんだぞ……」

「だ、だつて……！」とキョロキョロ周りを伺つている。

周りにはちらほら中庭で昼食をとっている生徒たちがいるが、俺たちを気にしている人などいない。リタを眺めている男子生徒はいるが、姿形だけならばリタは言つ事なしの美人なので思わず見とれてしまうのも仕方ないだろう。俺だってこんな奴を街で見かけたらそりや目線もいくつてもんだ。

それに、リタを見ている彼らにはきっと俺という存在は映つていな

いだろ。」

「家じや破廉恥な格好でうわいわしてゐる時もあるだろーが。何を今
さら恥ずかしがつてんだか……」

「それとこれとは話が別なのよー。」

「堂々としてりゃーいいんだよ。キヨロキヨロしてると不審に思わ
れるぞ。それでなくともお前は金髪だから目立つてのこ

「…………もうこいわよ

リタがフルトップをカチャと開ける。

「…………」レモンティイーが喉を嚥下する音が隣から聞こえてくる。

俺もHメラルドでマウンテンなホールーの飲み口を開け、口をつ
けた。

「ぬいぽー、ぬいぽー。

Hサをくれるとでも思つてゐるのか、ハトが俺たちに近づいては
離れ、近づいて離れを繰り返している。

ハトに氣づいたリタが「ん」とポケットから何かを取り出した。

クッキーだつた。しかもどう見てもこよりが作ったりしき手作り
感のあるクッキー。それをパキと折るとハトへと放る。

「お前……持ち歩いてんのか」

「」よりのクッキーは一枚で一 メートル走れるわ

「キャラメルの代表作であると」のグリ」を超えた！？

「きつとい」のハトは今日、大気圏を突破して宇宙へと飛び出すわよ

「お前、某エネルギー・ドリンクのCM見すぎだわ」

強いてはテレビの見すぎだ。

「ねえ」

「あん？」

「ハトが豆鉄砲食らつたような顔をする、つてあるじゃない？」

「あー、『トワザの。いや、慣用句か。

確かびっくりする、とかいう意味だよな

「あれつてさ。人間が食らつたらどんな顔するのかな

クッキーの破片を持つたまま俺の顔を見ているリタ。

俺は彼女の手から視線をあげて彼女の顔を見た。

リタの眼は好奇心といつも輝きを放っていた。こんなところでも無駄な知識欲を出さないでもらいたい。

「やめてください」

「ちがい」 といひかつまんなぞひと言ひ。

持つていた破片は結局、ハトの腹に収まる」ととなつた。

「ひしひ一人でのんびりするのは久しぶりね」

唐突にリタがそんなことを言つた。

「トウヤは学校で毎日忙しいし、休日はAESでかけたり、禍魂討伐に参加したり、賞金首探したり……」

「最近は色々と忙しくなったよ。暇で暇でしょーがなかつた頃が嘘みたいだ。お前に出会う前と比べたらすっかり環境がガラリと変わっちゃってるし」

かたや普通の学生生活。かたや化け物相手に戦う日々。これで生活リズムを変えるなと言つ方がどうかしている。本格的に鍛えるようになつてからだいぶ体つきも変わってきてる事も自分で分かっていた。

「私と出合つ前はどんなだつたのぞ」

そんなリタの質問。

俺は彼女の問ひに空を見上げた。

「やうやかなー。鍊太郎とふらふらしてゐるか、家に帰つてゐるか、ってことひだな……」

「あんた……私にだらだらするなとか言つ割に自分だつてそつだつたんじやないのよ」

じとりと横から睨まれ、俺は少し彼女の目線から顔を反らす。

「…………

確かに……。このままこの話を続けるとリタに注意しても『あんたが言うな!』と反発される確率を高めるだけのよつなので俺は話を変えることにした。

「変わったといえばお前もだいぶ碎けてきたよな。最初は気を張つてたつていうか……必死だつたつていうか……かなり張り詰めてたじゃねーか」

「だってあの時はこの世界で何が起こってるのかも分からなかつたから仕方ないじゃない。今より禍魂やエーテル使いが活発に動いていたし」「

バリッとクッキーを両手で持つて齧る。リタの性格からしてもつとガツガツとがさつに食べるのを想像してしまうのだが、割と食事に関しては丁寧に食べる奴なのだ。どうやら親のしつけはかなり厳しかつたらしい。

両手でクッキーを持つてはむはむと口をつけている様はどこかリスみたく見える。

相変わらずうまそうに食つ奴だな……。

「この世界に慣れてきたつてことか」

俺の視線を感じたのかリタが俺の方を見た。

「トウヤも食べなさいよ。私一人で食べてる得意汚い女の子だと思われるわ」

と新しいクッキーを俺に渡してくれる。

「正直有難い。昼飯の途中にお前が来てるって聞いて飛びだしてきたからな」

クッキーを齧ると、バターの風味と塩味が口中で広がった。確かに一メートル走れそうなぐらいにまじに……。料理作りは得意でもお菓子作りはあまりしなかったことよりも、またスキルを上げたらしい。リタのようにおいしさと言つて食べててくれる人がいると作りがいがあるのかもしね。

俺がもくもくとクッキーを食べていると、

「むづ。食べるの下手くそね。ポロポロ零してるじゃない

「んお?」

リタがぽんぽんっと俺の膝に落ちたクッキーの破片を拾つた。

「あーもづ。口の周りにもつこいな。しつかりしなきよ

と、俺の口へと手を伸ばして破片をとる。

「お、おこ……」

そのままでも親密であるかのような対応に俺は顔が熱くなってしまふ。

「へ……？ あ……」

リタはリタで自分のした恥ずかしい行動に気づいたのが破裂をとつたまま、顔を赤くして固まっている。

「な、なに顔赤くしてんのよ…」

「お、お前がいきなり変なことするからだろ…」

「親切でやつてあげたんじゃないのよ…」

お互に茹鶴のように顔を赤くしてわやーわやーと騒ぐ。

「ほんなん恋愛漫画みたいな」とわれたら誰でも顔を赤くするつての…」

「れ、恋愛い！？ あんた私をそんな風に見てるわけ！？ ハーテルをなんだと思つてるのよ…」

「みてねえーって！ 誰がお前みたいな猪突猛進な女を恋人にしたがるんだよ…」

「なんですかーー！？ 私が恋人じゃ不満なわけ！？ えー、えー、いいわよ、分かったわよー 一生、弥生とくんずほぐれつイチャイチャしてなさいよ…」

「何もそこまで言つてないだろ…」

「なにさなにさー いつもテレテレしちゃつて！ そんなに大きなおっぱいがいいわけ！？」

「テレテレなんてしてねー！ 確かにふくよかな胸は魅力的……つ

てやうじやなくて……！」

「……つ！ バカ！ 変態！ とへんばく……！」

ぽかぽかぽかっ！

リタが両の拳で俺の頭を叩いてくる。

「こりー やめりー いの馬鹿力女！」

ぎゅーぎゅー！

「はあはあ……」

「ハアハア……」

「つ、疲れた……」

「同じく……」

「はあ……」

深いため息を吐くリタ。

「どうして私たちってすぐ喧嘩になるかなあ

ぱつっと駆けよつてつらひてリタはちいと小石を蹴飛ばした。

「お前、実は俺のことが嫌いなんじゃないのか」

「嫌いならそもそも契約なんてしないわよ」

言つてからリタはバツといひながら向を直る。

「だ、だからって好きとかそーゆーのじゃないんだからー、か、勘違いしないでよねー!？」

顔を赤くしてリタは慌てたように付け足した。

「何も言つてねえつて」

「や、それなりいのよ……別に……」

静かな沈黙が降りる。

「つふふ」

「あはは」

「」からか楽しそうな声が聞こえてくる。視線で探すと中庭の芝生に一人の男女が座つて談笑していた。

幸せそうに笑いあつてゐる。

平和を感じた。彼らは禍魂なんて化け物がこの世界にいる事を知らない。そして、俺たちは彼らが感じてゐるよつた平穏を守るために戦つてゐる……と言えば少し大袈裟、か……。

だが悪くない。

彼らのような人間の平穏を守るという役割も悪くないと思つ。

「もひ。あんまりジロジロ見ちゃ失礼だつて……」

「あ、ああ……」

窘められ、俺は慌てて彼らから視線を外した。だが失礼だと言つたりタ本人も芝生の一人から目線が離れていない。

「ねえ……トウヤ……」

「あん?」

「私が人間に生まれてたらどうだつたのかなー……」

「は?」

いきなり何を言いだすんだ、こいつは。

「こんな風に制服着て学校通つてや……。トウヤと知り合つてたら、どんな風になつてたのかなつて……」

そりやまた面白い想定が出たもんだ。

「……まあ、まず喧嘩してるだろうな」

俺の返答にリタは笑つた。

「あはは、言えてる。それで、もう一度と顔もみない、喋らない、とか?」

「そこまではいかなくとも、今みたく一つ屋根の下つて感じこな
つてないんじやないか」

「……じゃあ今までいいや」

「あん？ なんだつて？」

リタがいきなり小声になつたもんだから聞き取れなかつた。

「なーんでもないわよー」

『いつて』『わーん』とのびをする。

「トカナ

「んー？」

「弥生と、契約する気？」

「あー……」

俺は頬をぽりぽりと搔いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9484j/>

Dance of Aether's! ~激情のメリーゴーラウンド~

2011年12月27日21時50分発行